國立政治大學日本語文學系碩士班

碩士論文

指導教授：黃錦容博士

國立政治大學
National Chengchi University

男の擬態と女の不良

—太宰治後期の女語り小説

『ヴィヨンの妻』『斜陽』『おさん』に見る女性表現—

研究生：陳偉樺 撰

中華民國九十九年七月

男人的擬態與女人的不良

—太宰治後期女性敘事小說《維榮之妻》《斜陽》《阿三》中之女性表現—

摘要

本論文對於太宰治後期表達女性生命力的作品進行研究。這些作品雖是男性作家所書寫的作品，但是敘事者是由具主體性的女性所發聲而與男性的言論進行對抗，並且重新構築在制度內被他者化・差別化的女體性。筆者著眼於這些問題點並進行考察。對於在太宰的女性敘事小說中的「男人的擬態」與「女人的不良」這種相對化構造上對峙的女性表現的表象上，檢驗太宰治的性別差異的構造並進行新的定位。

國立政治大學 National Chengchi University

男の擬態と女の不良

―太宰治後期の女語り小説『ヴィヨンの妻』『斜陽』『おさん』に見る女性表現―

要旨

本論文は太宰の女の生命力を示した後期の女語りの作品を集中的に研究しようと思う。これらの作品において、男作者の書く行為による作品であるが、語りそのものは女性が主体性を持って発声し、男の言説に対抗し、制度内で他者化・差異化される女体性を再構築しようとする文体表現となる。筆者はそのような問題に注目し、考察を試みる。結論として、太宰の女語り小説における「男の擬態」と「女の不良」という相対図式で対峙し合う女性表現の表象に、太宰治における性差の構造を検証し、新たな位置づけを試みようとするものである。

國立政治大學 National Chengchi University

謝辭

本論文能順利完成全都要歸功於指導教授黃錦容教授給我的多方協助，不論是在研究方法或是文獻收集與整理方面，都給了我很多建議和協助。而在論文進行中所遇到的種種難題，也全靠老師的指導與鼓勵才能讓我走到最後。對於因爲私人的因素不得已而休學的我，老師更是經常關心我並勉勵我早日回來完成學業，正因爲老師從沒放棄過我，所以最後我才有勇氣與動力完成這本論文。跟著老師學習的過程，不僅學到了研究的方法，也學到了很多待人處世的道理以及勇往直前的精神，我想我不僅是完成了一本論文，也完成了人生的一個歷練，千言萬語也無法表達我對黃錦容老師的感謝。

論文口試時黃翠娥老師及陳美瑤老師的建議也讓我獲益良多，使我發現到一些之前沒發現到的問題點，讓我在最後修改時能夠再好好重新審思一遍本論文的不足之處，在此要特地謝謝兩位老師撥冗讀完我的論文並且給了我許多寶貴的意見。也要感謝從大學到研究所時期教導過我的許多位老師，讓我有用日文表達的能力並且認識了許多研究方法和面相，這些都是奠定這本論文的重要基石。還要感謝日文系辛苦的助教賴庭筠學姊，經常不厭其煩地替我解答學校事務上的種種問題。

還要感謝我的女朋友陪伴我走過一路上的風風雨雨，她的陪伴一直是我心靈上最大的支柱。也要感謝大學及碩士班的許多同學，給了我許多學生時代的美好回憶，更在我迷惘困惑時提供我許多建議及幫助。還有搖滾樂社等許多一起玩過音樂的朋友，陪我渡過了年輕又焦躁不安的歲月。

最後要感謝我的家人，栽培我到這麼大，讓我能受高等教育並完成學位。而在攻讀學位時祖父及父親相繼去世，無法讓他們親眼看到我拿到學位的這一刻，是我最大的遺憾。但是我相信他們在天之靈一定也能感受到我想與他們分享的這份喜悅，以及感謝他們養育我長大的恩情。

國立政治大學 National Chengchi University

男の擬態と女の不良

―太宰治後期の女語り小説『ヴィヨンの妻』『斜陽』『おさん』に見る女性表現―

目次

第一章、序論 ……1
1-1．研究動機……1
1-2．研究目的……2
1-3．先行研究……4
1-3-1．妻という他者――母性によって男が救われるものか……4
1-3-2．聖母と娼婦と悪女――女装した語り手が制度を超越し得るものか……6
1-3-3．男女の性差の表現――不幸な夫と幸福な妻……7
1-4．研究方法……9
第二章、『ヴィヨンの妻』における悪女の幸福 ……10
2-1．異化される母性と娼婦性……10
2-2．軟弱な男の聖母憧憬……16
2-3．制度からの脱出の両義性……21
第三章、『斜陽』における悪女の革命 ……25
3-1．書く女の戦い……26
3-1-1．生きていくための不良 ……26
3-1-2．恋と革命――恋をして不良になり得るか……32
3-2．不良たるものの意味……40
3-2-1．書く男の介入の意味――直治の遺書……40
3-2-2．母性の達成――道具立てとしての男……45
3-2-3．悪女の聖母憧憬―滅びていく母と生き延びていく娘……49
第四章、日常性からの反逆――『おさん』における家庭的な女の視線……54
4-1．夫の死を眺める妻の冷ややかな眼 ……54
4-2．革命家の夫を批判する妻の日常性 ……59
5-1．滅びて行く弱い男たちの観念性 ……65
5-2．強い生命力を持った女たちの日常性 ……69
5-3．他の関連作品との対照……72
第六章、結論 ……78
参考文献（年代順） ……80

第一章、序論

1-1．研究動機

太宰治を論じる場合には、通説的になっている三期区分が一般的である。奥野健男は大きく三つの時期[1]を分けられるという。前期は一九三二年（昭和七年）の『晩年』から『虚構の彷徨』を経て、三五年の『ＨＵＭＡＮ　ＬＯＳＴ』までの四年間である。中期は三七年の『満願』より『東京八景』、『新ハムレット』などを経て、四五年の『惜別』、『御伽草子』までの九年間である。後期は四五年の『パンドラの匣』より『ヴィヨンの妻』、『斜陽』を経て、四八年の『人間失格』『グッド・バイ』までの三年間である。それぞれの時期の作風についても、渡部芳紀は以下のように述べている[2]。

> 前期は、太宰の二十歳代の時に当り、青春の情熱と感傷が表出された時期であり、様式の上からも様々の試みがなされた。中期は、彼の三十代に当り、安定した生活の上に立って、明るく、健康な、落ち着いた作品を多く書いている時期である。後期は、戦後の三年間で、その初めは、新しい世界到来の明るい希望を語ったが、その後、戦後世界の混乱に絶望し、世俗に対して必死の抵抗と批判を試みた時期である。

中期の太宰文学はまことに上昇志向のものが多く見られ、その中で特に女性の第一人称による告白体の文体の試みが注目され、後期に至るまで太宰の文学の表現上で最も重要な文体となっている。『燈籠』（『若草』昭和十二年）からはじまり、後期の名作『ヴィヨンの妻』（『展望』昭和二十二年）から太宰文学の集大成といえる『斜陽』（『新潮』昭和二十二年）にいたる、太宰が最も得意とする文体である。しかし、一人の小説家がなぜそのような語りを必要としたのか。それ自体が問題になるのだろう。もともと太宰自身が男でありながら、あえて女に変身して、めんめんと語ろうとするという作家の創作意識及びその策略の操作などが興味深いものだと思われる。その女語りによって、太宰の表現意図は何であろうか。また、男性作家にあってはそのような表現方法をなぜ必要とするか。そして、その表現効果によって作家の策略は本当に女性の主体性を表現され、男の言説と相対化されえるものか。それとも依然として、ただ男（作品内部の男たち、ないし書き手の太宰自身という両義的な意味）の自己表出の一つの擬態に過ぎないのかなど、十分、再検討・再考察する研究価値の

---

[1] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.60

[2] 渡部芳紀「太宰治論――中期を中心として――」『太宰治Ⅱ』日本文学研究資料刊行会、有精堂、1985.9、P.27

ある課題だと思われる。

1-2. 研究目的

敗戦後、津軽から上京後の太宰は「道徳」を口にすることが多くなり[3]、彼なりに新しい「道徳」への希求の表れとして窺える。しかし、その「道徳革命」というのは「トランプ遊びのやうに、マイナスを全部あつめるとプラスに変るといふ事は、この世の道徳には起り得ないことでせうか」(P. 43[4])(『ヴィヨンの妻』)というように観念的であり、「気の持ち方をくるりと変へるのが真の革命で、それさへ出来たら、何のむづかしい問題もない筈です」(P. 284[5])(『おさん』)というように感覚的なものである。戦後の太宰は『冬の花火』(昭和二十一年)の継母や『斜陽』の母のように、優しい母性的な女性を書く一方で、『ヴィヨンの妻』の妻、『斜陽』のかず子のように、既成道徳を破壊して生きようとするアナーキーな女性を描く。女の強さや生命力のようなものを描いた作品も目立つ。『ヴィヨンの妻』、『女神』、『斜陽』、『おさん』などにそれを見ることが出来る。『女神』には、今は「男性衰弱時代」[6]だから「女の力にすがらなければ世の中が自滅する」[7]といって、自分の女房を女神として信仰している狂人細田氏が書かれている。狂気の細田氏の言葉によって、男性の精神と肉体ともに疲労して、女性の時代が顕現し始めるということは示されている。奥出健は『女神』について「これこそ戦後思想の一端を示すものであり、戦争に見た男性論理の不毛の反省と今後は融合する男女の世界が必要、という理論は作者の願う世界だったともいえるだろう」[8]と述べている。東郷克美氏も太宰戦後の女語りの作品における思想について以下のように論じる。

> 彼女(筆者注:『女生徒』の女主人公)の中にはつねに、各人の「個性みたいなもの」をはっきりと「体現」することを許さない世間や世間のモラルに対する違和感がある。そういう違和感をもつことを、母は「不良みたいだ」といい、亡くなった父は「中心はづれの子」だといった。本当に自己に忠実に生きられるように「早く道徳が一変するときが来れ

---

[3] 三好行雄『太宰治必携』、学灯社、1988.7、P.46
敗戦直後、津軽疎開時代の太宰治は、「新現実。/まつたく新しい現実。ああ、これをもつともつと高く言ひたい」」(『十五年間』)と叫びつつ、「サロン思想」を糾弾し「アナキズム風の桃源」」(『苦悩の年鑑』)を夢想する。しかし、それが「ばかばかしい冬の花火」」(『冬の花火』)に過ぎなかったという幻滅を抱いて上京してからの太宰は、急速にペシミスチックに傾いていく。「新現実」や「ユートピア」を口にすることはなくなったかわりに「道徳」を問題にすることが多くなる。
[4] 太宰治『太宰治全集　１０』、筑摩書房、1999.1(以下『ヴィヨンの妻』の引用は同じ)
[5] 太宰治『太宰治全集　１０』、筑摩書房、1999.1(以下『おさん』の引用は同じ)
[6] 太宰治『太宰治全集　１０』、筑摩書房、1999.1、P.81
[7] 太宰治『太宰治全集　１０』、筑摩書房、1999.1、P.81
[8] 神谷忠孝・安藤宏・奥出健『太宰治全作品研究事典』、勉誠社、1995.11、P.281

ばよいと思ふ」という彼女の願いは、太宰の中にずっと底流していって、やがて戦後の『ヴィヨンの妻』の「人非人でもいいぢやないの、私たちは、生きてゐさへすればいいのよ」という大谷の妻のことばや、「おさん」における「道徳も何もありやしない、気持が楽になれば、それでいいんだ」ということば、そして『斜陽』のかず子の「道徳革命」となって噴出するものの萌芽だとみてよい[9]。

それは太宰の道徳への懐疑の問題を、しばしば女の感覚を通して表現した創作方法から来るものだろう。さらに「明日は、どうなつたつていい」(P. 180[10])と言う女の虚無的な強さについての認識は、戦後の『ヴィヨンの妻』や『おさん』の方向へ深まっていくものである。これも、中期・後期を一貫するものが、底流していたことを示すものである。そして、鳥居邦朗は『斜陽』における「道徳革命」の担い手が女性であることについて「太宰には、女性の生命力というものに対しては、一種の信仰のようなものがあったと思われる」[11]と述べている。妻の形象そのものについて、相馬正一は、『ヴィヨンの妻』、『斜陽』、『おさん』はいずれも「女主人公に力点が置かれ」た作品だとして、「楽天的で強靭な生命力を持った母性的な女の生きざまを描いている」[12]と評価する。一方、例の作品における男主人公はどうであろうか。たとえば、『ヴィヨンの妻』の夫大谷は「生れた時から、死ぬ事ばかり考えていた」(P. 42)と言った、『おさん』の夫は自分を革命家として、「自分の死が、現代の悪魔を少しでも赤面させ反省させる事に役立ったら、うれしい」(P. 284)といって、自殺した。さらに、『斜陽』における、いつも「黄昏」(P. 241[13])を口にする無頼作家上原や、自分が「貴族」(P. 261)といって自殺したかず子の弟の直治だと、いずれも死を意識した男たちである。彼らは作中の女たちとは絶好の対比となるだろう。女たちは夫(或いは恋人)の言動と自滅への過程をあくまでも傍観者として傍らから見つめて語る。つまり、男たちが自身の観念的な自意識におぼれて、自滅する下降意識と相対化された形で、女たちは奔放な野性的な生の力を持っていて、道徳を破っても生きて行こうとする上昇的な意志を表現している。

本研究は太宰の女の生命力を示した後期の女語りの作品を集中的に研究しようと思う。これらの作品において、男作者の書く行為による作品であるが、語りそのものは女性が主体性を持って発声し、男の言説に対抗し、制度内で他者化・差異化される女体性を再構築しようとする文体表現となる。筆者はその

---

[9] 東郷克美「太宰治の話法　女性独白体の発見」、『日本文学講座 6　近代小説』に収録、日本文学協会編、大修館書店、1988.6、P.319
[10] 太宰治『きりぎりす』に収録(以下の『皮膚と心』の引用は同じ)、新潮社、2005.12
[11] 鳥居邦朗「斜陽」、『作品論太宰治』に収録、双文社、1974.6、P.348
[12] 相馬正一『評伝太宰治』第三部、筑摩書房、1985. 7
[13] 太宰治『太宰治全集　１０』、筑摩書房、1999.1(以下『斜陽』の引用は同じ)

ような問題に注目し、考察を試みる。結論として、太宰の女語り小説における「男の擬態」と「女の不良」という相対図式で対峙し合う女性表現の表象に、太宰治における性差の構造を検証し、新たな位置づけを試みようとするものである。

1-3. 先行研究

1-3-1. 妻という他者――母性によって男が救われるものか

東郷克美の分類によると、後期の女語りの作品は『貨幣』（昭21.2）、『ヴィヨンの妻』（昭22.3）、『斜陽』（昭22.7～10）、『おさん』（昭22.10）、『饗応夫人』（昭23.1）[14] などである。『ヴィヨンの妻』『おさん』は同じく妻の視点を通して語られている。『斜陽』は華族の娘かず子の語りが中心となる。ただし、『貨幣』は女性に見立てた百円紙幣が自身の見聞を語る童話風の短編である。また、『饗応夫人』は病身をも顧みずにひたすら散財し、来客を饗応する一人の奥様を描いている。『ヴィヨンの妻』と『おさん』は妻の「私」の自己語りであり、『斜陽』はかず子という「私」の一人称語り手となる。『ヴィヨンの妻』、『おさん』、『斜陽』の三篇は前節で触れたように、いずれにしても強靭な生命力を持った母性的な女の生きざまを描いている。

そして後期になると、中期のような未婚の若い女主人公の姿などがみられない。坪井秀人は太宰の女語り作品を検討し、「『饗応夫人』以外は、実質的な主人公と語り手とはほぼ一致しており、その意味では女性独白体というスタイルが女性の（概ねは独白の）声を通して女性の内面を語るという意図を負ったものと見て差し支えないだろう」[15]という。そして、女は男を「反照する鏡の役割[16]」をもっている。さらに中期の女性は弱者のふうにみえているとし、戦後作品にも「弱者としての女性に潜在するしぶとい生命力のようなものを書いた作品は少なくない」[17] と示している。

女性としての生命力以外、戦後の女語りに属する作品も変貌した。戦後に入ったら、その中期のいわゆる「安定と開花の時代」[18]の時期を経て、戦後の女性独白体の作品を中期の同じ女性独白体で書かれた『きりぎりす』(『新潮』昭

---

[14]東郷克美「太宰治の話法　女性独白体の発見」、『日本文学講座6　近代小説』に収録、日本文学協会編、大修館書店、1988.6、P.311

[15] 坪井秀人「語る女たちに耳傾けて― 太宰治女性独白体の再検討」『国文学解釈と教材の研究』學燈社、2002.12、P.23

[16]坪井秀人「語る女たちに耳傾けて― 太宰治女性独白体の再検討」『国文学解釈と教材の研究』學燈社、2002.12、P.24

[17]東郷克美「太宰治の話法　女性独白体の発見」、『日本文学講座 6　近代小説』に収録、日本文学協会編、大修館書店、1988.6、P.326

[18]奥野健男「太宰治再説」、『太宰治論』に収録、新潮文庫、1984.6、P.109

和十五年）に比べれば、太宰治のなかで何が変わり、何が変わらなかったが推測できると思う。『きりぎりす』は画家としての地位と名声と金と引き換えに俗物になり果てた夫に失望した妻の別れの手紙である。『ヴィヨンの妻』を『きりぎりす』に比べて、曽根博義氏は以下のように述べている。

> 「私の心の中の俗物根性をいましめただけ」と作者はいっているが、芸術家が家庭を持つことによって陥りやすい危険を警戒しながら、その危険から自分を守ってくれるものを、ほかならぬ妻の反俗精神にもとめている。（中略）当時の太宰治は芸術のために家庭を反俗の砦にすることが可能だと本気に信じていたようだ。しかし戦後、その夢は瓦解する。夢は破れたが、芸術に賭ける意志と反俗精神だけは貫かれ、家庭は一転して恐怖と罪意識の対象になる。かつて『ヴィヨンの妻』になることを夢見、俗物に堕した夫に愛想をつかして家を出て行った「妻」は、いま、反俗に徹して家庭を顧みない夫「ヴィヨン」を、「ヴィヨン」のまま生に繋ぎ止めようとする役を担わされる[19]。

家庭の恐怖についても饗庭孝男は、青春期での彼の内なる「他者」は（多分に観念的で）あって、そうした「他者」は戦後に至って、二度目の妻と、二人の間に生まれた子供によって彼の眼前に、「おのれひとりの観念や夢想によって決して否定しえない『現実』そのものとして、はるかに具体的にあらわれたのである」[20]と述べている。

> かつてのマルクス主義よりもまして、この「他者」は、キリスト教への彼の関心の度合に応じて罪の意識を彼の内部に投影するものとなった。『HUMAN　LOST』のように「キリストの卑屈を得たく修業」するだけではなく、「義」のために、自分をとりまく、もっとも卑小ではあるが、動かしがたい「家庭」という現実を前にしなければならなくなったのである。（中略）かつての「自己喪失」は、ここに、「義」という自己超越の原理を衝迫力に、「家庭」という「地獄」を錘りとして現実との極度の緊張関係をその内実として生々しいほどリアリティを帯びて働きはじめたのであった[21]。

つまり、かつての太宰の観念にあった他者は、妻子によって具体化されていた。それは戦後の一連の家庭にかかわる作品が頻出することによって証明される。その一連の作品には『ヴィヨンの妻』や『おさん』は妻を主人公として造

---

[19] 曽根博義「女性独白体の魅力」、『近代日本文学のすすめ』に収録、岩波書店、1999.5
[20] 饗庭孝男『太宰治論』、小沢書店、1997.1、P.150
[21] 饗庭孝男『太宰治論』、小沢書店、1997.1、P.150

形する一方、『父』（昭和二十二年）、『家庭の幸福』（昭和二十三年）や『桜桃』（昭和二十三年）は夫を主人公として妻子との関係を描く。互いに補完する役割を持つことが明らかであろう。前述のように、「弱者としての女性に潜在するしぶとい生命力」に対して、一度社会という公の場で挫折した男が再び家庭内部という場に帰還し、今度は真正面から前述のいった「弱者としての女性に潜在するしぶとい生命力」と余儀なく対峙させられるようになる。男は社会進出によって得た体験や論理が女に全く通用しないばかりか、かえって女の生命力に圧倒された。

1-3-2. 聖母と娼婦と悪女――女装した語り手が制度を超越し得るものか

文学に描かれる女性像は、作家自身の女性観をおのずから反映するに違いないだろう。水田宗子は、母性、巫女性、娼婦性などの本質を持った女性像など、文学に描かれ、典型となった女性像についても論じた[22]。氏は「子を産むという性の機能と、制度化された女性の社会的役割に加えて、文学上の女性像の典型は、女性原理を証明する重要な根拠である」という。また、氏は女性像を探求しようとするなら、新しい視点の重要性を説くのであるその視点は、一つには「制度として女性を見る視点」であり、他は「女性の自我の表現という視点」であるという[23]。

> 制度として女性を見る視点とは、女性は男性と同様に制度内に生き、制度の制約の下にある生き方を選ぶ、あるいは余儀なくされるものと考え、女性の生き方を制度との関係において見ていく視点である。女性の生き方が、社会や歴史を超えて不変なものであるとは考えない視点である。制度に先行する女性の本質があるのではなくて、制度が女性をつくるのである。
>
> 女性の自我の表現を視点にすえる見方とは、女性の自我――その充足と表現への意志――を文学はなんらかの形で反映してきた、と考える視点である。女性の生き方がある形で提出され、女性像が形づくられ、あるいは女性の（本質）が語られる背後には、女性の自己主張と、その自己表現に対処する男性の自我および制度との葛藤があると見る見方である。

『ヴィヨンの妻』や『おさん』の主人公「私」は、いずれも家庭や家父長制度によって拘束されたり、制限されたりするが、生きようとする欲望を強く表す。それはまさに「夫」を圧倒する力だ。そのような制限の中で、太宰はどうやって女性の生命力を表現するか。そして、『斜陽』の「かず子」は「革命」

---

[22] 水田宗子『ヒロインからヒーローへ』、田畑書店、1982.12、P.24
[23]水田宗子『ヒロインからヒーローへ』、田畑書店、1982.12、P.25

を唱えたが、その成敗はどうであろうか。また、太宰自身は男性である上に、彼が女装して語った女性像はおのずから真の女性の自我表現や主張を表す女性像は差異があるに違いない。彼の「女語り」は所詮自分の中にあった女性を表明したり男主人公の役割を補完したりするのだろう。ならば、テクストの中で造形された女性像の作りは一体どこまでそのリアリティが確保され、再現しえるものかは問題になると思う。

なお、氏は文学上の典型となった女性像を以下のように三つに分類している。第一は、「社会内、あるいは制度内における性役割期待にもとづいて、制度的存在としての女性の理想像」である。第二の型は、「性役割期待に応えない、人並み以上の知性と自我を持ち合わせた女性」で、制度から逃れたり道徳を破壊したりする女性だという。第三の型は、「理想的な女性像を、特に救済者としての女性像を、制度外に、あるいは制度を超越する存在として描き出す形」である[24]。この三つの形によれば、『ヴィヨンの妻』や『おさん』の「私」、また革命を決意する前の『斜陽』の「かず子」はおそらく第一の型に属するだろう。しかし、物語の流れによって、その姿も不変的なものとは限らない。たとえば、『ヴィヨンの妻』の「私」は夫の目に映るイメージは救済者としての女神（それとも「こわい神様」として映るもの）だろう。しかし、椿屋で働いた「さつちゃん」の自己意識は犯罪者の意識が強く働くと思われている。また、「道徳革命」を決意したかず子は不倫や未婚妊娠そして出産、いずれも世の中の道徳破りの行為に違いないだろう。かず子が理想的な女性像（かず子の母）への思いを心の底に隠したり、不倫相手上原の妻を聖母のように思ったりしたが、「蝮」を心に住ませる悪女として生きていく。

1-3-3. 男女の性差の表現——不幸な夫と幸福な妻

戦後の太宰の文学のなかで、いかに多くの夫が死んでいったことか。『春の枯葉』の野中は、妻節子の「強さ」に抗議しつつ死んでいく。夫の抗議の意味を解し、「わたくしは、心をいれかへたのよ。これからはお酒のお相手でも何でもしやうと思つてゐましたのに」と、世間の倫理の束縛から解き放たれた妻のことばは、死んだ夫の耳に空しくひびく。『おさん』の夫も、「道徳や何もありやしない、気持が楽になれば、それでいいんだ」という妻おさんの心境にはなれず、妻に「つくづく、だめな人だ」と思われながら、ほかの女と心中してしまった。『斜陽』においても、上原は、「黄昏」を口にし、かず子は「朝」を口にする。渡部芳紀は「この生き続ける妻たち、女たちのなかに、太宰は、恐れと憧憬を抱い」[25]たと論じた。

---

[24]水田宗子『ヒロインからヒーローへ』、田畑書店、1982.12、P.26
[25]渡部芳紀『太宰治　心の王者』、洋々社、1984.5.12、P.277

夫には「不幸だけ」があり、妻の、そのような幸福は、己一個の幸福ではあれ、普遍的なものではなく「女には、幸福も不幸もない」のである。が、普遍的な幸福ではないとしても、妻の到達した地点が、一つの救いの場であったことは間違いなかろう。一切の世俗的な桎梏から解放された世界がそこにはあった。一つの新しい世界がそこには開けていた。「道徳なんてどうだつていい、ただ少しでも、しばらくでも、気持の楽な生き方をしたい、一時間でも二時間でもたのしかつたらそれでいいのだ」という「おさん」のことばも、その世界に通じてくるものだろう。妻にとっては、女にとっては、それが可能だった。しかし、夫にとって、男にとっては、それは不可能なのであった[26]。

つまり、『ヴィヨンの妻』の「私」のいう「幸福」や『おさん』の「私」のいう「気持ちの楽な生き方」、それに『斜陽』のかず子の「くしゃみが出るくらい幸福」とは、いずれもきわめて私的な「幸福」である。しかし、男の方はどうであろう。榊原理智は以下のように論じる

主人公のいう「幸福」とは、物語のこの時点に至るまでの主人公の性的・経済的システム内での作動すべてをさす、きわめて私的な「幸福」である。しかし、大谷の言説では「私」は「女」に言い替えられ、主人公の私的状況は男女の性差に関する、より一般的な言説に還元されてしまっている。大谷は主人公と自分のいる状況の個別性を、性差という一般性に吸収させてしまうことで、彼自身が置かれている個別な状況と対決することを避けているともいえるであろう[27]。

こういう状況は『斜陽』や『おさん』でも同じだろう。上原は「君たち貴族は、そんな僕たちの感傷を絶対に理解できない」と、「貴族」という一言で、世間に向かうことから回避しようとした。『おさん』の夫も同じで、「革命を起さなければいけないんだ、革命の本質というものはそんな具合いに、かなしくて、美しいものなんだ、そんな事をしたって何になると言ったって、そのかなしさと、美しさと、それから、愛」と、愛人や家庭のことをすべて紛らすのではないだろうか。つまり、男たちは状況がどう変わっても依然として観念の中に生きていて、女たちと正面から語り合うことを避け、真の意味で他者理解を求めようとすることなく、断絶を示しているのではないだろうか。

[26]渡部芳紀『太宰治　心の王者』、洋々社、1984.5.12、P.276
[27]榊原理智「太宰治『ヴィヨンの妻』試論――「妻」をめぐる言説――」、『日本文学研究論文集成 41　太宰治』に収録、安藤宏編、1998.5、P.210

1-4. 研究方法

本研究は『ヴィヨンの妻』『斜陽』『おさん』を中心に、太宰治の女語り小説における女性表現について分析したいと思う。研究方法としては、まず三作において視点人物に即して「女の言説」と「男の言説」の両方を対照させ、その間のずれや食い違い、空白や矛盾を引き出して、女（語り手）の視点によって、男の言説と男の擬態との虚偽性、あるいは男の弱さの制度性を忌憚なく曝け出していく有様を特徴として把握してみる。そして、それぞれの作品から語り手の視点から女の主題の構築のあり方を分析する。つまり、男に向ける女の「見る視線」と、男への「語りの行為」の意味合いと一貫性を見合わせ、女の不良が本当に自らの主体性を奪還し得たのか、それとも依然として家父長制的な言説に強く束縛され、制度から脱出できないままなのか。女の性差の制度を解体させるための主体再構築の両義性にまで及んで、論を展開させていく。それから、以上の分析を通じて、三作をあわせて論じて、太宰治の女語りの文体になる理想的な妻のイメージや女性像を探究して、その母なるものの「母性原理」の在り方を明らかにしたいと思う。さらに、太宰の他の関連作品と対照させ、太宰が他者化されてきた女の視点と「声」をもって再現された女性表現において、男の弱さと女の強い生命力という二元的な男性原理と女性原理の表現効果を再評価してみる。

國立政治大學 National Chengchi University

第二章、『ヴィヨンの妻』における悪女の幸福

本章は女主人公が夫の泥棒事件の後始末のために家から社会へ進出することによって、女主人公の変貌や生への意志と、男主人公の矛盾した論理とのぶつかり合いについて探求したい。社会に出た「私」も次第に夫との付き合いの機会も増えてきた。しかし、二人が交流せずに、小説はそのまま終わった。夫は相変わらず得体の知れない「神様」を恐れたり嘘をついたりしていて、妻との交流が断絶されたままである。一方、社会の暗い面に向った「私」も、自ら自分の気持ちを打ち明けようともせずに、「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」（P.47）という自分の決意を表明した。思想などもない「私」は働く力を持っていても、依然として頼れる人は一人もない。そればかりか、「私」は自分の夫による保護ことさえ断念している。「生きていさえすればいい」（P.47）という結末において妻の表明した生き方の開示が、最後まで夫の「恐怖」の心理と大きくな断絶構造を開示してしまうのである。妻の変貌ぶりへの描写がリアリティをもって表現されたとしても、ついにそれを夫の身の上にも意識の上にもなんらの働きかけも合意の接点も持ち得なかった点について探求しようと思う。

2-1. 異化される母性と娼婦性

物語は「玄関をあける音が聞えて、私はその音で、眼をさましました」(P.15)という一句で始まった。妻としての「私」はじつにあわれのイメージで、「夫は殆ど家に落ちついてゐる事」（P.16）は無いせいで、「私」は熱の出た子供のことが心配だが、金も無くて「坊やの頭を黙つて撫でてやつているより他は無い」（P.16）のである。「私」は内縁の妻で、「籍も何もはひつて」（P.31）いないばかりか、夫が家を出ると、「ひとつきも帰らぬ事」（P.31）もあるから、生活費まで夫の知り合いの出版の方にととげてもらった。「私」は妻として実に無力の存在で悲しい妻である。しかし、今夜の夫は珍しく子供のことに就いて尋ねてくれた。「私」は夫の普通と違った優しさに恐ろしい予感をした。

> 「はじめてお目にかかります。主人がこれまで、たいへんなご迷惑ばかりおかけしてまいりましたようで、また、今夜は何をどう致しました事やら、あのようなおそろしい真似などして、おわびの申し上げ様もございませぬ。何せ、あのような、変った気象の人なので」
> 　と言いかけて、言葉がつまり、落涙しました。」（P.21）

「私」の予感が的中した。見知らぬ二人の男女が深夜に家へ来て、夫と言

い争った。夫はナイフさえ出して外に飛び出した。仕方がなくて私は事件の経緯を尋ねて、夫の代わりに後始末をさせられざるを得ない始末となった。これまでの語りはすべて「私」の口によるものであり、妻の憐れみのイメージが明らかに読み取れる。夫がそういうような変わり者のせいで、妻は何もできなく、ただわびを申するしかできない。そして、内縁の妻でありながら、夫の代わりにあえて責任を取ってみせた。こういう点から見れば、「私」はいわば良妻賢母の役割を果たしているのである。それから、椿屋のご亭主の語りによって、「私」は事件の経緯を知ってしまうのと同時に、家庭外の夫の行動様式や仕業も知らされるようになる。

> またもや、わけのわからぬ可笑しさがこみ上げて来まして、私は声を挙げて笑ってしまいました。おかみさんも、顔を赤くして少し笑いました。私は笑いがなかなかとまらず、ご亭主に悪いと思いましたが、なんだか奇妙に可笑しくて、いつまでも笑いつづけて涙が出て、夫の詩の中にある「文明の果の大笑い」というのは、こんな気持の事を言っているのかしらと、ふと考えました。（P.30）

ご亭主の話によると、夫はいつも椿屋で金を払わずに酒を飲んでいるばかりか、外で他の女と交渉さえする。しかし、「私」はご亭主の言葉に「わけのわからぬ可笑しさ」(P.30) を感じた。「私」はこれらのことが笑いで済ませる事ではないと知っていながら、「わけのわからない可笑しさ」(P.30) で笑いを止められない。しかし、そういう厄介な問題を解決するための見当もついていない。しかし、内縁の妻としての「私」は夫の悪行に責任を取る必要も無いのに、夫を警察沙汰にされないように、自分は後始末をしようとする。夫は家庭に対して無責任のような態度をとっているが、「私」は夫を庇ったり家を守ったりして、保護者として、庇護の場所としての「家庭」という場を強い意志をもって確保しようとした。

> 何の思慮も計画も無く、謂わばおそろしい魔の淵にするすると吸い寄せられるように、電車に乗って中野で降りて、きのう教えられたとおりの道筋を歩いて行って、あの人たちの小料理屋の前にたどりつきました（P.33）

金の無い「私」はふらふらと歩き回っていたが、まだ理由もわからず何も考えずに椿屋に辿りついた。「私」は別に解決策などがないが、椿屋のおかみさんに「思いがけなかった」(P.33) ことで嘘をついた。それは「私」の最初の変貌なのではないだろうか。これまでの「私」はひたすら家庭内でいつ帰るかわからない夫を待つしか出来ない無言無為の妻であった。「私」は自分ひとり

で子供の面倒を見ているが、金も何もないから、破れて綿のはみまで出ている座蒲団の荒涼たる部屋に閉じ込めるばかりである。しかし、今度の事件のゆえに、「私」は余儀なく家から出ることをされる。自分がどうすればよいのかわからないが、あえておかみさんに「お金は私が綺麗におかえし出来そう」(P.33)だと、嘘をついた。「人質」(P.33)として椿屋にいると要請した「私」はエプロンをして椿屋で客あしらいをし始めた。つまり、「私」は今度の事件のきっかけで、家に閉じ込める妻の閉鎖性から社会に脱出していく女に変貌した。

> 「金も出来たし」と客のひとりが、からかいますと、ご亭主はまじめに、「いろも出来、借金も出来」と呟き、それから、ふいと語調をかえて、「何にしますか？　よせ鍋でも作りましょうか？」と客にたずねます。私には、その時、或る事が一つ、わかりました。やはりそうか、と自分でひとり首肯き、うわべは何気なく、お客にお銚子を運びました。（P.35）
>
> 私には何も一つも見当が附いていないのでした。ただ笑って、お客のみだらな冗談にこちらも調子を合せて、更にもっと下品な冗談を言いかえし、客から客へ滑り歩いてお酌して廻って、そうしてそのうちに、自分のこのからだがアイスクリームのように溶けて流れてしまえばいい、などと考えるだけでございました。（P.36）

客に「美人」(P.35)などとからかわれた「さつちゃん」は一つの「或る事」(P.36)を発見した。それは亭主の呟くことのように、自分が実に社会で働く力を持っていることなのである。自分の働きによって、「その日のお店は異様に活気づいていた」(P.36)というところはつまり「私」の美貌への周りの視線で固められた何よりも強い証拠である。

社会という現実世界の場でかつては亭主の言った言葉が、「私」に一種の暗示を与えた。それは「私」は自身の美貌で夫の借金を返すことができるということなのである。自分はただ「アイスクリーム」(P.36)が溶けていくように、その状況に入った。これまで家庭の中にいた「私」が変貌して、「椿屋の、さつちゃん」という店での名前を獲得した。椿屋で働くことは金をもうけること以外、もう一人の「私」すなわち「椿屋の、さつちゃん」(P.41)という新しい身分を生み出した。「私」は社会の中で働くことを通じて自分の美貌と能力を確認し得た。

> その夜は、雨が降っていました。夫は、あらわれませんでしたが、夫の昔からの知合いの出版のほうの方で、時たま私のところへ生活費をとどけて下さった矢島さんが、その同業のお方らしい、やはり矢島さんくらいの四十年配のお方と二人でお見えになり、お酒を飲みながら、お二人で声高

く、大谷の女房がこんなところで働いているのは、よろしくないとか、よろしいとか、半分は冗談みたいに言い合い、私は笑いながら、
「その奥さんは、どこにいらっしゃるの？」とたずねますと、矢島さんは、
「どこにいるのか知りませんがね、すくなくとも、椿屋のさつちゃんよりは、上品で綺麗だ」と言いますので、
「やけるわね。大谷さんみたいな人となら、私は一夜でもいいから、添ってみたいわ。私はあんな、ずるいひとが好き」
「これだからねえ」
　と矢島さんは、連れのお方のほうに顔を向け、口をゆがめて見せました。（P. 43～44）

前に述べたように、「私」は椿屋という外部社会の場で「さつちゃん」という身分（記号）として社会に進出した。しかし、大谷の女房としての「私」はどう変わっていくだろうか。例文から見ればわかるように、店でお客さんたちと下品な冗談を交わしたり、夫の知人に大谷の女房が「椿屋のさつちゃんよりは、上品で綺麗」だとからかわれたりされても一向平気そのものである。「大谷さんみたいな人となら、私は一夜でもいいから、添ってみたい」というような大胆な誘惑めいた言葉を吐き出しても何の恥じらいも感じなかった。椿屋で自分の美貌によって金を稼ぐ道具立てとなっているばかりか、大谷の妻という身分を完全に捨てた、擬似的な娼婦の真似をしてみせる大谷の女房。語り手の「私」の行為は明らかに下降指向におり、もう一歩で肉体を売り渡す娼婦になりかねないものであった。それどころか、夫の知人の前で、これまでの良妻賢母の役割を果たしてきた「私」のイメージは振り捨てられ、一気にふしだらの女になった。

　神がいるなら、出て来て下さい！　私は、お正月の末に、お店のお客にけがされました。（P. 43）

その夜には、ひとりの客に家まで送ってもらった。もう電車がない時だから、ただ玄関の式台にしても、「私」は一人の男を家で泊まらせた。そして、翌日の明け方、「私」は「あっけなくその男の手に入れられ」たという悲惨な目にあった。江種氏は椿屋での労働とこのレイプの体験を分析してみせ、大谷が椿屋のおかみを含めた複数の女性を寝取っていたことを知りながら、それを非難することのなかった語り手が、「自身がレイプされてみて、夫と工員との間に、男としての共通した性意識・行動が見えてきたのではないか」[28]と指摘している。

[28] 江種満子「ヴィヨンの妻」――妻の「私」、『国文学』、1999.6、P.92

テクストは、一般に労働市場は男性の世界だから、そこに介入する女性はその侵犯者として男性からの反撃を受ける、つまり何らかの意味で汚されるという、ジェンダーで構築されたこの社会の歪みに、はからずも触れてしまっている。ここで女たちの労働は、女たち自身を言葉の主題に変えるけれども、同時にそのために男性からの無意識裡の反撃にさらされ易く、女性の主体にとって両刃の剣の危険をはらむという現実があらわにされている。[29]

こういう論点から見れば、「私」が社会に進出する（椿屋での勤めるための新たな女給という記号を持った）ゆえに、男の世界と社会の暗闇の暴力性に踏みにじまれてしまう。レイプされた日も「私」は、「うわべは、やはり同じ様に、坊やを背負って、お店の勤め」（P. 46）に出かけた。そこで出会った夫が新聞記事に載せた自分についての批評に対して、弁解した。夫の言ったことを聞いても、「私」は「格別うれしくも」な（P. 47）くて、ただ、「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」（P. 47）といった。

終わりに

要するにいえば、「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」（P. 47）という一句は、「私」がいままで椿屋で働いてきて得た社会的な体験の真実である。椿屋に出る前の「私」は荒涼たる家に籠もって、自分さえ醜いと思う坊やを抱いて夫の帰りを待っていた。その夫の無責任さのせいで、今度は「私」は椿屋に働きに出かけていくことにした。最初は人質として椿屋に行ったつもりだったが、そこで「私」は自分の働く能力を始めて意識した。夫の盗んだお金はあるバーのマダムが立て替えてくれたが、「私」は亭主夫婦に椿屋で働くことを依頼した。椿屋に勤めに行くことによって、「私」は夫の顔を見ることも可能となるし、経済的にも生活が改善される。その日から「私」はいままでの重苦しい思いが拭い去れたような気がして、生活さえ浮々した楽しいものになったとう。いわば、家庭内でつまり制度内から脱出した「私」は椿屋で働く「さつちゃん」への変貌であり、新しい「もう一人の私」の生まれ変わりとなる。妻としての「私」に「椿屋のさつちゃんの顔を見ないとこのごろ眠れなくなってね」と大谷がいうように、また「大谷さんみたいな人となら、私は一夜でもいいから、添ってみたいわ」という「私」の返答のように、「私」は「さつちゃん」とは絶対別人になるのではないだろうか。そして、そこで「私」が体験したのは「我が身にうしろ暗いところが一つも無くて生きて行く事は、不可能だ」という生の真実である。社会に進出した「私」はすべての人が「何か必ずうしろ暗い罪をかくしている」（P. 43）という罪の遍

[29] 江種満子「ヴィヨンの妻」――妻の「私」、『国文学』、1999.6、P.92

在性・普遍性を改めて認識するようになる。

がしかし、「私」はどうやってすれば社会に進出する力を得られるものか。それは自分が「ひとり残らず犯罪人」のお客さんたちと同化して「アイスクリームのように溶けて流れてしまえばいい」という自虐的な方法によるしかなかったのである。また、「私」は依然として妻と「椿屋のさつちゃん」という二つの身分を持ち合わせている。しかし、客に汚されたという決定的な事件によって、「私」の身体まで汚され、「うしろ暗いところ」を背負わされるようになった。そうなった「私」は今度家から脱出して娼婦的な「さつちゃん」への完全的な変貌を遂げていく。

「あたしも、こんどから、このお店にずっと泊めてもらう事にしようかしら」
「いいでしょう、それも」
「そうするわ。あの家をいつまでも借りてるのは、意味ないもの」（P. 47）

「さつちゃん」として生きる「私」の主体性は前にも述べたように、男の社会的な基盤を共有し共生した共犯的構造をなしている。つまり、その主体性が家父長的な社会をなくしては成立できないものである。先行研究にも指摘されているように、「弱者としての女性に潜在するしぶとい生命力」に対して、太宰は一種の信仰に近い関心を抱いていると見ている。宮原昭夫が『ヴィヨンの妻』の「私」の形象性について、「忍従と恕しにいろどられた女人のやさしみと愛」[30]の存在だと述べている。そして、三好行雄が「私」のことを「夫を許すことでめぐまれるみせかけの幸福感にすぎないのだが、それもまた『妻』の智恵であり、優しさであろう」[31]という。しかし、そのような妻の優しさは男たちに抑圧され、犯されて始めて成立し得るような、男の思惑によってつき動かされる危うい優しさなのではないだろうか。その性差的な世界に身をおく「さつちゃん」は家庭内でさえ主体性を強調しようとはしないだろうか。本来、今の「私」はそのような意味のない家を捨ててもいい。家に帰ることによって「妻」という身分をぎりぎりの一線で保った手段も今では無意味になるのではないだろうか。「私」が汚されたのはほかの外部の娼婦的な世界ではなく、生の拠点となるはずの場所であるその家である。家庭内部の闇の暗部を背負わされることのない「私」の脆い自己がとうとう崩壊していった。残され、生かされていったのは椿屋の「さつちゃん」という自分の美貌で稼ぎ、誘惑的で、擬似的な娼婦の誕生（家庭の妻の記号を持ったままの両義的な娼婦）であった。

[30] 宮原昭夫、「『ヴィヨンの妻』考」、『国文学』、1976.5
[31] 三好行雄、「『ヴィヨンの妻』」（『作品論太宰治』に収録）、双文社、1974.6、P.329

2-2. 軟弱な男の聖母憧憬

「私」は椿屋のご主人より泥棒事件の経緯を聞いたときも、今まで知らなかった夫の一面が呆気なく知らされることになる。夫は新宿のバアで働いた秋ちゃんという女に連れられて椿屋へ酒を飲みに行ったその夜、「静かで上品な素振り」(P.24) をした。その夜から、夫は最初の百円しか払わずに、三年間ずっと椿屋に通ってご主人の「お酒をほとんどひとりで、飲みほして」(P.25) しまった。

> あの人が私どもに今までお酒の代を払った事はありませんが、あのひとのかわりに、秋ちゃんが時々支払って行きますし、また、秋ちゃんの他にも、秋ちゃんに知られては困るらしい内緒の女のひともありまして、そのひとはどこかの奥さんのようで、そのひとも時たま大谷さんと一緒にやって来まして、これもまた大谷さんのかわりに、過分のお金を置いて行く事もありまして（後略）(P.27)

秋ちゃん以外に、ほかにも内緒の女がいった夫は、外で振り飾る身分はいわゆる「大谷男爵の次男で、有名な詩人」という身分であり、秋ちゃんの口によればまるで「神様みたいな人」で、尊敬される貴族階級かつ知識人である。それに、一度自慢することも無いし、すべては秋ちゃんが夫の偉さについて広告した。しかし、その偉い大谷さんは金などすべて女に介抱してもらっている。終戦になってから、今度は女連れでなく、記者とともに椿屋にやってきた。酒の勘定もなく、記者を店に置いて、自分ひとりで店から逃げ出した。終戦後の大谷は、「人相がけわしくなり、これまで口にした事の無かったひどく下品な冗談などを口走り、また、連れて来た記者を矢庭に殴って、つかみ合いの喧嘩をはじめたり、また、私どもの店で使っているまだはたち前の女の子を、いつのまにやらだまし込んで手に入れて」しまった。とうとう、金を盗んだばかりか、ナイフまで出して、ご主人を刺そうとした。ご主人から、「私」は始めて夫の無頼振りを聞かされた。しかし、家にいたときの夫はどうであろう。

> 帰る時は、いつも泥酔していて、真蒼な顔で、はあっはあっと、くるしそうな呼吸をして、私の顔を黙って見て、ぽろぽろ涙を流す事もあり、またいきなり、私の寝ている蒲団にもぐり込んで来て、私のからだを固く抱きしめて、
> 「ああ、いかん。こわいんだ。こわいんだよ、僕は。こわい！　たすけてくれ！」
> などと言いまして、がたがた震えている事もあり、眠ってからも、うわごとを言うやら、呻くやら、そうして翌る朝は、魂の抜けた人みたいにぼ

んやりして、そのうちにふっといなくなり、それっきりまた三晩も四晩も帰らず（後略）（P.31～32）

それでは家の外では無頼振りをふり飾る大谷は一体何故に何者に怯えているのだろうか。大谷は「男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです」（P.41）という言葉で女を蔑視し、排除し、差異化してきたはずの男性性としての文化的な意味合いにアイロニーを込めた言葉を吐き出す。それは「椿屋にお酒を飲みに来ているお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだという事」（P.42）にも、「私」が気づいたが、夫のその恐怖はおそらく社会外での犯罪人と直面しなければならぬという状況をことごとくホモセクシャル的な男の絆と拘束性で言い表そうとするのではないだろうか。椿屋の亭主の言ったように、「記者というものは柄が悪い」（P.28）と、夫は戦後の社会で、いやでも記者や詩人というような文化人たちと付き合うことを余儀なくされた。そのような恐怖は夫が回避したくても切るに切れない絆だろう。ゆえに、外では無頼振りしたり金一銭も払わずに、椿屋の酒を飲み干したりする大谷にとって、おそらく家が安堵感を与えられ、母性的な保護が保証される唯一の場所かもしれない。その安堵感は家庭内部空間に束縛された社会的な犯罪人でない女性性を具現化した「私」によって寄与されるところが大である。

「僕はね、キザのようですけど、死にたくて、仕様が無いんです。生れた時から、死ぬ事ばかり考えていたんだ。皆のためにも、死んだほうがいいんです。それはもう、たしかなんだ。それでいて、なかなか死ねない。へんな、こわい神様みたいなものが、僕の死ぬのを引きとめるのです」
「お仕事が、おありですから」
「仕事なんてものは、なんでもないんです。傑作も駄作もありやしません。人がいいと言えば、よくなるし、悪いと言えば、悪くなるんです。ちょうど吐くいきと、引くいきみたいなものなんです。おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がいる、という事なんです。いるんでしょうね？」
「え？」
「いるんでしょうね？」
「私には、わかりませんわ」
「そう」（P.42）

大谷は「生れた時から、死ぬ事ばかり考え」ていたから、おのずから生活に希望なんか抱えていなかっただろう。いわば最初から生という希望を捨てた大谷は、生活能力を持っていないのも無理ではないだろう。しかし、そのような自分がなかなか死ねないのはむしろ外部視線で定着されている「こわい神様みたいなもの」という無垢な神聖性によって彼の死を引き止めることができた。

その「怖い神様」という記号性は一体何どういう内実を内在しているのだろうか。先行研究と結び合わせて考えると、それはドメスティック・イデオロギーによって固められた家庭の表裏両面を同時に顕現したのではないだろうか。

> 『ヴィヨンの妻』では、根本において家庭が崩壊してしまっている。妻は最後に、夫を、手伝いに行っている小料理屋で待つことになる。妻もまた、家庭よりもその小料理屋の勤めのなかに、かろうじて、崩れゆく世界の中での束の間の安息を求める[32]。

また、安藤宏は「神さま」の正体について、以下のように述べている。安藤宏は「死ぬのを引きとめる」「こはい神様みたいなもの」は「妻子と日常的な関係そのもの― 溶けこみがたくも又断ち難い『家庭』の持つ意味」[33]と指摘している。大谷はいつも家におらず、父性的な強者というよりも抜き殻だけの無責任の「子供」じみた「甘えん坊」の夫である。家庭の存在はもちろん大切なもので、切っても切れない絆として思われるかもしれない。さらに神様「みたい」というも文体表現はすなわち「神」の擬似的な意味だと考えられる。こう考えてみれば、大谷の死を引きとめている「神さま」とは本当は家庭という母胎的な空間であろう。母性的な家庭は社会（現実）という、男という性的な他者よりも近づきがたく、自分を怯えさせる。要するに、大谷は母的な妻からの救済を望んでいながら、その弱さを正面から妻と向き合うことが出来ずにどこかで男の体面を辛うじて保ちつづあるところは、強くなった（本来は保護者の役割を果たし続けてきた）妻の前に、その恥じらいの表現として妻の神聖的な一面という「神様」という救済者という記号性を承認しながらも、一方においてそういう神聖的な弱いはずの強い母性が怯えさせられるだけの「怖い」ものとして意識されるのである。また、曽根博義もその妻の役割を以下のように述べている。

> 夫は妻の前で家庭を決して忘れていないことが「人非人」でない証拠だと言おうとしている。三年間も店の飲み代を払わないどころか、店の金を五千円奪って逃げたことこそ「人非人」の証拠だと考えるのがふつうなのに、そんな常識はほとんど問題にしていない。家庭サービスのためなら泥棒でも何でも許されてかのような言い分である。彼のいちばん怖れているのが、実は神でも、人非人でもなく、妻であり、家庭であったことがわかる。しかし妻である「私」は、それを聞いて「格別うれしくもな」い。夫が、盗んだ五千円を持って愛人のところへ行き、どんちゃん騒ぎをしていた事実をすでに知っているからだけではないだろう。

---

[32] 饗庭孝男『太宰治論』、講談社、1976.12、P.156

[33] 安藤宏「『ヴィヨンの妻』試論」、『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1988.6、P.107

妻は夫がそれほど気にしている家庭のことなどもうどうでもよいと思っているのだ。泥棒でも、人非人でもかまわない。家庭のことにかかずらうこともない。ただこうして生きていさえすればいいのだ、といっているのである。一見、投げやりにも見えるこの妻の言葉は、しかし家庭を怖れ、人非人になることを恐れている夫をそのまま受け入れ包み込み、死にたい、死にたいと思っている彼を生に繋ぎ止めておく最後の力にはなり得る可能性があった。[34]

つまり、生きていく能力を欠如した夫には、唯一その生の可能性を保ち続けたのは家庭というカテゴリーなのではないだろうか。そのゆえに、夫は世間の混乱さと戦って疲れてから、最後の休息できる場所、つまり、家庭に回帰する。その時はいつも「泥酔してゐて、真蒼な顔で、はあつはあつと、苦しさうな呼吸」（P. 31）をして、妻を固く抱きしめずにはいられない。「ああ、いかん。こわいんだ。こわいんだよ、僕は。こわい！　たすけてくれ！」（P. 31）その発言も妻からの救済を求めている弱弱しい幼児性をもった「子供」の表現ではないのだろうか。その一方、家庭を捨てた自分を許してくれるようにと妻への虚偽的な申し訳でもあるのだろう。

「なぜ、はじめからこうしなかったのでしょうね。とっても私は幸福よ」
「女には、幸福も不幸も無いものです」
「そうなの？　そう言われると、そんな気もして来るけど、それじゃ、男の人は、どうなの？」
「男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです」
「わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きとうございますわ。椿屋のおじさんも、おばさんも、とてもいいお方ですもの」
「馬鹿なんですよ、あのひとたちは。田舎者ですよ。あれでなかなか慾張りでね。僕に飲ませて、おしまいには、もうけようと思っているのです」（P. 41）

自分の外部世界においての無頼さを隠していて、せめて家庭という基盤を保っていた夫は今度家庭外部へ飛び出す妻を認識させられる。いままで、自分が妻を家庭内に引き止めてきたが、妻はいま働く能力を持っており、しかも彼の勘定まで払えるようになった。しかし、世間の怖さを一番知っていた」（少なくとも彼自身がそう思っている）夫にとって、妻のそのような幸福感はせいぜ

[34] 曽根博義「女性独白体の魅力」、『近代日本文学のすすめ』に収録、岩波書店、1999.5、P.330

い浅薄な自己満足にとどまるものとしかないのである。その家庭内の妻が変貌したことに恐怖感覚が呼び起こされた夫は変貌していく妻に対し、その外部志向の行動をどうたら引止めようと試みた。その故に、妻は「とても私は幸福よ」（P. 41）といった場面に対し、夫は妻のその幸福感を否定した。そして、「椿屋のをぢさんも、をばさんも、とてもいいお方ですもの」（P. 41）と、妻がよい人だと思っている椿屋の旦那とおかみさんとの悪口を言って、商売では極まりあたりまえの事を逆説のように論じ、妻の認識した幸福感を打ち消そうとした。また、妻が幸せを感じたことに対し、その彼女の幸福感を打ち砕いて破り、逆に自分の不幸感覚を誇張して見せた。自分の泥棒事件に就いて聞かれたときも、引用文のように、無関係なことばかり言っていた。夫はやはりその妻の変貌を認識しようとしなかった一方、自分の不幸や怖さを強調して、妻からの救済を求めていたのではないだろうか。

> 「やあ、また僕の悪口を書いている。エピキュリアンのにせ貴族だってさ。こいつは、当っていない。神におびえるエピキュリアン、とでも言ったらよいのに。さつちゃん、ごらん、ここに僕のことを、人非人なんて書いていますよ。違うよねえ。僕は今だから言うけれども、去年の暮にね、ここから五千円持って出たのは、さつちゃんと坊やに、あのお金で久し振りのいいお正月をさせたかったからです。人非人でないから、あんな事も仕出かすのです」（P. 47）

夫は新聞を読んでいながら、自分の泥棒事件ついて弁解した。自分は実はエピキュリアンではなくて、ただ「こはい神様」（P. 42）におびえるから、エピキュリアンの振りをよそって遊んでいるからなのである。夫自身にとってはいままでの退廃的な遊びはまったく面白くなくて、ただ恐怖と戦っていた恐ろしさを紛らそうとするだけなのである。そのような自分は決してエピキュリアンとはいえないと、夫はそう思っているのである。しかし、その口実は妻の「私」の眼からみれば、明らかに演技的な嘘となる。「私」はすでに夫がその金をバーに働いている五人の女の子にクリスマス・プレゼントとして「無闇にお金をくれてやつ」（P. 40）ていた事実ぐらいを知っているのである。その夫の弁解は「私」の眼から見ればまったく無意味なものである。しかし、お金を家族のために使っていなかった夫はなぜそのような嘘をつかなければならないのだろうか。それは性的な他者である妻に対し、男の世界で挫折し、排除されてきた敗残者意識を擬態的な男性性に偽装し、「人非人」でないことを信じさせようとした一つの仮面なのではないだろうか。

終わりに

夫は戦時中、男爵の次男とほかの女の口を借りて名乗り、初めには「静かで上品な素振り」（P.24）で椿屋の旦那らの信用を得てから、勘定せずに酒を飲み続けてきた。終戦後になって、今度は詩人が「世の中からもてはやされるやうになつた」（P.28）ことを言って、新聞記者や雑誌記者を連れて「大谷先生」として、好きなだけに飲み放題にしていった。時が移り変るにつれ、その身分も落ちぶれていき、悪徳の生活を続けてきた。しかし、その悪徳振りの背後には、弱くて怖がっていた男の幼児的な卑怯さが潜んでいるものにある。「死ぬ事ばかり考へてゐ」（P.42）て恐怖と戦いかねて、妻を抱いたり泣いたりするしか何も出来ず、母親的な妻に駄々をこねる「弱い男」なのである。

そのような夫には唯一安堵を与えられるのは彼がほとんど関心を払わない家庭空間なのである。自分の死を引きとめたのはその家庭こそなのである。一方、その家庭の中に生々しい威力を持った妻という「怖い神様」がいる。自分の退廃的な生活態度のせいで妻子まで「飢ゑ死に」（P.32）させる寸前の状態尾である。その家庭の侘しさはだんだん「怖い神様」と変り、今はその恐ろしさに直面せざるを得ないことになる。

一方、夫はやはり家庭という最後の場所を維持しようとして、キザでもよく「人非人」でないことを言い張る。妻に向かっても「どこかに神がゐる」(P.42)という一句で妻からの慰安の言葉を期待していたのではないだろうか。しかし、自分が妻の幸福感を否定したのと同様に、妻からあっさりと「私には、わかりませんわ」（P.42）と拒まれる。最後に、「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」（P.47）という妻の勇ましい宣言が揺るぎもない「弱い男」の正体をさらけ出していくばかりではなく、家庭のカテゴリーから破りだしていくという家庭的な規範からの自己解放を意味する。それも同時に夫の嘘とキザを看破した妻は「人非人」という自他認識は同時にそうした「弱い男」の夫の甘えや虚偽性を許容するような「神様みたい」な母性的な寛容の表現とする。

2-3. 制度からの脱出の両義性

椿屋で労働することによって、「私」は一種の幸福を感じた。これまでの苦労、つまり、引きこもりがちの封鎖的な家庭内部でいつ帰るかわからない夫を待ち焦がれていたのと違って、大きく羽ばたいて監禁状態の家庭内部から脱出するようになった。金銭的・経済的に自立し、夫の姿を目の当たりに見ることもできるようなった「私」は「これまでの胸の中の重苦しい思いが、きれいに拭いさられた」感じをした。「私」は名状しがたい「幸福」さえ感じた。しかし、「私」は家から飛び出し、いざ外部空間の社会に身を置くことになると、

道の行きずりの人間全体が犯罪人のように目に映っているという事実に気づいた。そして、労働することによって、「私」はようやく一つの紛れも無い真実を認識できた。それは世の中の人間が生きていくために「必ずうしろ暗い罪をかくして」いるということなのである。社会空間の外部で生を営むすべての人間が秘密めいた罪を背負い、それを隠蔽させた形で生きていることになっている。しかし、さつちゃん自身はどうやって自らの生き方を構築していくべきだろうか。或る夜、「大谷の女房がこんなところで働いているのは、よろしくないとか、よろしいとか」と、夫の知人たちにからかわれた。だが、「私」はあくまでも「椿屋のさつちゃん」というもう一人の自分の分身を装い、彼らと冗談を交わし、本来生の原点となる「大谷の女房」という妻の身分をふり捨てることにした。この場合の「私」はもう世間の目や視線などを臆面もなく、悪女としての擬似的な娼婦の振舞い（女給という闇の女）に一変した。

「なぜ、はじめからこうしなかったのでしょうね。とっても私は幸福よ」
「女には、幸福も不幸も無いものです」
「そうなの？　そう言われると、そんな気もして来るけど、それじゃ、男の人は、どうなの？」
「男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです」
「わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きとうございますわ。」（後略）（P. 41）

なぜ堕落した不良の女は幸福感を味わえることが可能なのだろうか。そのような家庭の封鎖的空間から解放された妻の幸福などは実際の上、夫にとって、幸福も不幸も微塵とも無いのだろう。しかし、外部での自分は「犯罪人」が満ち溢れる世間と戦わなければならないにしても、そこには妻は僅かながら小さな幸福感がしみ出てくる。そうした社会に進出して、仕事を持つ妻の変化に無関心の夫から見れば、二人の社会認識には大きな喰い違いが存在している。妻はそのような夫に一つの批判もなく、すべては「わからない」という一言で軽く言っておけた。

十日、二十日とお店にかよっているうちに、私には、椿屋にお酒を飲みに来ているお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだという事に、気がついてまいりました。夫などはまだまだ、優しいほうだと思うようになりました。また、お店のお客さんばかりでなく、路を歩いている人みなが、何か必ずうしろ暗い罪をかくしているように思われて来ました。」（P. 42～43）

椿屋で働くことを通して、「私」は新たな社会認識を獲得した。椿屋の客だの、世間の人々だの、みな言うには言われない暗い罪を背負って生きているものである。椿屋のおじさんとおばさんがとても「いいお方」だと思っていた「私」はどうやら勘違いした。そうした店主夫婦の正体を早くから気づいた夫はただの「田舎者」で「なかなか慾張り」と、教えられても、「私」はそれがただ夫の詭弁に過ぎないと思っていた。だが、椿屋で様々な人たちと接触して、「私」もついに世間のある真実を発見した。それはみな後ろくらい犯罪を背負い、生きていることなのである。椿屋のおかみさんをだまして水酒を売った「立派な身なり」（P.43）の奥さんのように、みなは「上品さう」な身振りを装っていても、実際は「一人取り残らず犯罪人」（P.42）ばかりなのである。それらの人々と比べてみれば、ずっと怖くて死の恐怖に怯えている夫のほうは「まだまだ、優しい」（P.42）善良な人間である。それにしても、「私」もいまの生活を変えようととする意思もない。椿屋のおじさんの言葉の通りに、「一寸の仕合せには一尺に魔物が必ずくつついてまゐります」（P.22）という「寸善尺魔」の意味を噛みしめ、理解するようになった。結局、つきつめたところ、自分の現在感じ取っている幸せは必ず「不幸」が一体両面のように相伴しているものである。

> トランプの遊びのように、マイナスを全部あつめるとプラスに変るという事は、この世の道徳には起り得ない事でしょうか。」（P.43）

「私」の幸福感覚もまもなく破られ、大谷先生の詩のファンだといった一人の客に汚される悲惨な目に遭った「私」は「うはべは、やはり同じ様に」（P.46）平日通りに椿屋に通って行く。そこで出会った夫に今度は自分のほうから「このお店にずつと泊めてもらふ事」（P.47）にすると宣言した。「私」は店で働いたゆえに見知らぬ男に汚されたが、なぜ店に泊めることにしたのだろうか。それは前に言ったような「幸福」のためなのだろうか。自分は世間の醜悪さや罪にこの身が犯されたが、夫と会えるわずかな「幸福」のためでいいから世間と戦っていかなければならない。汚され、身に暗いところをつけても、そのまま椿屋に泊まれば、もっとひどい目に遭う恐れがあっても構わないといわんばかりか、そうした妻の宣言は生きていれば良い、という下降になっていく娼婦的な自分の主体性を持った意志表明なのではないだろうか。堕落していって、しかも「トランプのように」マイナスの生からプラスの明るい生へ逆転できなくても、自分の掴まった夫との共同体としての対幻想だけの「幸福感」に強い意志を持って、捨てたりはしない、したたかな強者の生の一面を見せ付けたのである。

終わりに

『ヴィヨンの妻』と同じ時期に発表された『冬の花火』に関して、昭和二十一年八月二十二日付河盛好蔵宛ての書簡において、太宰は「あのドラマの思想といつては、ルカ伝七章四七の『赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し』です。自身に罪の意識のない奴は薄情だ。罪深きものは愛情深し、といふのがテーマで、（中略）いちどあやまちを犯した女は優しい、といふのが私の確信なんです」といっている。渡部芳紀はその罪と優しさとの逆説的な両義性について以下のように述べている。

> すなわち、ここでは、罪というものが、愛や、やさしさと深くかかわってとらえられている。そしてヴィヨンの妻が最後に到達した優しさも、それとつながっていないか。いったん到達した幸福の世界、そのなかで、世の中の人々すべてが、「必ずうしろ暗い罪をかくしてゐる」ことに気づく。そうしたところへ、自分自身も、罪を背負わされてしまう（ただし、強姦されるということは、本来的には何らの罪もないはずなのだが、現実の問題としては被害者側も罪の意識を抱いてしまうらしい）。ヴィヨンの妻の最後に到達した「人非人でもいいぢやないの」という境地は、この強姦されたという事件なしには生まれてこないという書き方がされている。[35]

つまり、氏はその事件にかかわって、「罪の意識が生じ、善悪・道徳を乗り越えた、絶対的な優しさの世界が現れてくるのだ」[36]と述べている。その妻の後ろ暗い不幸感覚がほかならぬ夫の家庭への無関心から生れたものである。なのに、「私」はその夫の罪をとがめることも無く、その汚れ目を素直に受け入れて外部世界に飛び出し、再び汚されたことで、被害者の罪意識としての「人非人」という自他ともに享け合う普通的な人間認識にまで到達したわけである。そうした敗残者の負い意識から悟り得たものとして、新たな生の力を得るようになる。要するに、「私」は椿屋で労働するようになったゆえに、家庭を壊滅に追いやるはめとなったわけであるが、労働によって得た新たな社会認識を生の根拠として今度は自分のほうから夫を守り、前と違った形態の家庭を維持させていくと新しい決意を固めたわけである。

---

[35] 渡部芳紀著『太宰治　心の王者』、洋々社、1984.5.12、P. 272
[36] 渡部芳紀著『太宰治　心の王者』、洋々社、1984.5.12、P. 272

第三章、『斜陽』における悪女の革命

敗戦後の混乱する世相の中、かず子は母と一緒に東京の家を処分し、静かな伊豆の山荘を買って、そこに引っ越した。かず子は今の生活の底に潜在した不安を意識し、書く事を通して自分の中の「暗い影」を見つめると同時に、それと戦おうともする。そして、それらの事を考えていくうちに、美しい母を食い殺す、胸の中にひそむ「蝮」を意識し、「下品な女」になっていく自分を自覚する。また、小説家上原との「ひめごと」は次第に増幅され「恋」に変っていった。この「恋」を成就させることは、つまりそのまま母を裏切り、これまでかず子が身につけてきた「女大学」的な、つまり伝統的日本女性の生き方を壊す、非道徳的行為であることを意味する。

そして、弟の直治はかず子にとって、どのような存在であろうか。直治の日記を読む前に、かず子にとって、ただ疎ましい存在に過ぎなかった。しかし、「夕顔日誌」を読んだかず子は、生きる希望をなくした弟の姿を見届けつつ、弟と自分との同一性を見出したのと同時に、その相違点も見出した。結局、生きていることの意味を見出せなかった直治は自殺し、かず子と逆の方向へと歩み出していった。

また、上原に犯された後の朝、かず子は彼の「犠牲者の顔」を見た。そして、「かなしい、かなしい恋の成就」とかず子は書くが、この「かなしい恋」は、それまでの「恋」とは本質的に違うものである。かず子が頭の中で観念的に作り上げてきた「虹」としての「上原さん」ではなく、ただ「田舎の百姓の息子」ゆえのコンプレックスを隠してきた平凡な男であった。

母の病死と弟の自殺を経験したかず子は、世の中の「古い道徳」に対し、自分が「過渡期の犠牲者」のひとりとして、雄々しく戦っていくと告げる。この闘いを支えるものとして、このときのかず子が自覚しているのは、ほかならない貴族としての「誇り」なのである。かず子は、いったんは自分の中で否定した、貴族の精神の「復活」こそを、願うのであった。

鳥居氏は『斜陽』が二つの主題を持っていると述べた。

> 母に象徴される「滅びの美」という第一主題は、「アナーキズム風の桃源境」が現実に辿ってしまった道ほどの帰結であり、「かず子の復活」という第二主題は、そのような終末からの、見通しはないが、それしかない唯一の脱出口であるということができよう。そして、結果的に第一主題が大きく響きすぎて、第二主題が圧倒されているような事態があるとすれば、それはまさしく、当時の太宰の陥っていた窮状を示すものであると考えられる。しかしそうは言っても、「斜陽」の第二主題はいかに不充分であるにもせよ太宰自身によって設定せられたものなのであり、太宰にとって、それを書くことは戦後の歩みが必然的に要求しているもの

であったということになるであろう。[37]

その「アナーキズム風の桃源境」への望みや追求にはかず子の生命力が生き生きと感じられると思う。「滅びの美」はかえってその生命力を彫りだしたのではないだろうか。本章はかず子が伝統的な考えに束縛されることなく、自分の意志で、これからの人生に勇敢に立ち向かうことを分析し、母と弟、恋人との犠牲などのトラウマ体験を持っていながらも、そこに宣言された「道徳革命」が一体完成されたかどうかという問題を考察していきたいと思う。その過程において目覚めた生命力の根源は一体どこから来るものか。また、弟と恋人の犠牲はどういう意味や示唆が示されたかということにも及んで、検証していきたい。

3-1. 書く女の戦い

3-1-1. 生きていくための不良

物語りの発端において、かず子は蛇の事件に対して忌まわしい暗示のようなことを感じずにはいられない。かず子の焼いてしまった卵を探していたような一匹の蛇がいる。その蛇は「ほつそりした、上品」な蛇だった。かず子はその「悲しみが深くて美しい美しい母蛇」がお母様の顔に似ていると思う。しかし、自分の胸に住んだ「蝮みたいにごろごろして醜い蛇」がいつか、その美しい母蛇を食い殺してしまうという感じがした。

> けれども、お母さまには、もうお金が無くなってしまった。みんな私たちのために、私と直治のために、みじんも惜しまずにお使いになってしまったのだ。そうしてもう、この永年住みなれたお家から出て行って、伊豆の小さい山荘で私とたった二人きりで、わびしい生活をはじめなければならなくなった。もしお母さまが意地悪でケチケチして、私たちを叱って、そうして、こっそりご自分だけのお金をふやす事を工夫なさるようなお方であったら、どんなに世の中が変っても、こんな、死にたくなるようなお気持におなりになる事はなかったろうに、ああ、お金が無くなるという事は、なんというおそろしい、みじめな、救いの無い地獄だろう、と生れてはじめて気がついた」（後略）（P. 125）

今まで貴族として不自由なことがひとつもなく、お母様にかわいがられていたかず子は伊豆の山荘に引っ越した。お金が全部使い切られたゆえに、余儀なく「眼をつぶ」って、お母様と二人きりでこの山荘で新しい生活を過ごしていく。お母様にとって、東京の西片町の家」（しかもお父様のなくなった家）を

[37] 鳥居邦朗「斜陽」、『作品論太宰治』所収、P.351

捨てることは何よりも心外なことである。しかし、「かず子がゐてくれるから」、お母様はあえて伊豆へ引っ越した。「死んだはうがよいのです」という、東京の家から出てきたお母様の弱音には、かず子が今まで感じたことのなかった実生活の苦しみをつくづくと痛感した。そして、お母様の噛みしめるその苦しみはかず子が自身にも責任を感じずにはいられなかった。お母様は優しすぎ、自分と直治をかわいがり過ぎていたから、このような羽目に遭ったのだと、自分はまるでお母様を食い殺したようなものである。

> 私は翌日から、畑仕事に精を出した。下の農家の中井さんの娘さんが、時々お手伝いして下さった。火事を出すなどという醜態を演じてからは、私のからだの血が何だか少し赤黒くなったような気がして、その前には、私の胸に意地悪の蝮が住み、こんどは血の色まで少し変ったのだから、いよいよ野性の田舎娘になって行くような気分で、お母さまとお縁側で編物などをしていても、へんに窮屈で息苦しく、かえって畑へ出て、土を掘り起したりしているほうが気楽なくらいであった。（P. 140）

伊豆の山荘に引っ越したかず子は母と穏やかな生活を送っていたが、時々このような生活は「全部いつはりの、見せかけに過ぎない」と感じた。「私たちの人生は、西片町のお家を出た時に、もう終わった」のである。今までお嬢さんとして扱われてきたかず子は伊豆のこの山荘に引っ越して、村の人々からは親切に扱われた。しかし、自分の不注意で火事を起こしてしまった。それは無事に終わったが、かず子は村のあるお嫁さんに叱られ、やっと今まで気づいていなかったことを感じた。自分とお母様の生活はまるで「ままごと」のようなものであり、「子供が二人で暮してゐるみたい」な世間離れした非日常的な生活様式そのものである。かず子はそれを意識し、翌日からその暮し方が一変した。今までのような暮し方ではいけないと、かず子はそう思ったのではないだろうか。大体、自分の貴族生活はこの山荘に引っ越したこととともに終わったのである。それは現実社会の日常性を意識し始めたかず子の意識変化というものである。「野生の田舎娘」（P. 140）になってもよいくらい、かず子はこれから生き方を変えていこうとした。

> これが私たち親子が神さまからいただいた短い休息の期間であったとしても、もうすでにこの平和には、何か不吉な、暗い影が忍び寄って来ているような気がしてならない。お母さまは、幸福をお装いになりながらも、日に日に衰え、そうして私の胸には蝮が宿り、お母さまを犠牲にしてまで太り、自分でおさえてもおさえても太り、ああ、これがただ季節のせいだけのものであってくれたらよい、私にはこの頃、こんな生活が、とてもたまらなくなる事があるのだ。蛇の卵を焼くなどというはしたない事をした

のも、そのような私のいらいらした思いのあらわれの一つだったのに違いないのだ。そうしてただ、お母さまの悲しみを深くさせ、衰弱させるばかりなのだ。（P. 132）

以上の引用文を見ると、かず子の内面意識が明白に表現されている。山村に引っ越したばかりの生活とは結局母娘にとっては最後の安堵に過ぎないものである。蝮とは、かず子の生きていく意志のそのものである。醜く毒の持った蝮というのは田舎娘になり切って行こうとするかず子の強い決意なのではないだろうか。かず子はじぶんが「だんだん粗野な下品な女になつて行く」（P. 146）ことに気づくどころが、なお粗野な人間のもつ通俗的な野性の力を持って、優しいお母様の「生気を吸ひとつて太つて行く」（P. 146）気さえする。自分はさすがに果敢に優しいお母様を犠牲にしていく。また、引っ越したときに、病気になった母は治ってから、「神さまが私をいちどお殺しに」なったと言った。

> ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおっしゃったように、いちど死んで、違う私たちになってよみがえったようでもあるが、しかし、イエスさまのような復活は、所詮、人間には出来ないのではなかろうか。お母さまは、あんなふうにおっしゃったけれども、それでもやはり、スウプを一さじ吸っては、直治を思い、あ、とお叫びになる。そうして私の過去の傷痕も、実は、ちっともなおっていはしないのである。（P. 131）

かず子自身もそう感じた。しかし、かず子は、「イエスさまのような復活は、所詮、人間にはできないのではなかろうか」と深刻に感じた。「過去の傷痕も、実は、ちっともなおっていはしないの」である。つまり、一度死んだ自分は復活しても、傷痕となる身体性がそのまま刻み込まれ、記憶されているのである。それでも、生きていかざるを得ない。しかし、「昨日までの私と違ふ私にして、よみがへらせて下さつたのだわ」（P. 130）と口にしたお母様は、本当に何らかの形で成長できたのであろうか。かず子が火事を起こしたことに対し、お母様はただ「なんでもない事だつたのね。燃やすための薪だもの」といって、一つも非難せずにかず子をなだめてやった。こうした言動を見せるお母様は実際はちっとも変わらずに、依然としてやさしい愚か者の、貴婦人の素振りを示すのである。それに対して、かず子の胸の中には確かに何かが変わった。「悪漢は長生きする。綺麗な人は早く死」（P. 115）ぬ。「貴婦人」である母は所詮死んでいくが、「悪漢のおデコさん」（P. 115）である自分は生きていく。かず子の

気づいたことは、お母様のような優しくて美しい人は経済力といった自立の条件を持たないゆえに、所詮世間で生きていけない。それを意識した上で、かず子は引用文のように、そうした純粋さが保たれた「貴族的」な生活は「たまらなくな」るのだ。

「どう？　お母さまは、変った？」
「変った、変った。やつれてしまった。早く死にゃいいんだ。こんな世の中に、ママなんて、とても生きて行けやしねえんだ。あまりみじめで、見ちゃおれねえ」
「私は？」
「げびて来た。男が二三人もあるような顔をしていやがる。（後略）」（P. 160～161）

かず子の変貌は南洋から帰ってきた直治にも通じ、理解されていた。かつてお母様のことを「ほんものの貴族」（P. 109）や「ママにはかなはねえ」とでも言った直治は、母親のよき理解者であった。お母様のよう貴婦人は「まともの人間でさへ少し狂つたやうな気分になる」（P. 149）という戦後の世では到底生きていられないのである。その一方、少しでも体の労働を体験し変わっていくかず子は直治から見れば、その貴族性がことごとく消え失せてしまって、下品な女に変わったのである。

「いいえ、あなたには、そういうところがあるって言っただけなの。お勝手のマッチ箱にルナアルの絵を貼ったり、お人形のハンカチイフを作ってみたり、そういう事が好きなのね。それに、お庭の薔薇のことだって、あなたの言うことを聞いていると、生きている人の事を言っているみたい」
「子供が無いからよ」
自分でも全く思いがけなかった言葉が、口から出た。言ってしまって、はっとして、まの悪い思いで膝の編物をいじっていたら、
――二十九だからなあ。
そうおっしゃる男の人の声が、電話で聞くようなくすぐったいバスで、はっきり聞えたような気がして、私は恥ずかしさで、頬が焼けるみたいに熱くなった。（P. 159）

庭のバラが咲いたのをお母様に楽しく伝えたかず子はふと一つのことに気づいた。それは自分の中には「リアリズム」（P. 181）というものなどは実際存在していないというもう一つの事実である。かず子は胸の中にあったのは「ロマンチシズム」だけで、それでバラが咲いたぐらいな些細なことで口にし

たりする。そして、つい自分には一人ぼっちの孤独な存在で、子供がないせいなのだという新たな真実を発見した。かず子は労働するために、少しでも生きていく力を獲得したが、自分の中にはまだ子供っぽい幼児性が残っていることを自覚したわけである。

> 私はただ、私自身の生命が、こんな日常生活の中で、芭蕉の葉が散らないで腐って行くように、立ちつくしたままおのずから腐って行くのをありありと予感せられるのが、おそろしいのです。とても、たまらないのです。だから私は、「女大学」にそむいても、いまの生活からのがれ出たいのです。（P. 182）

かず子は伊豆に引越した後の生活が「たまらない」（P181）と感じた。自分の胸の蝮を意識して生きていこうとするが、「まともの人間でさへ少し狂つたやうな気分になる」（P. 149）という戦後の混乱に対し、生への不安をも感じた。働いていこうとする一方、かず子は「生きてをられないやうな心細さ」（P. 156）という不安な感情を抱いてしまう。そこでかず子が見出した一つの捌け口は恋（しかもひめごとの恋）をするという打開策であった。かず子にとっては、人間とほかの動物とは「本質的なちがひがない」（P. 155）が、ただ一つだけは外の生き物には絶対無くて人間にだけあるものは「ひめごと」（P. 155）というものである。たとえそのひめごとは社会規範である「女大学」の道徳に背いた背徳行為でも、かず子はそういう「恋をしとげたい」（P. 182）と新しい決意をした。

> 「お言葉の、その、幸福というのが、私にはよくわかりません。生意気を申し上げるようですけど、ごめんなさい。チェホフの妻への手紙に、子供を生んでおくれ、私たちの子供を生んでおくれ、って書いてございましたわね。ニイチェだかのエッセイの中にも、子供を生ませたいと思う女、という言葉がございましたわ。私、子供がほしいのです。幸福なんて、そんなものは、どうだっていいのですの。お金もほしいけど、子供を育てて行けるだけのお金があったら、それでたくさんですわ」（P. 186）

和田の叔父さまの紹介を介し、一人の芸術家が伊豆の山荘へ見合い結婚にきたが、かず子は結婚の意志がないからと断った。かず子が伊豆へ着てから始めて貧乏の苦しみを知るようになるが、金だけがあって「恋のこころ」（P. 187）がない結婚とはどうしても納得できないものである。自分は金がなかったり幸福でなかったりしてもかまわなくて、せめて好きな人の子供を産めばいよいのである。好きな人といえば、かず子にとってはおそらく弟の先生であった上原という人物なのであろう。六年前に直治の麻薬中毒による借金の問題を解決す

るために、かず子は自分のものを売って一人で上原先生のアパートに金を預けに行った。そこで「いままで見た事もない奇獣のやうな」（P. 174）上原先生に出会った。かず子は誘われ一緒に酒飲みに行き、あるバーの地下室の階段で不意にキスされた。それ以来、かず子の「胸に幽かな淡い虹」（P. 183）がかかってしまった。それ故に、夫と喧嘩する最中、つい「私には恋人があるの」（P. 177）とふっと言ってしまった。それはきっかけとなり、夫婦仲が悪くなっていく一方で、結局、かず子は夫と離婚してしまった。

> あの夜、地下室の階段で、私たちのした事も、急にいきいきとあざやかに思い出されて来て、なんだかあれは、私の運命を決定するほどの重大なことだったような気がして、あなたがしたわしくて、これが、恋かも知れぬと思ったら、とても心細くたよりなく、ひとりでめそめそ泣きました。あなたは、他の男のひとと、まるで全然ちがっています。私は、「かもめ」のニーナのように、作家に恋しているのではありません。私は、小説家などにあこがれてはいないのです。文学少女、などとお思いになったら、こちらも、まごつきます。私は、あなたの赤ちゃんがほしいのです。（P. 189）

その出来事によって、かず子の人生が一変した。いままで「恋さえ知らなかつた」（P. 212）かず子は上原にキスされてから胸の中に恋の種が芽生えた。それはただの自己陶酔というか、あるいは未経験の一種の錯覚であろうとも、とにかく、かず子は恋の充実感を味わった。もし子供を産むなら、相手はほかならず自分に恋のロマンティックな愛着感を与えてくれた上原が最良の対象となるはずである。自分は「押しかけ愛人」（P. 183）としてもかまわず、なりふり構わず、どんな手段をとっても何の惜しみもなく、とにかく自分の恋を成就させていこうと決心したのである。

國立政治大學 National Chengchi University

終わりに

まだ山木家にいた頃のかず子は「ぼんやりの、のんき者」（P. 174）であった。しかし、六年前に上原に突然キスされたあの出来事によって、自分のなかにはそれまで体験し得なかった恋のナルシシズム（自己愛、自己陶酔）の感情をひそかに芽生えていった。その「ひめごと」は自分の離婚の原因の一つとなった。夫と離婚し、西片町の実家に戻っても、かず子は依然として「ずゐぶん世間知らず」（P. 221）の女であった。しかし、母に庇われ生きてきたに生活も限界性が存在していた。お母様は自分と直治のために、金を惜しまずに使い果たし、この西片の家すら売り払われていかなくてはいけなかった。

伊豆の山荘に引っ越した後に、お母様の憔悴していく姿がかず子にはいよいよ耐え切れなかった。その一方、かず子は自分の腹の中に何かが変わっていく

ことにも気づいた。生活のために働かなければならない肉体の労働がかえってどこかで自分を満足させた。かず子は自分がだんだん下品になっていくことを認め、このままでも生きていく自信がついた。

しかし、それと同時に生きていくためには何かが欠いていることにも薄々と感じた。それは自分がもう二十九歳であり、まだ子供っぽいところが残っているということである。十二年前、友達に「あなたは、更級日記の少女なのね」といわれた時の自分は、いまの自分とは本当のところあまり変っていない、未熟の少女である。引用文の言うように、自分は子供がいないゆえに、リアリズム感覚が欠如している。かず子はその更級日記のようなロマンチシズムを排除するため、母になり、自分の子供を持つ、母性としての女性性を身につけさせるという生き方である。

かず子にとって、金が要るが、生活していくための分があればで十分である。今の自分はもう恋のない結婚が納得できない。子供を産むのにも自分の好きな相手の子供でなければいけない。好きな人といえば、自然に弟の先生の上原の姿が浮かんできた。上原先生が結婚していても、自分が押しかけて、易々と身を委ねていく売春的な愛人となってもかまわない。社会の道徳にそむいて自分の恋をなし遂げる行為は「女の生きて行く努力」（P. 196）である。かず子は背徳な自分を肯定し、悪女としての生き方を堂々と表明した。

3-1-2. 恋と革命――恋をして不良になり得るか

直治が南洋から帰ってきた後、かず子は彼の書いた夕顔日誌を読んだ。弟は人間たちの「ケチくさく、用心深さ」（P. 168）を見出し、その虚偽的な社会に耐え切れなかった。「思想、主義、理想、秩序、誠実、真理、純粋」（P. 165）などというもっともらしい言葉が、直治にとってはことごとく「みなウソ」である。それに、直治にとっては学問とはただ「虚栄の別名」（P. 166）で、「人間が人間でなくならうとする努力」（P. 166）なのである。すべての人間が「偽善者」（P. 168）で、自分自身に向かい、自己省察する人間は一人もいない。そして、直治がそこで見出したのは「不良」という対応の仕方である。直治はかえって「人から尊敬されようと思わぬ人たちと遊び」（P. 169）たいのである。なぜなら、他人に媚びを売ることもなく、気取った振りをして、思想などという観念的な言葉を口にして、嘘のような虚偽的な生活をしなくても済む。直治の「不良」の人間の生き方こそ「リアリズム」をもって、善良な人間の生き方である。彼から見れば、人間は「嘘をつく時には、必ず、まじめな顔をしている」（P. 169）。それを逆説的に解釈すれば札付きの人間が却って誠実そのものの現われとなるという発想である。

私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきなの。そうして私

も、札つきの不良になりたいの。そうするよりほかに、私の生きかたが、無いような気がするの。あなたは、日本で一ばんの、札つきの不良でしょう。（P. 194）

世間でよいと言われ、尊敬されているひとたちは、みな嘘つきで、にせものなのを、私は知っているんです。私は、世間を信用していないんです。札つきの不良だけが、私の味方なんです。札つきの不良。私は、その十字架にだけは、かかって死んでもいいと思っています。万人に非難せられても、それでも、私は言いかえしてやれるんです。お前たちは、札のついていないもっと危険な不良じゃないか、と。（P. 196～197）

かず子はようやく直治が夕顔日誌で綴った「不良」という言葉（語り）の意味を理解し得た。札つきの不良こそは世間の偽りを知り、世間をないがしろにする自由な生き方である。世間に「不良」という札が烙印された人間こそ本当の善良な人である。いままで弟が疎ましい存在として見てきたかず子は始めてその苦い自他認識が理解できた。かず子は自己の内部にうごめいている背徳的な意志とは実際は弟と同一的な反逆的な意志を見出した。自分たちには生きる能力は持っていないから、生きていくために、不良になることが一種の必然的なものである。自分たちは非難されても、十字架にかかられ、犠牲にされてもこの偽りの世間と戦おうとする。こうしてみると、かず子は自分を新しく「不良」という反逆者の位置づけを定着させ、新しく出発しようとした。それを前提として、かず子は勇気を出して伊豆に引っ越したその夏、上原に三通の手紙をよこした。

それは、この本の著者が、である。どのように道徳に反しても、恋するひとのところへ涼しくさっさと走り寄る人妻の姿さえ思い浮ぶ。破壊思想。破壊は、哀れで悲しくて、そうして美しいものだ。破壊して、建て直して、完成しようという夢。そうして、いったん破壊すれば、永遠に完成の日が来ないかも知れぬのに、それでも、したう恋ゆえに、破壊しなければならぬのだ。革命を起さなければならぬのだ。ローザはマルキシズムに、悲しくひたむきの恋をしている。（P. 210）

あれから十二年たったけれども、私はやっぱり更級日記から一歩も進んでいなかった。いったいまあ、私はそのあいだ、何をしていたのだろう。革命を、あこがれた事も無かったし、恋さえ、知らなかった。いままで世間のおとなたちは、この革命と恋の二つを、最も愚かしく、いまわしいものとして私たちに教え、戦争の前も、戦争中も、私たちはそのとおりに思

い込んでいたのだが、敗戦後、私たちは世間のおとなを信頼しなくなって、何でもあのひとたちの言う事の反対のほうに本当の生きる道があるような気がして来て、革命も恋も、実はこの世で最もよくて、おいしい事で、あまりいい事だから、おとなのひとたちは意地わるく私たちに青い葡萄だと嘘ついて教えていたのに違いないと思うようになったのだ。私は確信したい。人間は恋と革命のために生れて来たのだ。（P.212）

十二年前、友達に「更級日記の少女」（P.210）と言われたかず子は、新たな恋を成就させるために、道徳にそむき、革命する決意を表明した。今まで自分が何も知らずに生きてきたことはもう耐え切れない。そのようなかず子が生活への焦燥感や不安という感情はどこから来るものだろうか。かず子は今までの生活がたまらなく何ものかをぶち壊そうとした破壊的な・革命的思想が植えつけられるようになっていった。かず子はローザ・ルクセンブルグの書いた『経済学入門』を読み、一つ心得した。かず子は経済学というもの自体がつまらなく、「まつたく理解できない」（P.210）が、その著者の「何の躊躇も無く、片端から旧来の思想を破壊して行くがむしゃらな勇気」という言葉に感銘した。その破壊的思想は美しいものであった。破壊し、革命を起こすという思想はかず子自身の思い込みかもしれないが、今かず子の心境にぴったりと一致する。好きな相手は妻子持ちだから、押しかけていく真似は明らかに世間の道徳を破る行為である。かず子は禁断の恋をして、道徳の革命と巧みに結びついて行動する。

けれども、私は生きて行かなければならないのだ。子供かも知れないけれども、しかし、甘えてばかりもおられなくなった。私はこれから世間と争って行かなければならないのだ。ああ、お母さまのように、人と争わず、憎まずうらまず、美しく悲しく生涯を終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ないのではなかろうか。死んで行くひとは美しい。生きるという事。生き残るという事。それは、たいへん醜くて、血の匂いのする、きたならしい事のような気もする。私は、みごもって、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思い描いてみた。けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残って、思う事をしとげるために世間と争って行こう。お母さまのいよいよ亡くなるという事がきまると、私のロマンチシズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断のならぬ悪がしこい生きものに変って行くような気分になった。（P.222）

最愛のお母様がまもなく死ぬという事実に直面するかず子は、今後自分一人で世間と闘わなければならない。火事を起こしたときのように自分をかばって

あげたお母様はもういなくなる。かず子はこれから自分一人で生きていく。お母様のように世間と争うことなく生きて行くことは到底不可能で、生きていくため世間と戦わざるを得ないのである。生きていくためには醜くなっても世間と闘争して行かなければならない。逆に言えば、醜くなったからこそ、世間と争っても再生する可能性が孕まれているのである。お母様は大変な人よしだから、美しく悲しく一生を終えた。かず子はそのようなことを承知した上で、「日本で最後の貴婦人」（P.225）であったお母様を慕っていても、母と違った道程を選ぶことにした。

> 敵。私はそう思わないけれども、しかし、この奥さまとお子さんは、いつかは私を敵と思って憎む事があるに違いないのだ。それを考えたら、私の恋も、一時にさめ果てたような気持になって、下駄の鼻緒をすげかえ、立ってはたはたと手を打ち合せて両手のよごれを払い落しながら、わびしさが猛然と身のまわりに押し寄せて来る気配に堪えかね、お座敷に駈け上って、まっくら闇の中で奥さまのお手を摑んで泣こうかしらと、ぐらぐら烈しく動揺したけれども、ふと、その後の自分のしらじらしい何とも形のつかぬ味気無い姿を考え、いやになり、
> 「ありがとうございました」
> と、ばか叮嚀なお辞儀をして、外へ出て、こがらしに吹かれ、戦闘、開始、恋する、すき、こがれる、本当に恋する、本当にすき、本当にこがれる、恋いしいのだから仕様が無い、すきなのだから仕様が無い、こがれているのだから仕様が無い、あの奥さまはたしかに珍らしくいいお方、あのお嬢さんもお綺麗だ、けれども私は、神の審判の台に立たされたって、少しも自分をやましいとは思わぬ、人間は、恋と革命のために生れて来たのだ、神も罰し給う筈が無い、私はみじんも悪くない、本当にすきなのだから大威張り、あのひとに一目お逢いするまで、二晩でも三晩でも野宿しても、必ず。（P.230）

お母様が死んだ後、かず子はもう自分が「悲しみに沈んで」（P.225）はいけなく、「戦闘、開始」と宣言し自分の恋を成就するために戦い始める。自分は「恋一つにすがらなければ、生きて行けない」（P.225）と信じ、直治の目を盗み、一人で上京した。どころで、戦闘開始と張り詰めた気分が、上原の住居で彼の女房に出会ったその途端に、自分の名前さえ「言いそびれ」（P.228）て、自分の恋が「奇妙にうしろめたく」（P.228）思ってしまう。自分は奥様とお嬢さんを敵だとは思わないが、彼女らに敵視されることをおびえて、満される充実感を享受すべき恋愛の気持が一度冷め果てたような気がした。しかし、上原に会いたい強い気持から奥さんに済まない気持ちを抑えた。かず子は「又なんじら我が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐え忍ぶものは救

わるべし」（P.226）というイエスさまの教えが自分の場合にも「無関係でない」（P.226）と思う。自分の恋を成就させるためには「イエスさまはお叱りになるかしら」（P.227）と疑っている。かず子はイエスさまの言う神への「愛」が自分の「恋」と同じものだという気がし、最後まで耐えていれば必ず救われると思い込んでいる。その詭弁のような恋愛意識は明らかにかず子の恋への不安の表現となる。もし本当に「みじんも悪くない」と思うなら、イエス様に対しての弁解などは不要なものである。要するに、かず子は堂々と恋を主張するのにもかかわらず、奥さんを目の前にしてやはり引け目を感じずにはいられないのである。

> 私は土間に立って、見渡し、見つけた。そうして、夢見るような気持ちになった。ちがうのだ。六年。まるっきり、もう、違ったひとになっているの　　だ。これが、あの、私の虹、M・C、私の生き甲斐の、あのひとであろうか。六年。蓬髪は昔のままだけれども哀れに赤茶けて薄くなっており、顔は黄色くむくんで、眼のふちが赤くただれて、前歯が抜け落ち、絶えず口をもぐもぐさせて、一匹の老猿が背中を丸くして部屋の片隅に坐っている感じであった。（P.232）

奥さんに上原の行く先を教えられ、かず子はようやく彼に会ったが、呆気なく失望させられた。いままで自分の心に虹をかけた男はこのような醜くて哀れな人だろうかとは夢にも思っていなかった。自分がかけがえのない好きな恋人の上原は戦後の混乱の生活の苦しみを紛らすために、毎日朝から酒を飲み明かしている。「かうでもしなければ、生きて行かれない」（P.238）のである。しかし、電球が切れた家にも全然無関心で、貰ったばかりの一万円をすぐ酒の勘定に使い果たした上原の行為は、かず子には全然理解できない。かず子が「敵意、それにちかい感情」（P.239）さえ感じた。後に「性慾のにほひのするキス」（P.244）をされたかず子は「屈辱の、くやし涙に似ているにがい涙」（P.244）を流した。上原に対して、かず子は徹底的に失望した。

> 「僕は貴族は、きらいなんだ。どうしても、どこかに、鼻持ちならない傲慢なところがある。あなたの弟の直さんも、貴族としては、大出来の男なんだが、時々、ふっと、とても附き合い切れない小生意気なところを見せる。僕は田舎の百姓の息子でね、こんな小川の傍をとおると必ず、子供のころ、故郷の小川で鮒を釣った事や、めだかを掬った事を思い出してたまらない気持になる。」（P.243）

彼が「誰よりも私を愛してゐる」（P.240）と思うかず子はようやく上原の心が読めるようになる。かず子は今まで上原のことを「札つきの不良」（P.193）

で、「鈴を首にさげてゐる小猫みたいで可愛らしい」（P.193）人だと思っていた。しかしながら、かず子は自分の手紙への返事を確かめようとする上に、彼の言葉を聞き、彼も女の気持ちなんかまったく理解していないことに気づいた。かず子が思いを込めて三通も手紙を出したのに、上原は「君たち貴族は、そんな僕たちの感傷を絶對に理解できない」と、むしろかず子との交際関係を断絶させようとした。上原は貴族のうぬぼれこそ対応し切れず、田舎のものの自分とは大きな隔たりが存在していると意識した。そのことを理解したかず子は「僕の赤ちゃんがほしいのかい」（P.244）という上原の問いかけに対して、もうなにも答えられなかった。

「こうしなければ、ご安心が出来ないのでしょう？」
「死ぬ気で飲んでいるんだ。生きているのが、悲しくて仕様が無いんだよ。わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。陰気くさい、嘆きの溜息が四方の壁から聞えている時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無いじゃないか。自分の幸福も光栄も、生きているうちには決して無いとわかった時、ひとは、どんな気持になるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獣の餌食になるだけだ。みじめな人が多すぎるよ。キザかね」
「いいえ」
「恋だけだね。おめえの手紙のお説のとおりだよ」
「そう」
私のその恋は、消えていた。」（P.246～247）

上原に犯されたかず子は上原のことが却って「可哀さう」(P.246)と思って、「必死の無言の抵抗」（P.246）さえ諦めた。上原が「かうしなければ、ご安心ができない」（P.246）と、むしろ寛容的な態度で臨んでいた。そして、上原のその一言で綺麗さっぱり、「その恋は、消えてゐた」（P.247）。上原のことを本当の不良者だと憧れていたが、結局彼も生きる術を持たない軟弱な男だと理解した。その不良の生き方の実は生活上の苦しみや悲しみを紛らすための演技に過ぎない。しかし、不良の生活に憧れているかず子は生きていく力を得るために、上原にすべてを賭けてみた。つまり、上原に寄せる恋愛感情はまったく観念的な想像によって作り出されたものである。その六年前、不意にキスしたことにより、上原という男は不良な男という印象が与えられ、そうして、上原の「不良」の悪の匂いに引きつけられ、自らのナルシシズムの自己愛と勝手に重ね合わせていき、自分にとってはそういう男こそ最良の恋愛対象としてその想像を膨らませて、でっち上げたのである。つまり、恋愛対象となる上原は最初からかず子の自己愛の道具立てであり、実世間に踏み入っていくための通過儀

礼となる。彼の正体がさらけ出された以上は、その観念的な幻想的な恋も破滅していくのである。

> 部屋が薄明るくなって、私は、傍で眠っているそのひとの寝顔をつくづく眺めた。ちかく死ぬひとのような顔をしていた。疲れはてているお顔だった。
> 犠牲者の顔。貴い犠牲者。
> 私のひと。私の虹。マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。
> この世にまたと無いくらいに、とても、とても美しい顔のように思われ、恋があらたによみがえって来たようで胸がときめき、そのひとの髪を撫でながら、私のほうからキスをした。
> かなしい、かなしい恋の成就。（P. 247）

しかし、かず子は上原の「尊い犠牲者」のような顔を見ると、その「恋があらたによみがえって」きた。上原も一人の犠牲者という新たな発見もしたかず子はもう一人の上原という分身に出会ったといえよう。不良者という上原もどうせこの世間と対抗し得ない一人の犠牲者に過ぎない。その犠牲者の表象はまさにお母様や直治、そしてこの女としての自分と重ね合わされている二重的な映し鏡となるのではないだろうか。世間と向き合うことができないから、不良という偽装的な仮面をかぶり、その実は喘ぎ苦しんでいるのである。かつて不良になって生きる力を獲得しようとしたかず子が成就した恋はひたすら犠牲者、敗残者の同類者という「他者の中の私」であった。

終わりに

かず子は生きていくためにはお母様のようにやさしくしてはいけないと意識して、自分の生活内部で革命を起こそうとする。かず子にとっては恋と革命との両者は結局書物から偶然に拾い上げた思想であり、それを強引に自分の苦しみと不安と結びつき、発生した一種の恋愛幻想・革命幻想なのではないだろうか。かず子は戦後の混迷な世間で何かを掴まり、それを生の根拠として生きて行こうとした。そして、思いついた発想は上原との不倫の恋愛である。

かず子は自分が「無思想」（P. 196）で、「思想や哲学なんてもので行動」（P. 196）しないのも正直に認めた。だが、上原への三通の手紙のなかでは次々と直治の「口真似」（P. 197）をして、自分の思想を表明した。まるで「代数の因数分解か何かの答案を考へるやうに」（P. 183）計算し、自分の思いを訴えかけていく。すべては自分の恋を成就するために「鳩のごとく素直に、蛇のごとく慧かれ」（P. 180）と行動するのである。

國立政治大學 National Chengchi University

お母様の死を経て決心を固め、一人で上京したかず子はようやく上原に出会った。しかし、男の容貌と行為にはかず子には鬱陶しく思わずにはいられない。一方、かず子もそのような彼の身から自分との同一性を見出した。彼は自分と同じように何かを頼りにしない限り、「生きて行かれない」（P.238）。彼や自分にとって、生きていることは「何といふやりきれない息もたえだえの大事業」（P.238）である。彼の装った不良ぶりもただの「キザ」（P.244）にすぎないことぐらい、かず子が読み取れていた。

上原との一夜を過ごしたかず子は自分の「望みどほりに、赤ちゃんが出来た」（P.262）。それだけで、かず子は自分が「幸福」（P.262）だと思っている。自分はこの戦いでわずかであっても、古い道徳を「押しのけ得た」（P.264）のである。その古い道徳に背いた自分はまさにこの時代の犠牲者といえよう。そのような運命に就いて、森田氏は以下のように述べている。

> （前略）私（かず子）の恋（道徳）の革命によって、何十年後に未婚の母として社会に、はじめて認められることを実現したのであった。その時、それは社会には認められておらず、私（かず子）の実行したことは文字どおりの革命であった。そして、弟（男）が自殺し、恋の革命をめざした姉（女）が生きのびるという「運命」は、結果から見ると、その後の太宰を暗示したものとなっている。[38]

かず子はその背徳者の運命を甘んじて受けとめて、自分を「道徳過渡期の犠牲者」（P.263）として限定する。かず子が体験したのはこの「おなかの小さい生命」（P.262）が存在している限り、必ず自分の「孤独の微笑のたね」になると信じ込む。自分は道徳にそむいて、「たとひ夫の子でない子を生んでも」（P.263）、「輝く誇り」（P.263）の「聖母子」（P.263）という母性的な連帯意識を強調して、上原に捨てられていくかず子は最初から彼の「人格とか責任とかをあてにする」（P.263）と気がなくて、ひたすら自分の「ひとすぢの恋の冒険の成就だけ」を願い望んでいた。しかし、かず子のこのような革命は本当に先行研究の評価したところの「女としての生命力」の表現となり得るものだろうか。かず子は最後になっても自らの更級少女としてのジェンダー幻想を振り切れないばかりか、その僅かな筋肉労働で得た生活体験は本当のところ現実性が欠いているのではないだろうか。かず子はそのような単純な一途な思いで本当に新しい生が展開されていけるのか、筆者は疑問を抱かずにはいられない。また、世に見捨てられていく貴族的な階級的な身体性を振り払うために、結局、自己愛的な恋愛幻想をして、社会婚姻制度への戦いとなる「不良」の不倫行為をあえて果たしたように見えるが、つきつめたところ、その不良も結局一つの自己愛の反映であることに過ぎない。そして、最終的に、彼女が獲得し

[38] 森田喜郎『文学にみられる「運命」の諸相―近世文学・太宰治・芹沢光治良―』P.393

た「聖母子」的な連帯意識も自らの敗残者意識を母性的な完成と補完をもって成就された一つの幻想であった。

3-2. 不良たるものの意味

3-2-1. 書く男の介入の意味――直治の遺書

直治は遺書をもって、彼は世間と戦う意志が無いことを表明した。また、自分のことを「生活力が弱くて、欠陥のある草」として自らを擬えて見た。つまり、「人と争う力が無い」。直治の語りにおいて、世間から誤解され、「自殺するより仕方がないのじゃないか」(P.249)。彼は世間との大きな溝（疎外感覚）を乗越することが出来ないから、自殺した。渡部芳紀氏[39]によると、直治は「苦悩の旗手」、「太宰の負の理想を託された人物」として見立てている。

> 彼は（筆者注：直治）真の愛とは何か、真の人間とは何かを、死にもの狂いで追い求める。彼は自分の肉体と精神をいためつけながら世の中を批判していく。世の俗物を打擲していく。そして、自分の理想を世に理解されることなく、狂人のようにデカダン生活を続け、孤独のうちに自ら命を絶つのである。そこには、太宰前期の姿があり、晩年の姿がある。[40]

しかし、女語りの作品でありながら、男の直治の遺書や日記が挿入されるのはどういう意味合いとして読み取るべきだろうか。それについて和田季絵は以下のような見解を述べている。

> 彼女が打ち立てる「人間は恋と革命のために生まれてきたのだ」という支柱も、ローザルクセンブルグの『経済学入門』を「学問」としてでなく、「恋」の物語として読みかえることで、「破壊思想」や「革命」という既成のものも自分の発見によって新たな意味が与えられたかのように位置づけられて成立している。「夕顔日誌」や遺書を見ると、「ほんもの」を目指し「恋と革命」に生きる姿はむしろ直治の側に先にあり、それがかず子に影響を与えたとも思われるが、かず子の物語においては、逆にかず子の生き方の正当性を保証するかのように、直治の言葉は配置されている。[41]

---

[39] 渡部芳紀、P.65
[40] 渡部芳紀、P.65
[41] 和田季絵「斜陽」、『国文学　解釈と鑑賞』、1996.6、P.140

つまり直治の語り（書き言葉としての遺書）はかず子の語りと思想両者が相互補完の意味を持ち、かず子の「不良」という表象を裏つけさせるためには不可欠なものである。しかし、その直治の思想はやはり姉のかず子と違うに違いない。直治のデカダンスの思想を分析し、姉のかず子との相違点を考察する必要があると思う。

> お母さまさえ、私を可愛がって下さったら、私は一生お母さまのお傍にいようとばかり考えていたのに、お母さまは、私よりも直治のほうが可愛いのね。出て行くわ。私は出て行く。どうせ私は、直治とは昔から性格が合わないのだから、三人一緒に暮していたら、お互いに不幸よ。私はこれまで永いことお母さまと二人きりで暮したのだから、もう思い残すことは無い。これから直治がお母さまとお二人で水いらずで暮して、そうして直治がたんとたんと親孝行をするといい。（P. 151）

お母様は直治が戦死していたと思っていたが、実は彼は無事でもうすぐ南洋から帰還する。しかし、ひどい阿片中毒のゆえに治らないうちには帰還もゆるされないと、和田の叔父さまから聞いた。これから、三人の生活費を稼ぐために、かず子がある宮様の家に家庭教師でも奉公に上がることになると、叔父様が提案した。

お母様からそう伝えられ、かず子はすぐ頭に来て、裏切られた思いで泣き出した。いままで、かず子はお母様と二人で大変窮屈な生活をしながらも、お母様と一緒だから幸福だと思えるのに、直治が帰還すると聞いたお母様が自分を家から追い出すと言わんばかりの提案で、裏切られたと思わずにはいられない。自分は昔から直治と気が合わないから、直治のために家から追い払われた同様の形となることがもっとも耐えられないことであった。かず子は直治のことが嫌いな上に、お母様が直治をひいきしているから、いっそう怒りがこみ上げる。そのような直治と一緒に暮すのが無理だと思い、家を出るまで思っていた。かず子にとって、今までお母様と二人きりで過ごした日々の幸福は破滅しかけていると予感し、直治が南洋から帰ってきてから、「本當の地獄」（P. 156）が始まる。

> 僕が早熟を装って見せたら、人々は僕を、早熟だと噂した。僕が、なまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと噂した。僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装って見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本当に苦しくて、思わず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装っていると噂した。（P. 169）

やっと南洋から帰ってきた直治は依然として、退廃的な日々を送っている。帰ってきたところで、すぐ近くにある宿屋へ焼酎を飲みに行った。かず子にお母様の事を聞かれても、「早く死にやいいんだ」(P. 161) と答えた。直治は「こんな世の中に、ママなんて、とても生きていけやしねえんだ」(P. 160～161) と思い、そのようなお母様のことが「あまりみじめで、見ちやをれねえ」(P. 161) と嘆いた。帰ってきた翌日すぐ東京へ行って十日ぐらい帰ってこない直治のことに対して、かず子はとても気がかりで、彼が「東京の狂気の渦に巻き込まれてゐる」(P. 164) と思うと、「苦しくつらく」(P. 164) なった。直治と気が合わないが、唯一の弟であるから、かず子はどうしても無視して放り出すわけにはいかないのである。直治のノートブックに書き散らした夕顔日誌を読んだかず子はようやく彼の気持ちを理解した。直治は退廃的なふりをよそいながら、「底知れぬ地獄の気配」(P. 165) で苦しんでいる。千円の借金を解決しようとしたが、自分のかき集めたガラクタや本を売っても五円しか売れなかった。直治にとって、この五円は世に生れついた自分の存在の表徴のように感じた。自分はもう生きていられないが、世の人に「苦しい振りを装っている」(P. 169) とされてしまった。人々が自分の苦しみが理解できないし、正直に自分に「死ね！」(P. 168) と言ってくれる人々も一人もいない。自分のような「弱蟲」(P. 170) は「自殺するよりほか仕様がない」(P. 169)。直治は外見的に退廃的な生活を送り、世の人々を軽蔑しているが、実際は世間におびえて生きていく能力の持たない弱い男なのである。そのゆえに、直治は「途がふさがって、何をどうすればいいのか」(P. 179) わかっていないから、「毎日、死ぬ気でお酒を飲んでいる」(P. 179) のである。そういう直治の綴った文書によって、かず子は彼の苦しみが理解できた。かず子と生き方が違っていても、「本職の不良」(P. 179) になってしまえば、「かへつて楽になる」(P. 179) さえ思い、弟の直治と心が通い合えるようになった。

> 僕は高等学校へはいって、僕の育って来た階級と全くちがう階級に育って来た強くたくましい草の友人と、はじめて附き合い、その勢いに押され、負けまいとして、麻薬を用い、半狂乱になって抵抗しました。それから兵隊になって、やはりそこでも、生きる最後の手段として阿片を用いました。姉さんには僕のこんな気持、わからねえだろうな。(P. 249)

かず子と上原との一夜を過ごした翌朝、弟の直治は自殺してしまった。彼は「もつと早く死ぬべき」(P. 252) だとおもっていたが、「ママの愛情」(P. 252) を思うと、なかなか「死ねなかつた」(P. 252) のである。お母様が死んでしまった以上、自分はなんの未練もなく、自ら命を絶えさせてしまった。直治は「自分がなぜ生きてゐなければならないのか、それが全然わからない」(248)。

「生きてゐたい人だけは、生きるがよい」と、その生の意識が崩壊し、完全退廃的な狂人と成り果てた。なぜ自分とまったく階級の違った人たちと付き合わなければならないのか。友人に付き合い、彼らの身から少しでもその強さを見習い、自分の身にもつけさせようとしたが、結局その試みも無駄であった。

> 僕は下品になりたかった。強く、いや強暴になりたかった。そうして、それが、所謂民衆の友になり得る唯一の道だと思ったのです。お酒くらいでは、とても駄目だったんです。いつも、くらくら目まいをしていなければならなかったんです。そのためには、麻薬以外になかったのです。僕は、家を忘れなければならない。父の血に反抗しなければならない。母の優しさを、拒否しなければならない。姉に冷たくしなければならない。そうでなければ、あの民衆の部屋にはいる入場券が得られないと思っていたんです。（P.249）

> いったい、僕たちに罪があるのでしょうか。貴族に生れたのは、僕たちの罪でしょうか。ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、たとえばユダの身内の者みたいに、恐縮し、謝罪し、はにかんで生きていなければならない。（P.252）

直治は自分の「貴族気質」（P.258）が嫌いで、あらゆる手段を試み、それを捨てようとした。姉のかず子は肉体的な労働を通して、自分が「野生の田舎娘」（P.140）になるように懸命に努力した。一方、弟の直治は「下品に」（P.249」なり、「下品な言葉づかい」（P.249）をして民衆の群れに入ろうとした。しかし、そのような真似は所詮「哀れな付け焼刃 P.249」に過ぎない。「民衆からは悪意に満ちたクソていねいの傍聴席を与へられてゐる」(P.250)だけである。自分から捨てようとしていた貴族性はあくまでも烙印された身体的なものであり、一旦汚されたら「サロンに帰ること」（P.249）さえできなかった。直治はもう民衆の世界にも貴族の世界にも帰還できない浮遊する身体となった。「死んだはうがいい」（P.253）という結論まで至った。その貴族の身分は原罪そのものであり、一生逃れられない。自分のその「狂ひ、遊び、荒んで」(P.252)いた逃避的な行為は、ただ「貴族という自身の影法師から離れ」（P.252）ようとした一つの仮面に過ぎない。

> 人間は、みな、同じものだ。（P.250）

> けれども、この言葉は、実に猥せつで、不気味で、ひとは互いにおびえ、あらゆる思想が姦せられ、努力は嘲笑せられ、幸福は否定せられ、美貌はけがされ、栄光は引きずりおろされ、所謂「世紀の不安」は、この不思議

な一語からはっしていると僕は思っているんです。（P.251）

直治は引用文という言葉に怯えて、極度に不安に陥った。自分は「どこか一つ重大な欠陥のある草」（P.251）で、「快楽のイムポテンツ」（P.252）だと自評した。彼は「遊んでも少しも楽しくなかつた」（P.252）。自分はただ「友人がみな怠けて遊んでいる」（P258）のをみて、「自分ひとりだけ勉強するのは、てれくさくて、おそろしく」（P.258）なるから、それで、仲間入りして、遊んで、実際はちっとも遊びたくもなかったのである。そのような遊びで楽しくもない自分がこの「不思議な言葉」によって、階級的にも道徳的にも異質的な他者に、染められ同一化することが出来なかった。「放埒には苦悩がない」（P.259）というような人間と同化し、一体化することだけはどうしても自分を屈折させることができなかった。そのような「何のプライドも無く、あらゆる努力を放棄せしめるような言葉」（P.251）は「奴隷根性の復讐」（P.251）にちがいない。そのような言葉に反感を抱いた直治は、遺書の最後で発した「僕は、貴族です」（P.261）という大々なる抗議をもってその弱いながらの抵抗意識を表した。自分はあくまでも上原のような「馬鹿な田舎者」と同じように、「何の疑ひも、羞恥も、恐怖も」（P.258）持っていない人間になれない。結局、彼は自分の貴族性を取り除くことに失敗し、貴族の誇りを抱きながら自殺したのではないだろうか。

終わりに

昔から直治と性格が合わないために、かず子は一緒に暮らしても「お互ひ顔を合せても口をきかぬ」（P.227）ままで日々をすごした。それに、お母様が「直治の言ふ事なら、なんでも信じて従はう」ので、いっそうかず子はお母様の直治へのひいきを感じさせた。直治が帰ってきたから、自分がもう用済みでこの山荘から追い出されるのが怖く思った。お母様にかわいがられたいかず子にとって、直治はどれほど恐ろしい存在が言うまでもない。しかし、彼の夕顔日誌を読んで、かず子は今まで理解し合えなかった弟のことを理解した。

弟の不良ぶりの根源にあったものは実際は優しさゆえの不良なのではないだろうか。他人の「お仕事で得たお金」で（P.253）、自分が「つまらなく飲み食ひして、女を抱くなど、おそろくして、とても出来ない」（P.253）のである。自分は人の御馳走にさえなれないから、「金まうけなんて、とてもとても出来や」（P.253）しない。民衆の家に入ろうとして、一生懸命に下品になっても、ついに失敗した。自分の家からお金や品物を持ち出し、お母様や姉のかず子を悲しませたが、彼自身は「少しも楽しく」（P.253）ない。かず子はそのような弟がもし「本職の不良」（P.179）になってしまえば、「かへつて楽になる」（P.179）さえ思ったが、ついに弟と交流できないまま、その死を迎えた。

一方、彼の日誌を読んで、かず子はその退廃的な思想にどこか身をそめられた。上原への三通の手紙において、直治の言葉と似たような「口真似」(P.197)をしたのはその弟から染められた「貴族的な」「優しさ」ゆえの不良から来る反逆的な革命（不倫）の証拠となるのではないだろうか。「世間でよいと言はれ、尊敬されてゐる人たちは、みな嘘つきで、にせものなの」(P.196) だと手紙の中で説いたかず子はあきらかに直治の影響から受けたのではないだろうか。その言葉を受け入れ、世間に対して疑問を感じ始めた。それに、「レニン先選集」(P.209) やカウツキイの「社会革命」(P.209) などの弟の本を借りて読み、ついに大人の言葉を信用せずに「人間は恋や革命のために生れて来たのだ」(P.212) という思想を確信し、植えつけられるようになった。要するに、かず子は自分の日常的な生活の不安や肉体労働のつらさが、弟の思想と結び合わせた上で、はじめてその「不良」の理論が移転され、構築されたのではないだろうか。

そういう思想を持ち得るようになったかず子の変貌を知らないまま直治はその破滅の終焉を遂げていった。

> 姉さんは美しく、(僕は美しい母と姉を誇りにしていました)そうして、賢明だから、僕は姉さんの事に就いては、なんにも心配していませぬ。心配などする資格さえ僕には有りません。どろぼうが被害者の身の上を思いやるみたいなもので、赤面するばかりです。きっと姉さんは、結婚なさって、子供が出来て、夫にたよって生き抜いて行くのではないかと僕は、思っているんです。 (P.254)

直治は依然としてかず子の美しさを慕い、姉が生きていくことを信じていた。まさにかつてかず子に結婚を申し込みに来た芸術家がいったように、「女のひとは、ぼんやりしてゐて、いいんですよ」(P.187) という言葉を直治も同感したのである。だが、彼はかず子が女性性としての娼婦的な行為をし、母性的なドメスティック・イデオロギーの解放を果たしていったことを予想もしていなかったのである。直治という「小さい犠牲者」のためにその償いとして、産まれてくる子供を直治の私生児として、愛した上原の奥さんに抱かせるだけで、弟の憾みを辛うじて報いようとした。

3-2-2. 母性の達成――道具立てとしての男

世間の人は上原が悪徳な人だと思っていても、かず子はやはり上原のデカダンを認めているだろう。上原のデカダン生活が古い道徳に対する「最後の闘争の形式」であるとすれば、かず子の不道徳による「母」としての実現も、古い道徳に対する闘争の一形式なのではないだろうか。

犠牲者。道徳の過渡期の犠牲者。あなたも、私も、きっとそれなのでございましょう。

革命は、いったい、どこで行われているのでしょう。すくなくとも、私たちの身のまわりに於いては、古い道徳はやっぱりそのまま、みじんも変らず、私たちの行く手をさえぎっています。（P. 263）

つまり、かず子は自分と上原が古い道徳に反抗する犠牲者だと思っている。しかし、かず子と上原はやはり正反対なのである。上原は人生の黄昏をみるが、かず子は朝だと考える。にもかかわらず、そのようなかず子は上原と恋することを通じて自分の道徳革命を達成しようとした。つまり、上原との恋はひとつの通過点で、上原を革命のための道具として扱うのではないだろうか。上原の犠牲者としての意味を探求したい。また、自分が人生の黄昏に至ったと思った上原と人生の朝を迎えるかず子を分析して男女の生命力の差異をもっと明らかにしようと思う。

私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきなの。そうして私も、札つきの不良になりたいの。そうするよりほかに、私の生きかたが、無いような気がするの。あなたは、日本で一ばんの、札つきの不良でしょう。そうして、このごろはまた、たくさんのひとが、あなたを、きたならしい、けがらわしい、と言って、ひどく憎んで攻撃しているとか、弟から聞いて、いよいよあなたを好きになりました。（P. 194）

六年前に直治の麻薬中毒と借金問題を解決するために、かず子は上原を始めて知っていた。最初はかず子は上原に就いて何も知らなかったが、ただ「弟の師匠さん、それもいくぶん悪い師匠さん」（P. 188）と、思っていたが、彼の「ちょっと軽いイタズラ」（P. 189）で「へんに身軽になつたくらゐの気分」（P. 189）さえ感じた。初めて出会った相手にもかかわらず、いきなりキスをした上原にたいして、いままで「恋も知らなかった」（P. 177）かず子はそのような行為によって恋心が出来た。そのような彼のことを、かず子はそう悪くなくて、「いいお方」（P. 178）と思っていた。そうして、彼を慕った気持ちを心に隠して、いま「悪漢は長生きする」（P. 115）と思っていて不良になりたいかず子は彼が最適な模範だと思っているに違いない。

あなたの事ですから、きっといろいろのアミをお持ちでしょうけれども、いまにだんだん私ひとりをすきにおなりでしょう。なぜだか、私には、そう思われて仕方が無いんです。そうして、あなたは私と一緒に暮して、毎

日、たのしくお仕事が出来るでしょう。小さい時から私は、よく人から、「あなたと一緒にいると苦労を忘れる」と言われて来ました。私はいままで、人からきらわれた経験が無いんです。みんなが私を、いい子だと言って下さいました。だから、あなたも、私をおきらいの筈は、けっしてないと思うのです。（P. 194～195）

「いまの生活が、たまらない」（P. 181）とつくづく感じたかず子は勇気を出して上原に手紙を送った。実はかず子は彼の著書を読んでも「面白かったり面白くなかったり」（P. 189）という気がして、「あまり熱心な読者ではなかった」（P. 189）が、自分の目的を達成するために彼に接近した。彼に自分を愛させるようにいろいろと工夫した。自分は「おメカケ」（P. 189）とされても「かまはない」（P. 189）し、上原の「お仕事のためにもいい」（P. 190）と、さまざまな理由を一々挙げた。すべては自分の恋を成就するためのことなのである。前も述べた（3-1-1 の終わりに）ようにかず子はどうしても自分の子供を持つのを必要として、この恋を通してそれを得ようとしている。

（前略）戦闘、開始、恋する、すき、こがれる、本当に恋する、本当にすき、本当にこがれる、恋いしいのだから仕様が無い、すきなのだから仕様が無い、こがれているのだから仕様が無い、（後略）。（P. 230）

引用文のように、上原の奥さんを直面にして恥ずかしくなったかず子は自分の恋に対して弁解しようとした。自分は「恋と革命のために」（P. 230）行動しているから、「神に罰し給ふ筈が無い」（P. 230）と自分を説得する。しかし、自分の恋の正体に対して何の裏づけを見出せないから、たえずに「本当に」や「仕様が無い」などの言葉でしか弁解できない。また、自分は上原と一緒に過ごしたときがその六年前の一夜に限り、実際に真の付き合いはまったく無いのである。それは本当の恋になりえるかということには疑問を抱いてならないと思う。ましてや、かず子は彼の作品にあんまり興味も無いのである。つまり彼の思想にはそれほど共感を覚えていることも無いのではないだろうか。上原のことは最初から自分の恋と革命の手段に位置づけられ、かず子の計算で一つの道具になったのである。

駄目です。何を書いても、ばかばかしくって、そうして、ただもう、悲しくって仕様が無いんだ。いのちの黄昏。人類の黄昏。芸術の黄昏。それも、キザだね。（P. 241）

「いいえ、私、花も葉も芽も、何もついていない、こんな枝がすき。これでも、ちゃんと生きているのでしょう。枯枝とちがいますわ」（P. 242）

ようやく上原に出会ったかず子はその彼の惨めな姿をみて失望したし、自分の「生き甲斐」(P.232) であろうかと疑った。一方、彼のわずかな思いやりで、「誰よりも私を愛してゐる」(P.240) と確信した。すべては自分の計算どおりである。しかし、彼に「惚れちやつた」(P.244) といわれてもかず子はちっとも喜んでいなくて、「笑ふことが出来なかつた」のである。引用文のように、全篇にわたって、かず子と上原との交流は飲み屋の千鳥から出たこの場面でしかしない。かず子は初めて上原の思想に接触した。世間のすべては上原にとって無意味なので、人生の黄昏を説いてもただのキザにすぎない。路傍の葉の一枚もついていない枝にたいして、かず子は好きだといって、その枝に生命力を感じた。上原は人生を黄昏としてみたが、かず子はまるでその枝を自分の比喩とするように枝の生きていることに感服した。そして、上原は彼自身を田舎者に位置づけて、かず子が「自分の感傷」(P.243) を理解してくれないと思っている。それに、「貴族は、きらひなんだ」(P.243) と、かず子の手紙の返事に就いて交流を拒む。

> 死ぬ気で飲んでいるんだ。生きているのが、悲しくて仕様が無いんだよ。わびしさだの、淋しさだの、そんなゆとりのあるものでなくて、悲しいんだ。陰気くさい、嘆きの溜息が四方の壁から聞えている時、自分たちだけの幸福なんてある筈は無いじゃないか。自分の幸福も光栄も、生きているうちには決して無いとわかった時、ひとは、どんな気持になるものかね。努力。そんなものは、ただ、飢餓の野獣の餌食になるだけだ。みじめな人が多すぎるよ。キザかね。(P.246～247)

上の引用文はかず子を犯した後の上原の発言だ。そういう生活への絶望は上原と直治との共通点なのであろう。二人どもはどうすれば生きていられることがわからなくて、死ぬほど酒を飲むことしか出来ない。彼らは最初から努力などの可能性を否定して、自ら幸福への道を塞いだのではないか。一方、かず子はこのままで「腐つていく」(P.182) のを拒否して、この不安から逃れる出口を見出すようにかんばっていた。そして、自分は恋と革命のために生きていくことを決めた。それらの努力はおそらく上原がまったく理解できないし理解しようともしないのだろう。かず子を抱くこともただそうしなければ「安心が出来ない」(P.246) だけなのである。にもかかわらず、上原は恋のことが「おめえの手紙のお説のとほりだよ」(P.247) と言った。彼の言動から見れば、かず子の恋に対しての決心を理解しなくて、その発言もただキザに過ぎないのだろう。それを聞いたかず子もそのことを気づいたから、「その恋は、消えてゐ」(P.247) た。

終わりに

いままで戦ってきたかず子はようやく自分の恋を成就した。しかも妻子のある男を相手として、自分の恋を成就した。かず子は自分の恋のために、あえて道徳に挑戦をして、革命をし遂げた。しかし、その男はかず子を愛していなかった。自分はあくまでも押しかけの女として扱われた。それに、いままで自分が憧れた本当の不良者は実は生きる能力がないものなのである。かず子はその不良から生きていく力を得ようとしたが、ついに失敗したのであろう。かず子は恋が消えていたといったが、上原の「疲れはててゐる」(P.247) 顔を見た途端、その恋が「あらたによみがへつて来た」(P.247) と感じた。その顔は「貴い犠牲者」の顔なのである。上原も一人の犠牲者という事を発見したかず子は新たな上原に出会ったといえよう。そのゆえに、この恋は成就したが、「かなしい」(P.247) のである。

上原はかず子の恋がよみがえったことも気づき、かず子にキスされて「幸福」(P.247) だと感じた。いままでキザにして来た自分はようやく一人の女に理解されたと思っていて、幸福だといえるのではないだろうか。しかし、彼はそれも「おそ」(P.248) くて、人生を黄昏として放棄した。かず子もそれを認識した。かつて「はばむ道徳を、押しのけられませんか」(P.197) と、彼と一緒に道徳革命をしようとしたが、かず子はいまそれをあきらめた。かず子は上原に捨てられたり忘れられたりしてもかまわない。自分はもう「よい子を得た」(P.263) から、「満足」(P.263) なのである。

そのような人生の黄昏にいた上原に対して、かず子はもう「お酒をやめて、ご病気をなおして、永生きをなさって立派なお仕事」(P.263) などと、「おざなり」(P.263) なことを言いたくないのである。上原にとってそれらは無用のことだと、かず子はよく知っている。そのデカダン生活は彼が世間に戦えないゆえに、わざと不良を気取っての振りで、彼の「最後の闘争の形式」(P.263) なのである。しかし、かず子はそのような形式がついに失敗に終わると知っている。直治のことをもそう思っているように、むしろ中途半端な不良を捨てて、「所謂悪徳生活をしとほす」事のほうはかえってよいのである。かず子はそれしか助言できなくて、彼を見殺しにするほかならない。一方、かず子は上原が自分に「こんな強さを与へてくださつた」(P.264) ことに感激して、彼との恋を通じて自分の子を持ち、これからも生きていこうとする意志を表明した。

3-2-3. 悪女の聖母憧憬―滅びていく母と生き延びていく娘

お母様はやさしさを持っている一方、デカダンの一面を持っている。それはまさに「不良とは、優しさの事ではないかしら」。つまり、お母様のデカダンの根源は優しさということだろう。

ああ、お母さまのように、人と争わず、憎まずうらまず、美しく悲しく生涯を終る事の出来る人は、もうお母さまが最後で、これからの世の中には存在し得ないのではなかろうか。死んで行くひとは美しい。生きるという事。生き残るという事。それは、たいへん醜くて、血の匂いのする、きたならしい事のような気もする。私は、みごもって、穴を掘る蛇の姿を畳の上に思い描いてみた。けれども、私には、あきらめ切れないものがあるのだ。あさましくてもよい、私は生き残って、思う事をしとげるために世間と争って行こう。お母さまのいよいよ亡くなるという事がきまると、私のロマンチシズムや感傷が次第に消えて、何か自分が油断のならぬ悪がしこい生きものに変って行くような気分になった。」（P. 222）

かず子は「生きて行かなければならない」と生を強調、必ず生き続けていく意志を表明した。一方、お母さまはかず子と正反対で、世間と争わないのである。饗庭孝男はこの対照的な意味に就いて、「一方は滅亡の徹底した浄化として、他方は、道徳革命によって生きるという生の肯定においてである」[42]と述べた。氏は「母の貴族性に対して、かず子は貴族の子でありながら、野生の児であろうとする」[43]といった。そして、かず子自身も、お母様のことを「世の中には存在し得ない」（P. 222）といって、親子が相対化されていることが明らかであろう。

気取るという事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあったものだけれども、じっさい華族なんてものの大部分は、高等御乞食とでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのものだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある。(P. 109)

直治のこの発言から見れば、彼は世の中の貴族はすべて爵位だけあって、本物の貴族ではない。自分やかず子は貴族というより、むしろ「賤民」(P. 108)にちかいのである。かず子もそう思っていて、お母様のまねをしたら「ほんものの乞食の図になつてしまひさうな」(P. 110)がして、それをやめようとした。お母様のまねが不可能で、「絶望みたいなものをさへ感じることがある」（P. 111）というかず子は最初から自分とお母様との違いを知っている。お母様を慕っているが、かず子はそのような人になれないことをも知っているのである。

[42] 饗庭孝男『太宰治論』、P.224
[43] 饗庭孝男『太宰治論』、P.224

あの頃から、どうもお母さまは、めっきり御病人くさくおなりになった。そうして私のほうでは、その反対に、だんだん粗野な下品な女になって行くような気もする。なんだかどうも私が、お母さまからどんどん生気を吸いとって太って行くような心地がしてならない。（P. 146）

伊豆の山荘に引っ越すことを余儀なくされたお母様は悲しみすぎて、病気になってしまった。無事に治ったが、今度はかず子の不注意で火事が起こした。その火事のせいで、お母様は「夜中に時たま呻かれる事があ」って、だんだん衰弱になっていく。かず子はお母様がこのような目に遭ったことに、責任を感じずにはいられないのである。お母様は自分を叱ったことなく、今までの無い苦しみを我慢している。病気の治ったときに、「昨日までの私と違ふ私にして、よみがへらせて下さつたのだわ」（P. 130）といったお母様はこれから変わらなければ生きていられないことをも気づいたのだろう。だが、お母様は到底変わらなくて、そのやさしさを保ちながら死んでしまった。同じことを感じたかず子だけが変わって生き延びた。

すでに述べたように、かず子はいまの生活から逃れようとしている。そのやり方はこれまでの「女大学」の立場から見れば、「非常にずるくて、けがらはしくて、悪質の犯罪」（P. 180）だとかず子は認めた。それはかず子の過去に隠された「ひめごと」なのである。かず子はすでに一度結婚に失敗している。そのかず子の過去に就いて、母は次のように言っている。

「お母さまがね、あの時、裏切られたって言ったのは、あなたが山木さまのお家を出て来た事じゃなかったの。山木さまから、かず子は実は、細田と恋仲だったのです、と言われた時なの。そう言われた時には、本当に、私は顔色が変る思いでした。だって、細田さまには、あのずっと前から、奥さまもお子さまもあって、どんなにこちらがお慕いしたって、どうにもならぬ事だし、……」（P. 154～155）

これに対して、鳥居邦朗は次のように述べた。

この母のことは必ずしも論理的な要請ではないかもしれない。単に妻子ある男との恋が娘を不幸にすることを案じているだけかもしれない。しかしそれでもなお、その母の判断の背後には、母自身無意識であったにしろ、「女大学」の道徳にことさらに抗ってまで生きることをよしとしないような一種の倫理感が働いていたと見るべきであろう。かず子の求める生の倫理は、母の固守する「貴族」の感性、美の感性に抗うものであったのである。かず子が自分のうちに、母を犠牲にして太る蝮を自

覚したのは正当である。かず子が生きんとする限り、彼女は母の「貴族」の感性と戦わざるを得なかったのである。[44]

氏は『斜陽』の構成上の弱点について「母は一方において美しき最後の貴婦人としてデカダンか紙一重のところにおり、札つきの不良をもそのままに肯定するところにいる。にもかかわらず、生きんがために既成倫理の垣を超えんとするかず子に対しては、あたかも既成倫理の擁護しゃのごとくかず子を束縛する」[45]と述べる。確かに氏の言うとおりに、旧来の道徳と戦おうとするなら、母の既成道徳観にそむかざるを得ないのである。お母様はかず子の離婚に就いての噂を聞いたとき、「裏切られた」と感じてならない。だが、かず子が自分にひめごとがあることをお母様に告げたとき、お母様は「毎朝、お父さまにかず子を幸福にして下さるやうにお祈りしてゐるのですよ」(P. 155) と、かず子をやさしく見守っている。そのひめごとが必ずしも既成道徳に準ずるひめごとではないことが、お母様はおそらく知っているのでありながら、かず子のためにそのまま受け入れて「よい実を結んでくれたらいい」(P. 155) と祈る。それはかず子にとってお母様の最大な魅力なのではないだろうか。

お母さまのお読みになる本は、ユーゴー、デゥマ父子、ミュッセ、ドオデエなどであるが、私はそのような甘美な物語の本にだって、革命のにおいがあるのを知っている。お母さまのように、天性の教養、という言葉もへんだが、そんなものをお持ちのお方は、案外なんでもなく、当然の事として革命を迎える事が出来るのかも知れない。 (P. 209)

かず子にしてみれば、革命するためには、「女大学」などの既成道徳を破らなければならないのである。しかし、お母様のようなひとなら、必ず革命を簡単に受け入れるのである。それこそが自分とお母様との決定的な違いなのではないだろうか。お母様は「人と争わず、憎まずうらまず、美しく悲しく生涯を終る」 (P. 222) ひとなのであるが、自分はお母様のまねなどとても出来ない以上、生きて行こうするなら必ずお母様と違った道を選ばなければいけないのである。

終わりに

お母様はかず子にとって、取替えの無い存在なのであることは言うまでも無いだろう。お母様に可愛がれていたかず子は世間知らずに生きてきたが、お母様がだんだん衰弱になっていくことを知っている以上、自分が一人になっても

[44] 鳥居邦朗「斜陽」、『作品論太宰治』所収、P.341
[45] 鳥居邦朗「斜陽」、『作品論太宰治』所収、P.342

生きなければいけない。そのようなお母様を犠牲にしていたうちに、生きるための方法を探していた。自分はお母様の真似はおろか、お母様のように美しくて悲しい生活を送っていることは不可能なのである。胸の中の蝮を意識しながら、不良への傾きを示した。かず子はお母様の愛に包まれた一方、醜くなっても生きて行こうという意志を表明した。「悪漢は長生き、綺麗なひとは早く死ぬ」という論理で行動していたかず子にとって、生きること自体はその美しさを取り除かなければいけないのである。

ところが、お母様は生きている限り、自分はひめごとがあっても、やはりお母様を捨てて東京の上原のところに駆けていけない。相手は妻子あるの男であるから、お母様にそのひめごとを打ち明けるのもできないのである。それもかつて離婚のときにお母様の言った「裏切られた」を憚っているのためだろう。お母様が死んだ後、自分の前を遮った最後の道徳の壁も壊れた。それからこそ、「戦闘、開始」（P.225）ということが出来るようになる。お母様が日本最後の貴婦人であるから、そのお母様の死は自然に世の中の貴族の滅びといっても差し支えも無いだろう。お母様の死によって、貴族性が消えていたから、旧来の道徳を憚る必要も無くなったのである。

上原とのかなしい恋を成就して、彼の子供ができたかず子は今度自分も「犠牲者」（P.263）になったということを知っている。戦うべきの古い道徳は「やつばりそのまま、みぢんも変わらず、私たちの行く手をさえぎつてゐ」（P.263）るのである。が、自分の子供が出来たことで、かず子はすくなくとも、お母様のように自分の子のために犠牲にしようとするという、お母様みたいな貴族的な母性愛がよみがえったのではないだろうか。貴族とは爵位を持つからいえようのものではないと、かず子はお母様と直治を通してそれがわかった。誇りがある限り、初めて貴族だといえよう。これから自分と子供二人きりで行こうとするなら、どんなにつらくて苦労することはかず子は知っているのだろう。今度は誇りがあるから自分の子のために犠牲者になってもかまわない意志を明らかにした。そのような犠牲者の意志は母譲りの母性と貴族の誇りなのではないだろうか。

第四章、日常性からの反逆――『おさん』における家庭的な女の視線

罹災、敗戦、事業の失敗で落ちぶれた夫の日常と自死を、妻としての「私」は苦渋に満ちた口調で語る。ジャーナリストとして自認する夫は外泊を重ね、女との不倫関係の泥沼にはまったままである。「私」はほろ苦い気分にさらされながら、夫の不実さを責める代わりに、むしろ、もっと気楽になってと願う。ある日、夫は何の前触れもなく突然旅に出て、愛人と心中を遂げていく。革命家ぶりを気取った夫の遺書を読まされた「私」はただその「馬鹿馬鹿」しく感じ、ひたすら身悶えするばかりだった。安藤宏氏は『ヴィヨンの妻』を夫婦間の齟齬と懸隔が描出されている作品として指摘し、『おさん』の場合はそれ以上「より強い否定形で拡大」[46]したものだと評を下している。また、太田静子の妊娠と山崎富栄との恋愛を妻に知られることへの恐れと罪の意識からの煩悶、そして自らの破滅への予感という作家太宰の負の意識が、作家の周辺事情があきらかにこの作品の背景として反映されていた。

4-1. 夫の死を眺める妻の冷ややかな眼

「私」は夫のことを悲しく同情するが、何も対抗することが出来ない。夫の思想や革命への思いに「私」は共感することがあるし、共感しないところもあった。夫の革命思想と違って、「私」が気がかりだったのは家庭、夫、そして、自分と子供の幸福だったのである。それは日常的な小市民の幸福願望を抱いた妻である「私」が夫との間の大きな相違点である。夫婦の疎外意識と懸隔は夫の前では言葉にすることはなかった。また、そうした妻の表象に関して、野原一夫氏は以下のような見解を示している。

> （前略）『おさん』の妻は、太宰治の願望が生んだ理想の女房像と言えよう。いや、それは、すべての男性がひそかに希求している理想の女房像かもしれない。遊女と深い仲になっている亭主の思いを遂げさせてやるために、有金と衣類のすべてをさしだして身請けさせようとする「心中天の網島」のおさんのなかに、近松門左衛門も理想の女房像を見出していたのかもしれない。しかしそれが、身勝手な願望であることを、いちばんよく知っていたのは太宰治だったはずである。[47]

---

[46] 安藤宏「『ヴィヨンの妻』試論」、国文学解釈と鑑賞、1988.6

[47] 野原一夫『太宰治　生涯と文学』、筑摩書房、1998.5、P.412~413

理想的な女房を具現化した『おさん』の妻像は全く批判的な目でぐうたらの亭主を見る視線が存在していなかっただろうか。第一章において先行研究の説で触れたように、夫という性的他者を見つめる妻の批判的な視線こそ問題視されるべきものだと思われる。そして、『おさん』の語りを厳密に再検証することによって、そこで特徴付けられる妻の表象を新たに意味づけ、定着させていきたい。

（変ったお方になってしまった。いったい、いつ頃から、あの事がはじまったのだろう。疎開先の青森から引き上げて来て、四箇月振りで夫と逢った時、夫の笑顔がどこやら卑屈で、そうして、私の視線を避けるような、おどおどしたお態度で、私はただそれを、不自由なひとり暮しのために、おやつれになった、とだけ感じて、いたいたしく思ったものだが、或いはあの四箇月の間に、ああ、もう何も考えまい、考えると、考えるだけ苦しみの泥沼に深く落ち込むばかりだ。）

どうせお帰りにならない夫の蒲団を、マサ子の蒲団と並べて敷いて、それから蚊帳を吊りながら、私は悲しく、くるしゅうございました。」(P.272)

敗戦後、妻の「私」は夫の身の上に何かが変わったと敏感に読み取っていた。戦争のために、自分たちが長い間住んでいた小さい貸家は爆弾に襲われ、ほぼ崩壊されたくらいであった。もう親子四人で住める家ではなくなったため、「私」は二人の子供をつれ、里の青森市に疎開することにした。夫は一人で東京に取り残され、今まで通りに雑誌社に通っていた。「私」たちが青森市に疎開し、四ヶ月もたたぬうちに、今度は青森市も空襲に襲われる羽目になった。大変な苦労をして実家に持ち運んできた荷物でさえ完全焼失され、自分たちは余儀なく「着のみ着のままのみじめな姿」(P.270) で知り合いの家に窮屈な思いをしてしばらく身を置かせることにした。まもなく日本が無条件降伏になり、やっと酷い戦争が終わった。「私」は「東京が恋ひしくて、二人の子供を連れ、ほとんど乞食の姿でまたもや東京に舞ひ戻」(P.270) ったが、「夫の身の上が変わって来」(P.270) たと感じた。「私」は「よい夫、やさしい夫」(P.271) に恵まれ、結婚以来の十年間、「いちども私をぶつたり、また口汚くののしつたり」(P.271) したことはなく、「仕合せ者」だと思っている。「夫の優しさ」(P.272) を思いつくと、夫が恋しくてならない。だが、ただの四ヶ月のうちに、これまでのやさしい夫がまるで別人のように変わった。夫は自分の視線と直接見合わせることが怖いようで、昔より「無口」(P.271) になってきた。まるで「たましひの、抜けた」(P.267) 空っぽの人間のように、「幽霊のやうな、とてもこの世に生きてゐるものではない」(P.267) ような姿であった。「私」の目に映った夫の姿を見つめ、いまの自分の身の落ちぶれより「つらい」(P.269) と思った。

三畳間で、子供たちは、ごはん、夫は、はだかで、そうして濡れ手拭いを肩にかぶせて、ビイル、私はコップ一ぱいだけ附合わせていただいて、あとはもったいないので遠慮して、次女のトシ子を抱いておっぱいをやり、うわべは平和な一家團欒の図でしたが、やはり気まずく、夫は私の視線を避けてばかりいますし、また私も、夫の痛いところにさわらないよう話題を細心に選択しなければならず、どうしても話がはずみません。」(P. 273)

「可愛いでしょう？　子供を見てると、ながいきしたいとお思いにならない？」

と言ったら、夫は急に妙な顔になって、

「うむ。」

と苦しそうな返事をなさったので、私は、はっとして、冷汗の出る思いでした。」（P. 276）

「私」は夫が変わったのを感じ取り、そのような夫のことが不憫に思い、せめて家庭の穏やかさだけを保ちたいことで懸命であった。上の引用のように、「私」は夫の機嫌をとるために、一緒にビールを飲み、少しでも夫を楽しませようとした。「取り残され」(P. 276) ていることに、ただ「わびしい溜息」(P. 276) をつくだけで、「夫の恋の風の向きの変る」（P. 276）を祈るしか何も打つ手がなかった。妻の「私」は夫が変ったとしても、強いて夫を引きとめたりしない。ただ辛抱強く、夫を待つ妻の役割を果たした。また、「子供のためにも」(P. 276) 夫と別れることもできないし、子夫に長生きしてもらおうと、懇切に願っている。一方において、革命思想を甲高く唱えている夫は、フランスのロマンチックな王朝を破壊するように、「平和な家庭をも、破壊しなければならない」（P. 275）と言ってのけて憚らない。「私」は夫のつらさが「よくわかる」(P. 275) が、自分だって「夫に恋をしてゐる」（P. 275）から、そのまま夫を放っておいて家庭を壊すわけにもできないのである。

その時、ふっと私は、久方振りで、涼しい幸福感を味わいました。（そうなんだ、夫の気持を楽にしてあげたら、私の気持も楽になるんだ。道徳も何もありやしない、気持が楽になれば、それでいいんだ。）（P. 279）

「私」は毎日夫の「食がちっともすすまぬ様子で、眼が落ちくぼんで、ぎらぎらおそろしく光」（P. 278）ってる姿を見、苦しい思いをするばかりである。夫が「いっそ発狂しちゃったら、気が楽だ」（P. 278）と、やけくそにいった。「私」も夫の絶望的な気持にひどく同感のと同様に、夫が「苦しさうだと、あたしも苦しいの」（P. 278）と、妻の告白である。夫が「私」と少しでも対話す

るなら、「私」は幸福さえ感じた。「私」は道徳なんか一向気にせずに、夫婦間の楽しい気分のほうがよほど大事なものではないだろうかと思う。そういう単純な気持は「私」の一種の「鈍感」（P.278）のせいかもしれないが、夫の存在が恋しいだけに、夫が気楽にさえなれるのを願っている。やせた自分のことを心配してくれて自分は「なんともおもつてやしないわ」（P.279）と健気に答えた。自分を心配してくれるよりも、「私」は夫が彼自身のことを心配したらよいのだと考えている。自分は「利巧ですから」（P.279）、夫から心配される女ではない。

> 男のひとは、妻をいつも思っている事が道徳的だと感ちがいしているのではないでしょうか。他にすきなひとが出来ても、おのれの妻を忘れないというのは、いい事だ、良心的だ、男はつねにそのようでなければならない、とでも思い込んでいるのではないでしょうか。そうして、他のひとを愛しはじめると、妻の前で憂鬱な溜息などついて見せて、道徳の煩悶とかをはじめて、おかげで妻のほうも、その夫の陰気くささに感染して、こっちも溜息、もし夫が平気で快活にしていたら、妻だって、地獄の思いをせずにすむのです。ひとを愛するなら、妻を全く忘れて、あっさり無心に愛してやって下さい。（P.280～281）

夫は「私」の存在を懸念していて、たとえほかの女の体を抱いても全然楽しくない。そのようなニヒリスティックな夫の姿がかえって「私」を苦しませるだけである。「私」は夫に「きらはれ、憎まれてゐた」（P.280）ほうがかえって「気持がさつぱりしてたすかる」（P.280）と思う。何よりも夫の気持ちの楽しさは一大事で、夫さえ少し気楽になってくれれば自分も楽になれるし、地獄に突き落とされることもない。夫は自分のことを構わなくてもいいから他の女を抱いて解放されればよいのである。それでも夫は自分や家庭を完全に振り捨てることも出来なく、男の無意味な観念や道徳に縛られ、ひどく責め苛まれ、苦しんでいる。両者が相互に地獄の責苦でがんじがらめになり、意思の交流が断絶された状態でなっている。「私」は夫と「話をして笑ひ合ふこと」（P.281）ができれば、十分「うれしく、胸のしこりも、少し溶けたやうな」（P.281）満足を感じた。これからはこのように「何でもこの調子で、軽く夫に甘えて、冗談を言い、ごまかしだって何だってかまわない、正しい態度で無くったってかまわない」（P.281）というのは「私」の小さいながらの決意であった。自分にとっては、「道徳なんて」（P.281）どうでもよい、「気持ちの楽な生き方」（P.281）こそ人間らしい生活であった。しかし、夫にこういう気持が一つも伝達できずに、夫は温泉にでも行きたいと言い、「逃げるやうにそそくさと出かけ」（P.283）て、ほかの女と心中してしまった。

革命は、ひとが楽に生きるために行うものです。悲壮な顔の革命家を、私は信用いたしません。夫はどうしてその女のひとを、もっと公然とたのしく愛して、妻の私までたのしくなるように愛してやる事が出来なかったのでしょう。地獄の思いの恋などは、ご当人の苦しさも格別でしょうが、だいいち、はためいわくです。（P.284）

夫死なれてから、その知人から一緒に死を遂げたその女のことを告げられた。夫はほぼ発狂寸前の狂気を持って、「革命だの何だのと大騒ぎ」（P.284）して、そうした革命運動から脱落した挫折感を紛らすために、ほかの女と恋をし、一種の逃げ道を選んだ。「私」はそうした夫の恥じらいと弱々しさにはにかみの内面感情が夫の死を迎えて始めて理解できた。夫は何も大それた革命で苦しんでいるのではないかもしれない。「私」はそのような夫のことで「つくづくと、だめな人だ」（P.284）と思う。革命という公の社会的な場で自分の信念を実践させること自体は、「かなしくて、美しいもの」（P.275）であることだろうか。「私」は真の革命とは人をもっと楽に生かせるために存在し、起こし得るべき反逆」（反乱）のはずだと思った。「気の持ち方を、軽くくるりと変える」（P.284）ことができなかった夫は「真の革命」（P.284）を達成させるほどの逞しい生の意志を持っていないから、最初からその革命の思想はうわついた観念的なものしかなかった。つきつめて言えば、そのような革命は「見栄を張つて嘘」（P.284）ぽいものしかなかった。そのような夫を見抜いてしまった「私」は夫の死に対する「悲しみ」（P.284）や愛人との心中への「怒り」（P.284）などの感情よりも、むしろ、「呆れかへつた馬鹿々々しさに身悶え」（P.284）するだけであった。

終わりに

周知のとおりに、この一篇の題名は近松門左衛門の書いた人形浄瑠璃『心中天の網島』の主人公の妻「おさん」を擬え、造型された女性像である。自分の夫治兵衛が遊女小春と心中の約束を交わしたことを知らされたおさんは、小春にどうか夫を死なせないようにして欲しいと哀願の手紙を送る。そのおさんの言葉に動かされ、小春は治兵衛と別れたが、内情を察していなかった彼は裏切られたと思い込み、小春のことを恨んでいるが、どうしても小春に未練の感情が残る。そんな夫の不甲斐無さを悲しむおさんだが、治兵衛から「もし他の客に落籍されるような事があればきっぱり己の命を絶つ」という小春の言葉を聞いたおさんは小春への義理を尽そうとして、今度は自分のほうから小春の身請けのために動き出す。しかし、おさんの父親五左衛門に知られてしまい、憤った五左衛門は無理やりに嫌悪の感情からおさんを引っ張って連れ帰り、親という高圧的な態度で、強引に治兵衛と離縁させた。夫婦の縁が切られた治兵衛は、

國立政治大學 National Chengchi University

小春を誘い出し、心中をした。夜更けの橋を渡り歩き、網島の水門で心中した[48]。

女房のふところには
鬼が　棲む　あああ
蛇が棲むか（P.276）

以上の引用のように、おさんの悲嘆は「私」の気持と呼応し合い、重ね合わされている。夫はほかの女ができても、妻の「私」はどれだけ夫に憎まれても、頑として夫の側から離れようとはしない。裏切られても、「夫の恋の風の向きの変るの」（P.276）を待つ妻を演じ続けていた。夫を楽しませるために、いっそう夫から疎外され、忘れられていったほうがましだと思う。夫は家庭内の妻の存在が気がかりで懸念していたら、このまま気悶えするだけである。その代わり、自分の苦しみは夫が苦しんでいることから来るものなのである。自分のためにも、夫のために、夫がもっと「平気で快活にしてゐる」（P.281）ようにと、「私」はひそかに祈り続ける。だが、夫は「私」のこの気持はぜんぜん理解できない。ひたすら革命の思想を唱えて、そのせいで妻への申し訳なさの気持が十分あっても、それを語って見せることのためしが一度もなかった。依然として、「もったい振って」いた。夫に死なされ、夫婦の気持がこれまで通い合うこともなく、語り合ったこともないまま、自分勝手にほかの女を道連れにして死に赴いた夫のことを、妻は始めて恨めしく思い、非難せずにはいられなかった。この作品の終末の意味は、この「私」の目に映ったのは最後まで男性性の身体性の虚偽的な嘘が満遍なく成就されているように見受けられていた。

4-2. 革命家の夫を批判する妻の日常性

夫は「新秩序の、新道徳の再建」を必要があると思い、いつも涙をこぼし、自分の観念的な革命思想のために苦しんでいる。が、そういう夫の姿を目に映った妻の心情としては何の意味を持たない。「私」はただ「道徳も何もありやしない、気持が楽になれば、それでいい」のだと思う。「私」は「悲壮な顔の革命家」が信用しないと言う。社会的な男性の生を構築している「革命」という一大事業から何も価値を見出せないと思う妻は明らかに家庭内部に限定された母性的な生を望んでいる。夫のほうもそうした家庭的な母性としての女性性の感情に対して、驚きをこめて、違和感が禁じ得なかった。

「正しいひとは、苦しい筈が無い。つくづく僕は感心する事があるんだ。

[48] 近松門左衛門『曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島―現代語訳付き』、角川書店、2007.3

どうして、君たちは、そんなにまじめで、まっとうなんだろうね。世の中を立派に生きとおすように生れついた人と、そうでない人と、はじめからはっきり区別がついているんじゃないかしら。」（P.278）

夫の女性理解は一体どういう内実のものだろうか。男はなぜ苦しく思い、楽になれないのか、両者の心情が大きな隔たりが存在し、語り合える姿勢などが捉えられなかった。

「バスチーユのね、牢獄を攻撃してね、民衆がね、あちらからもこちらからも立ち上って、それ以来、フランスの、春かうろうの花の宴が永遠に、永遠にだよ、永遠に失われる事になったのだけどね、でも、破壊しなければいけなかったんだ、永遠に新秩序の、新道徳の再建が出来ない事がわかっていながらも、それでも、破壊しなければいけなかったんだ、革命いまだ成らず、と孫文が言って死んだそうだけれども、革命の完成というものは、永遠に出来ない事かも知れない、しかし、それでも革命を起さなければいけないんだ、革命の本質というものはそんな具合いに、かなしくて、美しいものなんだ、そんな事をしたって何になると言ったって、そのかなしさと、美しさと、それから、愛、……」（P.274）

夫は「私」と一緒にビールを飲んでいるが、ラジオからフランスの国歌を聞いた途端に、「口をゆがめ、眼に涙が光つて、泣きたいのをこらへてゐる顔」をした。彼は過ぎ去った古き良き時代のことがまるで「春かうろうの花の宴」のような美しいものだと思い込んで疑わない。だが、戦後の世界でもっとも必要とした新秩序と新道徳の再建のために、その旧来の美しいものが壊されねばならない。また、その革命は永遠に完成できないものであるかもしなれいが、だからこそ、革命の行為からもたらされたかなしさと美しさ、そして愛は自分が追い求めていたものである。「そのかなしくて美しいものの為」（P.275）に、「平和な家庭をも、破壊しなければならない」（P.275）というのは夫の持論かつ観念的な逆説的（あるいは両義的）な革命思想であった。

しかし、そういった革命の意味はかなり曖昧なものであり、語りの上でさらに明晰な文体表現をもって語り尽くされていない嫌いと欠陥性が存在していた。太宰の夫婦物語の『桜桃』（昭和二十三年）と合わせて読むと、結尾において「子供より親が大事」（P.382）だという、いわば反社会・反道徳の言葉が発せられた。久保芳太郎氏は男の生き方が一つの神聖性が賦与され、第一義となる思想を以下のように批評する。

まずいえることは、親と子との血およびその縦の関係の否定であるということだ。それをさらに押しひろめていくと、家庭の幸福や家庭の団欒などを二の次にすること、あるいはそれらを放棄してしまってやがてやがて

個が神と対面し、直結していく思想へと発展していくのではないか。とするとこの思想のカテゴリーは、日本的なものというより、より西洋的なもの、すなわち「己のごとく汝の隣人を愛すべし」(『マタイ伝・十九章』)というキリスト教に基礎を置いた、横の関係の思想にほかならぬ。[49]

また、『家庭の幸福』」(昭和二十三年)という短編で、ある町役場の戸籍係りであった男はきわめて善良な亭主であり、優しい父親であるが、ある日一家団欒するために、帰宅を急いで、終業直後に来た一人の女性を冷たくあしらい、ついに彼女を自殺まで追いやったという内容となっている。そして、語り手は「曰く、家庭の幸福は諸悪の本」(P. 396)という結論を得た。つまり、夫婦物語という関連作品である『桜桃』と『家庭の幸福』の二作において、そのまま家庭破壊するための家庭崩壊の思想が『おさん』の夫の説いた革命と重ね合わされていた。もっと美しいもの、もっと偉大なる愛のために、まず生の根源や根拠となる小さな家庭の平和や幸福などが壊されていかなければならないとい男性の論理となる。

「自分がこの女の人と死ぬのは、恋のためではない。自分は、ジャーナリストである。ジャーナリストは、人に革命やら破壊やらをそそのかして置きながら、いつも自分はするりとそこから逃げて汗などを拭いている。実に奇怪な生き物である。現代の悪魔である。自分はその自己嫌悪に堪ええかねて、みずから、革命家の十字架にのぼる決心をしたのである。ジャーナリストの醜聞。それはかつて例の無かった事ではあるまいか。自分の死が、現代の悪魔を少しでも赤面させ反省させる事に役立ったら、うれしい。」(P. 283～284)

夫の最後に残してくれた手紙からには、自分のことをジャーナリストとして自称していても、その破壊的な革命思想が何一つも実行する勇気や行動などが伴われていなかった。革命の思想を言葉の上で大々と唱え上げるジャーナリストの革命思想は、本当は労働者の社会運動のそれと対照させると一線を画するべきであった。夫は自ら革命を起こし、「十字架」に登ろうとする。妻子持ちでありながら他の女と心中をし、一つジャーナリストの醜聞をあえて引き起こし、死を遂げて見せることが世間の人たちも一種の復讐行為として考える。つまり、醜聞ゆえに自殺したジャーナリストというのは前代未聞の事件そのものが一種の擬似的な革命行為である。だが、妻の「私」の眼から見れば、それがただの逃げる手段としての卑怯的な行動であった。

[49] 久保田芳太郎「『桜桃』　子より親が大事」、『太宰治・第五号』に収録、洋々社、1989.6、P.52

（変ったお方になってしまった。いったい、いつ頃から、あの事がはじまったのだろう。疎開先の青森から引き上げて来て、四箇月振りで夫と逢った時、夫の笑顔がどこやら卑屈で、そうして、私の視線を避けるような、おどおどしたお態度で、私はただそれを、不自由なひとり暮しのために、おやつれになった、とだけ感じて、いたいたしく思ったものだが、或ひはあの四箇月の間に、ああ、もう何も考えまい、考えると、考えるだけ苦しみの泥沼に深く落ち込むばかりだ。）（P.272）

「私」は夫と離れた四ヶ月の間に、夫の身の上に何かが起こり、そして夫が変ったのかと、再会してから薄々と感じ取っていた。だが、「私」はその変り方がたぶん彼の一人暮らしの寂しさのせいだと思い、さらに追究しようとはしなかった。その「私」の語り口にはごく日常的な小市民としての家庭的な幸福そのものであった。たとえば、よい着物が戦争のためにすべて焼かれたから、お盆の日に自分の子には「粗末な洋服」（P.268）しか着せられないと嘆いたりする。自分たちは畑を持っていながら、昔手伝ってくれた夫がいま「うちの事にかまは」（P.269）ないせいで、うちの畑は隣人のと比べれば「恥ずかしくただ雑草ばかり生えるしげつて」（P.269）いた。「おもちやも何も持っつてゐない」（P.269）娘がただ一本の芽が出した豆を「自慢の財産」（P.269）として「お隣りへ遊びに行つても、うちのお豆、うちのお豆」（P.269）と「吹聴して」（P.269）いた様子に、「私」は身の落ちぶれにわびしく感じてならなかった。

「ふとっていまチねえ、べっぴんちゃんでチねえ。」
とほめて、私がつい何の気なしに、
「可愛いでしょう？　子供を見てると、ながいきしたいとお思いにならない？」
と言ったら、夫は急に妙な顔になって、
「うむ。」
と苦しそうな返事をなさったので、私は、はっとして、冷汗の出る思いでした。」（P.276）

以上の引用のように、珍しく外泊せずに自分のうちに泊まっていた夫が娘を抱き上げている場面を目撃し、「私」はその機会に乗り、夫を家庭内部に引き留めようとした。子供のためにでも思える夫なら長生きできるというのは「私」は何より家庭の幸福が大事だと思う妻の母性的な女性性から来る感情である。家庭や子供を守るために、夫と別れることなどは想像も出来ないことで、夫がいつか立ち直るのを待ち望んでいた。上述の引用のように、夫はそうした妻の無言の故の逞しい生の意志を感心した。だが、夫は彼自身を「世の中を立派に生きとほすやうに生れついた人」（P.278）でない部類の人間として見なした。

「いいえ、鈍感なんですのよ、あたしなんかは。ただ、……」
「ただ？」
夫は、本当に狂ったひとのような、へんな目つきで私の顔を見ました。私は口ごもり、ああ、言えない、具体的な事は、おそろしくて、何も言えない。
「ただね、あなたがお苦しそうだと、あたしも苦しいの。」
「なんだ、つまらない。」
と、夫は、ほっとしたように微笑んでそう言いました。」（P.278～279）

夫が自分のまじめさや真っ当さに感服したことに対して、「私」はただ「鈍感」という一言で沈黙のままに腹の中に飲み込んだ。また、愛人を囲んだ秘密を知られたかと疑っていたために、狂気の満ちた目つきをする夫に向かっていても、恐ろしくてついに夫の隠し事に対して問い詰める勇気もなかった。しかし、果たして女の「私」は本当にただの鈍感な人間なのか。実際は自分は「利巧」（P.279）な性質を内面化させ、夫の秘密に対しても、「この世のひとの妻として、なによりもつらい或る事」（P.269）をすでに鈍く予感し得ていた。だが、夫とは別れたくないし、別れられない「私」には、所詮待つ女を演じ続けるしか出来ないのである。そして、わずかな語り合いの一言だけでは「私」はなんと「久方振りで、涼しい幸福感」（P.279）を味わった。こうした意思の交換も交流などが断絶されたままの「私」の「涼しい幸福感」はやはり家庭内部に限定された母性的なジェンダー性を再現した近代的な女性像となる。

終わりに

夫はもっと美しいもののために、革命の倫理を揚げて、そして、そのような革命は永遠に達成されないものであろうと、どうしてもその中に身を入れていかなければならないのはなぜだろうか。そのような観念的なものが一種の屈折した形で自らのジャーナリストの身体性・階級性を汚してしまった醜聞によって、擬似的かつ擬態的自己破壊という社会革命を果たした思想と言説は、実は曖昧で、理解しがたいもの極まりないのではないだろうか。もし、『おさん』という作品自体に即して評を下してみると、その革命の実体はただ妻への申し訳なさから来る「道徳の煩悶」（P.281）とジェンダー的な男性性のはにかみだと解釈できると思う。隣人を愛するような偉大なる愛ではなくて、もっと私的な、個人的な妻への愛や侘しさといってもよいのだろう。それなのに、夫はそれを性的他者である妻に向かって素直に語り得ないところから見れば、最終的にその革命の思想がドメスティック・イデオロギーを家庭的な妻に背負わせていく男の軟弱な言い分しか思えなかった。

一方、妻の「私」は夫の観念性に対して、きわめて日常的市民性を表現する。落ちぶれたといい、身の不自由だといい、それらのものは妻の「私」がもっとも関心を寄せるものである。「私」にとって、平和な家庭は何より大事なもので、それが破壊されては耐えられない苦痛であった。家庭の平和的な幸福を念じてやまない妻の論理と、家庭の存在を破壊してまでその大義名分の革命を果たそうとする夫の論理とは、分断されたドメスティック・イデオロギーの矛盾性と危機感がおのずから孕ませていた様相が呈している。

結局、「私」は解放されるために「気の持ち方を、軽くくるりと変へる」(P. 284)という自己欺瞞の幸福感覚を把握しようとした。夫の場合はそうした小市民的な幸福こそ振り捨てて犠牲にしてまで止まない革命の論理に固執し、死に際まで私的な道徳の煩悶を革命と称して気取り通していった。

國立政治大學
National Chengchi University

第五章、太宰治の女語りの文体表現について――女装した男の擬態

5-1. 滅びて行く弱い男たちの観念性

前にも触れたように、太宰治の明るい中期の作風は戦後に入ったら一変した。奥野健男はその安定と開花の時代という中期は「社会に妥協せずには生きて行けない時代への適応であったということ」[50]と述べている。奥野氏は太宰が小市民生活を行って、「自己の芸術の権威のために、生活をフィクション化した」[51]という。太宰は「異常なほど強かった羞恥感、倫理感、自意識から解放し、かえって自己を自由に語ること」[52]が出来るという。そういうような意識は、作品に反映すれば太宰の中期に見られる芸術性なのである。ところが、敗戦後、太宰が期待し予想した現実と、実際の現実は全く違っている。そういう現実への失望は奥野氏は「古い日本は滅亡するどころか、少しも変っていな」[53]くて、「人間は旧態依然、相変らず古い習慣と、ケチ臭いエゴイズムとを後生大事と守って、てこでも動きはしない」[54]という。

太宰は敗戦をどう迎えたかという問題点に就いて、鳥居邦朗も「まずは人間性の解放と捉え、習俗的倫理は崩壊することと期待した」[55]と述べている。

> ところが、昭和二十年も十一月ごろになると、太宰は人間が全く変っていないことに気づく。既成の倫理は少しも衰えていなかったのである。そこで太宰の無頼派宣言が行われる。（中略）そこで彼は、戦争に負ければ自由主義者に衣だけを代えて恬然としているいわゆる進歩的文化人を、サロン思想・便乗思想であるとして猛然と死の縷々罵る。[56]

饗庭孝男もそのような戦後の文化人のサロン的な態度を太宰が『如是我聞』のなかで批判していると述べている。太宰のその批判を「決して場当り的でもなく、思いつきでもなく、一時的な怒りにかられたからでもなかった。もとより、戦後において新しい社会や新しい倫理が生れてくることについて彼が一種に必然性をもってそれを受け止めていたことは事実であった」[57]と氏は述べている。また、敗戦後の現実の前に、太宰の「おのれの罪を自覚する人間のもつ優しさ」(『冬の花火』) という文化人への期待は「あまりにも脆弱すぎた」[58]と、鶴谷憲三はこう述べている。

---

[50] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.109
[51] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.110
[52] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.114
[53] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.135
[54] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.135
[55] 三好行雄『太宰治必携』、学灯社、1988.7、P.58
[56] 三好行雄『太宰治必携』、学灯社、1988.7、P.58
[57] 饗庭孝男『太宰治論』、小沢書店、1997.1、P.105
[58] 鶴谷憲三『Spirit　作家と作品』、有精堂、1994.4、P.41

弱さの自覚どころか、横行するのは自らの正当性を声高に叫び、他を顧みることの少ない人々の姿であり、時流に便乗する（啓蒙的な思想家・似而非文化人）ばかりである。太宰に残ったのは「時代は少しも変らない」「一種のあほらしい感じ」（『苦悩の年鑑』）というやり切れなさであり、「何を望んだつて、何も出来やしねえ」（「昭和二十二年に望むこと」）という絶望感だけだったであろう。[59]

太宰は戦後に就いての失望感はあまりにも強すぎて、そこに投影したのは作品中の男の観念性や革命思想というものなのではないだろうか。『ヴィヨンの妻』の男主人公大谷はいつも死にたいことを考える。そして、『斜陽』の上原も大谷とほぼ同じくデカダンスや無頼のイメージをして、滅びへいく傾向が強いのではないだろうか。さらに、死を選んだ『斜陽』の直治と『おさん』の夫。彼らが唱えた思想（革命や貴族）の根拠はどこから来るものだろうか。そして、それは本当世俗に対しての抵抗と批判か、それともただ女主人公に批判されたような男の擬態に過ぎないのだろうか。男と女との両方の言説を分析して三作をあわせて論じたいと思う。

『ヴィヨンの妻』の夫大谷は「生れた時から、死ぬ事ばかり考へてゐたんだ」（P. 42）と自認した。妻の「私」は死ぬのを引きとめたのは仕事だと思っていたが、大谷はそうとは思っていなかった。妻が着眼したのは日常的なもの、つまり、仕事というような生活的な営みなのである。椿屋のご亭主たちが泥棒事件にうちに来たとき、夫の無頼さを知ってから、「私」はふと夫の詩を思いついて笑い出した。また、どうすればわからなくて、ぼんやりと電車に乗ったときも、夫の論文の宣伝を見て泣き出した。こうしてみれば、妻としての「私」は夫の仕事に対して、僅かであっても一定程度の共感を持っているのではないだろうか。なのに、その夫は自分の仕事に対して全く無意味なものと見なして自ら否定した。その良さや悪さは世間のばかものによって評価された。また、その作品や仕事への自意識が『斜陽』の直治と上原にも通じる。

直治はすべての学問をことごとく無意味なものとして、所詮「人間が人間でなくならうとする努力」に過ぎない。直治は「男は、（おれはすぐれている）（おれにはいいところがあるんだ）などと**思わずに**、生きて行く事が出来ぬものか」（P. 170～171）と疎外感覚を抱いて、おのれの生の意味を問った。世間に直面するためには、男は優れていなければならないという意味は直治にはわからない。大谷が世間の恐怖と戦っているように、直治も自ら自分の階級から出て一般民衆と付き合ったが、結局その「強くたくましい草の友人」（P. 249）の勢いに圧倒され、酒や麻薬にも頼らなければならない廃人になってしまった。その苦しみを紛らすために、デカダンな生活を送っていたが、ただ母や姉を悲

[59] 鶴谷憲三『Spirit　作家と作品』、有精堂、1994.4、P.41

しませ、自分自身は「少しも楽しく」ないのである。その退廃的な生活も大谷と同じ、自分の恐怖におぼれて仕方なく酒や麻薬を頼っていくしかないが、その家庭や家族に対しての侘しさはどんどん深くなって一方である。上原は大谷や直治のように自分の仕事を否定した。何を書いても無駄で、傑作や駄作はなんでもなくて、そのような自分の仕事は世間への抵抗にもなれないばかりか、ただキザに過ぎない。戦後の東京で生活していこうとするなら、美徳などは何の役にも立たない。その道徳の崩壊のいま、せめて最後の唯一の手段は「上原二郎にたかつて、痛飲」（P.239）と、上原を囲んでいた男たちは冗談ぶりにこのような会話を交わしていたが、生活への不安や煩悶をどうしても抑え切れなかったから、退廃的な生活を送らなければ生きていられなかったのである。しかし、そのような上原は直治の目から見れば、かえって「ほんものの阿呆の快楽児」（P.259）に見えた。

しかし、直治の上原への批判から見れば、直治の持っていた階級性は深くて消せないものなのである。上原に対して、何度も、「田舎者の図々しさ」(P.258)や「馬鹿な田舎者」と、強くて厳しく批判した。直治は上原のデカダンを本物として、自分のデカダンを苦しみの反映としておのれを上位に置いた。一方、姉のかず子は上原が「かうしなければ、ご安心が出来ない」（P.246）という窮屈さを理解して、それを彼の「最後の闘争の形式」（P.263）だと、優しく包んだ。それなのに、男同士の間には、そのような理解は存在していない。こうしてみれば、直治と上原との退廃的な態度は生活への無力と苦しみからのもので、本質的には同じものなのであろう。にもかかわらず、直治は上原の田舎者の馬鹿さを嫌がっていたに対して、上原も直治の貴族気質に耐えられなかった。そのような男同士の軽蔑こそ男を苦しませるものなのではないだろうか。知識人や文化人でありながら、退廃的な生活を過ごすしか出来なくて、作品などを書いても所詮キザに過ぎない。革命や思想を唱えながら、おのれ自身の弱さにおぼれて、結局自滅以外何も出来ない。そのような男同士への軽蔑も『おさん』の夫にも通じるのだろう。

『おさん』の夫もその革命の思想に夢中して、苦しそうな姿をしていた。他のジャーナリストは人々に革命思想を唱えながら、彼自身はそうしなかった。そのゆえに、自ら自分を十字架に掛けて他のジャーナリストを反省させようとして、自らを優位におけた。しかし、そのような口実みたいな革命は所詮『ヴィヨンの妻』の大谷のように、家庭に対しての後ろめたさに過ぎないである。平和な家庭を壊すのを恐れていて、わざと革命の振りをよそってしまった。その煩悶の挙句、死を選んでもなお他のジャーナリストを反省しようとしたといって、妻の目から見れば実にばかばかしいものであった。しかし、いくら革命の思想を唱えても、その妻への侘しさは隠し切れないのである。その妻」（あるいは女）からの気遣いはかえって夫を苦しませた。その点についても大谷や直治にも通じているのではないだろう。自分の死を引きとめる神様がいるとい

った大谷のように、直治もお母様の愛によって死を引き止められていた。

上原も他の三人の男と同じように、自分には幸福がなくて不幸だけがあって、生への意志を否定した。男は自分の観念性におぼれて世間の恐怖におびえて、ついに生への意志が消えてきた。それなのに、『ヴィヨンの妻』の夫である大谷は妻の幸福感を否定した。その夫の目から見れば、社会の恐怖と直面しなくて済んだ妻はぼんやりと生きていけばよいのだろう。それも『斜陽』のある芸術家のいったよう、「女のひとは、ぼんやりしてゐて、いいんですよ」(P.187)という思想なのである。自然にそのような妻の身には幸福や不幸もないと思っているのである。その女たち対しての無理解（あるいは理解できなさ）も『斜陽』の直治でも見られるものだ。姉のかず子の「賢明」さを承知していたが、姉の単独で生きていく能力を知らなかった。女の強さを理解できなくて自分たちの弱さと女の強さを天性からのものにするしか出来ないのである。

男たちは女の強さが理解できないことと裏腹に、その代わり、女たちのほうはどうであろうか。『ヴィヨンの妻』の「私」は夫から「女には、幸福も不幸も無いものです」（P.41）と教えられ、「そんな気もして来」（P.41）たが、やはり夫の不幸にたいして、「わからないわ」（P.41）と一句で自らの感情を曖昧な表現をとって締めくくっている。「私」は夫の考えがともかく「こんな生活をつづけて行き」（P.41）たくて、夫の恐怖が理解できないまま生きていこうとする。夫からの「どこかに神がゐる」（P.42）という問いかけにたいしても、「私には、わかりませんわ」と、互いに理解しあえないまま、家庭内における良妻賢母の役割をどこまでも果たそうとした。やがて、「私」は「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ」(P.47）と自分の得た社会論理で自分と夫を食ってかかった。そのような女の無理解さも『斜陽』のお母様や上原の奥さんにも窺えるものである。『斜陽』のお母様も親に叱りつけられようとする直治にむかって、ただ「弱蟲」（P.170）という優しさに満ちた一言で、それ以上息子の不良の原因をさらに探ろうとせずに、ひたすら直治のことを見守ってやった。上原の奥さんは上原の行いが「たいへん乱暴ですさんだもの」（P.255）だと知っていながら、「平気を装つて、いつも優しく微笑んで暮して」（P.255）いた。一方、『斜陽』のかず子は上原に汚されている場面、いかにも彼の無力さを理解したしみじみとした心情になり、「ふと可哀さうに」（P.246）なって、しかるべき抵抗を放棄した。男の内面に潜んでいる無力さを理解するようになり、かず子はついに不良を装っていた男のキザさと弱さに気づき、その恋心さえ消えていった気がした。その直後に上原の犠牲者たる顔を見て、「私のひと。私の虹。マイ、チヤルイド。にくいひと。ずるいひと。」（P.247）と感じて、再び無限に包容する母性原理につき動かされ、上原を受け入れた。かず子はそのような上原のデカダンを認めてそのまま受け入れ、それを男の「最後の闘争の形式」としてまるごと抱擁した。一方、『おさん』の「私」は必死に夫の機嫌をとろうとした。それは女

としての自分のためでもあり、子供や家庭のための努力でもある。私は「夫の恋の風の向きの変るのを祈る」（P.276）しかできないが、せめて子供や自分という家庭存在を夫に自覚させ、その観念性を振り払おうとした。しかし、そのような努力はあくまでも空虚な形に止まっており、二人はその本心を隠し、交流しあえないままで、対話が終わった。結局、夫の観念性を打消すことに失敗した「私」は、「気の持ち方を軽くくるりと変えるのが真の革命」（P.284）と、今度は自ら女の革命というジェンダー性を省みて、夫のキザの馬鹿馬鹿しさに気づいた。そのようなジェンダー性の再認識こそ太宰の女語りの作品の最大な女性性の脱構築という表現効果となる。観念性におぼれた男たちは最初からその生への意志を放棄した造型として設定され、家庭的な、母性性としての女と交流不可能のものである。その男の矛盾さは女によって語られ、一層浮き彫りされる。しかもそのような観念的なものは男のキザによって馬鹿馬鹿しくしか見えなかったのではないだろうか。

5-2. 強い生命力を持った女たちの日常性

彼女たちは伝統社会での男に付属する役割から逃れ、独立した個体として逞しく生きていく。男性は滅びていくのに反して、女性は強く生き抜いている。男たちの暗澹と対照して、彼女たちには明るさが見えてくる。さらに彼女たちは世間の道徳を乗り越えて、地味な着実な生活を営み、生の意味を見付け出し、生き抜いていくのである。三作の女主人公は芯の強い人間で、太宰の理想の女性像といえよう。

まずは『ヴィヨンの妻』の「私」を見てみようと思う。始めの「私」は家庭内の主婦として何もできなくて、子供と二人切りで頼れる人は一人もいない。自分は「母は早くなくなり」（P.31）、父と二人で屋台の商売をしていたとき、父の目を欺いて、大谷の坊やがお腹に出来て、「いろいろごたごたの末、どうやらあの人の女房といふやうな形になつ」（P.31）てしまった。「籍も何もはひつて」（P.31）いなかったが、「私」はちゃんと妻の役を担って、大谷が出ると「ひとつきも帰らぬ」（P.31）あの家で夫を待っていた。「私」たちはもし夫の知り合いの出版の人が「私」と坊やの身を案じてくれなければ、すでに飢え死にしたかもしれないという厳しい状況に置かれてきた。しかし、その泥棒事件によって、「私」は変らざるをえなかった。「私」は必ず夫の後始末をするからと、椿屋の亭主と約束して、警察沙汰にされるのを一時免れたが、「何のいい工夫も思ひ浮か」（P.31）ばなかったのである。あの夜に、「私」は「いつまでも、いつまで経つても、夜が明けなければいい」（P.31）と思っていたが、自分の意志にそむいてやはり夜が明けた。「黙つて家の中にをられない」（P.32）気持であった「私」は「何の計画や思慮も無」（P.33）いが、椿屋にいった。

「私」は何かよい思案がついていなかったが、嘘をついてもかまわなくて、

その場の情況にしたがって前へ進んでいくことになった。その場で「私」はとりあえず「人質」(P.33) という形をとって、椿屋の客あしらいをしはじめた。「私」は自分の家庭外での可能性を見つけた。「私」は「さつちゃん」として夫に会えるだけではなくて、髪の手入れや化粧品などといういままで体験したことの無い生活での裕福さに喜んでいる。それは日常的なものでありながら、自分の力で働く喜びは大したことなのである。そういう点についても『斜陽』のかず子も同じだと思う。

伊豆の山荘に引っ越した後のかず子はお母様と「幸福の最後の残り火の光が輝いた」生活を送っていたのが、やはり胸の底に潜んだ不安を隠し切れなかった。「野性の田舎娘」(P.140) になって行ってもかまわない。今まで貴族として生きてきたかず子ははじめて「人生の厳粛」(P.125) に直面して、違った生き方を変えざるを得なかった。『ヴィヨンの妻』の「私」と同じように、変らなくてはいけない状況に置かれたのである。かず子は筋肉労働の満足に「うれしかつ」 (P.141) た。それも『ヴィヨンの妻』の「私」と似ていて、自分の力で働くことによってもたらされた満足なのである。きわめて日常性的なものだが、かえって現実の世界に生きていることを実感させた。そこで生み出されたのはわずかであっても、自分の手で握り締めることができる喜びなのではないだろうか。そして、そのような素朴な生活に『おさん』の「私」も妻や女としての喜びを見出した。夫の革命思想は美しいものを「破壊しなければいけなかった」 (P.275) というものであり、妻の「私」はそのような破壊思想が理解できないでもないが、その思想より家庭のほうに着眼した。

短編小説でありながら、語り手の「私」はずいぶん長い分量で身の落ちぶれや生活の不自由に対してかたる。戦争によっての被害や子供の姿に就いて「私」が詳しいほど語ることによって、「私」の日常性を明らかにした。そのような「私」は願っているのは家庭の幸福に違いないのである。「私」は着眼したのはごく日常的な喜び、「涼しい幸福感」(P.279) であって、「道徳」(P.279) などのものはそんなに重要でもないのではないだろうか。そのような道徳に気にせずむしろ自身の幸福に着眼した態度は『ヴィヨンの妻』の「私」と『斜陽』のかず子とでも見られるものである。

『ヴィヨンの妻』の「私」は最後椿屋の客に汚されても、依然としてこれからも椿屋に泊まることにした。道徳の崩壊や人非人であってもかまわなくて、「私」はあえてこの道を選んだ。そのような道徳を無視する態度も『斜陽』のかず子にも見られるものである。

『斜陽』のかず子は上原に接触することが非道徳的なことを知っていても、このままでは「生きて行けさうもない」(P.181) から、勇気を出して彼に手紙を差し上げた。かず子にとって、このような行為は「女の生きて行く努力」 (P.196) なのである。そのような生きていく意志と、他人の嘲笑や非難をかまわない態度とは、『ヴィヨンの妻』の「私」と『おさん』の「私」にも見ら

れるものである。『ヴィヨンの妻』の最後の場面において「私」は「人非人」と言わされても生きて行こうとする意志を表明した。『おさん』の「私」も「道徳なんてどうだつていい」（P.281）と、自分の生き方を明確に確立した。

しかし、一方、作中で女たちはその生命力と強さの表現をもって、真の主体性を確立し得たのだろうか。前述のように、『ヴィヨンの妻』の「私」は生活のために（また、夫と顔をあわせるために）、あえて椿屋の男たちと現実社会に身を入れてしまった。そこで現実社会の残酷さと罪の遍在性を目のあたりで見覚えてきた。家庭外部の場所で「私」の生きる術は「名馬も、雌は半値だそうです」（P.35）など冗談を交わし、自分を下品な娼婦的な女に見せかけて男の社会に飛び込んだ。働く女のイメージはあくもでも自分の美貌によって男から金を稼ぐという一種の擬態的な娼婦性を身につけていった。その「私」の語った幸福がきわめて浅薄なもので、ごく日常的な家庭生活（特に経済的な改善）の小市民的な幸福に過ぎない。夫の内面との交流や家庭のあり方について、一切言及しようとはしない。結局、「私」はこれからの生き方を開示していながら、夫との相互理解は依然として打開策が見つからず、下降指向を示しながら顛落していく一方である。

『斜陽』のかず子は「恋のこころが無くては、結婚を考えられないのです」（P.187）といって、一見、男に頼らなくて生きて行こうとする意思を表明したが、恋をしている相手との子供がどうしても手放せなくて、女ひとりでは生きていけない内面の不安を抱えていた。もともと、かず子自身には何の経済力も持っていないくせに、戦時中徴用されたことや伊豆に引っ越した以来の少しの筋肉労働で、ヨイトマケ商売や畑仕事などで自立する自信を持つようになった。しかし、いままでお母様に庇護されて生きてきたかず子はそれらの仕事をやっていても「ままごと遊び」（P.139）にみえて、自立していくような自信がかず子の世間知らずと未熟さをさらけ出すのに十分であった。男に頼らなくても子供に頼らなくては生きていけないかず子はあくまでも旧来の母性（産む性）というジェンダーの家庭制度に束縛されているものである。

また、『おさん』の「私」は強く夫を批判していても、その内面に潜んでいる感情は夫に寄せる恋心であり、あくまでも「夫の恋の風の変わる」（P.276）のを祈願するものである。『おさん』の「私」の主体性への描写は他の二作より欠如しているように見えて、家父長制度内に生きている女として造形されている。また、三作の女主人公たちは、男たち自身の観念に執着しているゆえに苦しんでいる弱い男のイメージを相対化するために設定され、いずれも日常の小市民的な安穏さにしか関心を持っていない。その内面感覚や恋愛感情の転換の描写に関してそれほど描かれていない。それも男性作家の言及不足と表現力の限界性として見なしても良いだろう。

5-3. 他の関連作品との対照

中期では太宰は『女生徒』をはじめ」(『文学界』昭和十四年)、『皮膚と心』」(『文学界』昭和十四年)、『千代女』」(『改造』昭和十六年) など、「女性」の世界観を描いてすでに高い評価を得ていたのだった。中期に至る前、太宰のそのような女々しい泣訴の文体が、前期作品にはストレートに使われることはほとんどないと言えるだろう。東郷克美は「『世の中』」(現実) という男性原理の世界とのたたかいに敗れ、そこから一歩後退して、『一般市井人』の生活という擬態を生きようとしつつあった太宰にとって、前期の書簡などで用いた、その意味では生得のものといっていい、甘ったれた女々しい語り口とリズムが、表現としての『女語り』というかたちをとって、自然に生まれて来」[60]たといっている。

『きりぎりす』の「私」は五年前の十九歳のとき、画家の夫と結婚した。夫は売れない画家であり、その絵は「私」でなければわからないと思っている。それから二年、夫婦二人は貧しいが楽しい生活をすごしていた。個展の後、急に売れっ子になって、三鷹の大きい家に引っ越して、夫はすっかり変ってしまった。夫はいままでは俗世間に汚されない美しい天使みたいな人で、清貧と孤高を守っていたが、有名になると、金銭に拘泥して、人の陰口を言ったり、人の意見を自分の考えのように語ったりするようになってしまった。夫はプライドも何もなくしてしまった。この世では、夫が正しくて、「私」のほうが間違っているかもしれないが、「私」にはどうもわからない。「私」は背骨の下で、幽かに、しかし懸命に鳴くきりぎりすの声を頼りに、夫と別れて一人で生きて行こうと思っている。太宰自身が「私の心の中の俗物根性をいましめた[61]」といっているように、主題の中心は俗物性批判にあるといってよい。

また、『燈籠』は二十四歳でまずしい下駄屋の娘である「私」が眼科医院で知り合った五つ年下の商業学校の学生水野に夢中になったことを描いている。近所からは「私」が男狂いを始めたと囁かれる。早くに両親をなくして遠い親戚に養われている水野が友達と海水浴に行くと聞いた「私」は、男用の海水着を万引きしたが、店の人に気づかれてしまった。「私」は交番に掴まって連れて行かれた。そして、「私」の万引き事件も新聞に出てしまった。水野から罪を償うようにとの手紙が届き、親子三人は明るい電灯の下で小さな幸せを味わう。「私たち親子は、美しいのだ、と庭に鳴く虫にまでも知らせてあげたい静かなよろこびが、胸にこみあげて来たのでございます。」(P. 16[62]) という小さな幸福へのいじらしい決意表明には、太宰の「前期から中期への移行を直截に

---

[60] 東郷克美「太宰治の話法　女性独白体の発見」、『日本文学講座 6　近代小説』に収録、日本文学協会編、大修館書店、1988.6、P.311、P.313
[61] 太宰治『きりぎりす』、新潮社、1974.9、P.303
[62] 太宰治『きりぎりす』、新潮社、1974.9、P.16

表現」[63]した姿があるとしていると、奥野健男は述べている。

『葉桜と魔笛』の老婦人は葉桜の季節になると三十五年前のことを思い出す。母をなくして、中学校長の父と二つ年下の妹の三人で島根県の寺の離れに住んでいた頃、十八歳の妹は腎臓結核で余命百日以内と診断されていた。男から妹への手紙の束を見つけた姉は、男が妹を捨てたことを知って、男の筆跡を真似て、毎晩家のそばで口笛を吹いてあげるという内容の手紙を書く。妹はあの手紙は自分で書いたと姉に告白する。そのとき確かに口笛が聞こえ妹は静かに死ぬ。女の語り口を用いた作品として、『燈籠』や『女生徒』に続く作品だが、老婦人の回想にしたところは太宰の新手法である。主題になっているのは姉の妹への愛が奇跡をもたらして、本当に口笛が聞こえてきたというところになり、この時期の太宰が信仰に関心を持っていたことがわかる。

『千代女』は一人の文学少女を描いている。小学校のとき、叔父の勧めで投書した綴方が一等に当選してから、「私」は皆にほめられていた。だが、それはとても恥ずかしく死ぬほどつらいことだった。「私」は小説が嫌いなのである。ところが女学校を卒業すると、「私」は蓮葉な小説ばかり読みふけて、みだらな空想をするようになってしまった。でも「私」は千代女ではなくて、才能がないのである。自分でもどうすればよいのかわからない。「私」はいまに気が狂うかもしれない。自分には本当に小説家として才能があるのかという太宰の自己懐疑がそこから染み出ている。「あんなのが、本当に、いいのでしょうか。どこが、いったい、よかったのでしょう」[64]という『千代女』における「私」の自分の作品に対する疑問も『ヴィヨンの妻』の大谷や『斜陽』の上原に同様に当てはめられ、類似的なものである。

いろいろな主題を持っている太宰の女語りの作品では、『皮膚と心』は特に女の生理的なことへの関心を細かく描いている。『皮膚と心』の「私」は二十八歳の新婚の女性で、六月の初め、乳房のしたから吹出物が始まって、やがて上半身に広がってしまった。「私」はいままでの「私」でなくなってしまうと恐れている。「私」は三十五歳の図案工の夫に話すと、夫が「気にしちゃいけねえ」（P. 82）と優しく相談に乗ってくれる。翌朝、その吹き出物がさらにひどくなったせいで、「私」は死ぬ気さえして動転していると、夫は「よし！泣くな！お医者へ連れていってや」（P. 94）る。待合室で待つ間、「私」は、自分が生活を愛し、知覚と感触だけで「思索」（P. 98）もない女というものを考えた。女は人にいえない秘密を持ち、「底知れぬ悪魔」（P. 98）みたいなところがあると思っている。自分の番が来て、医者に見てもらうと、「中毒ですよ。何か、わるいもの食べたのでしょう」（P. 102）と、注射を受けて見る間に治っていく。「私」はいままで大げさに考えていた自分を「恥ずかしく」（P. 103）思ってならない。

---

[63] 太宰治『きりぎりず』、新潮社、1974.9、P.303
[64] 太宰治『きりぎりず』、新潮社、1974.9、P.188

だって、女には、一日一日が全部ですもの。男とちがう。死後も考えない。思索も、無い。一刻一刻の、美しさの完成だけを願って居ります。生活を、生活の感触を、溺愛いたします。女が、お茶碗や、きれいな柄の着物を愛するのは、それだけが、ほんとうの生き甲斐だからでございます。（『皮膚と心』P. 98）

その「私」の日常への関心も三作の女主人公たちと同様な発想と生き方が強調される。「私」の茶碗や着物への関心は『ヴィヨンの妻』の「私」と同じ生活感覚であり、思想のようなイデオロギーなどよりも日常生活の安穏さに関心が寄せられる。思想などのような観念的なイデオロギーに対する無関心と無理解が『斜陽』のかず子と『おさん』の「私」が類似的な家庭内部の母性性の表れとなるものである。

『皮膚と心』では女の生理に影響された心理について描いていることに対して、『女生徒』は少女の微妙な心理を描いている。『女生徒』は一人の女生徒の五月一日の、起床から就寝までの生活と心理の移り行きを丹念に描いた作品である。「朝の私は一ばん醜い」（P. 74[65]）と、「私」は身悶えしちゃう気がしながら起床した。「私」はよいしょという「お婆さんの掛声」（P. 75）のようなけびた言葉を出す自分を嫌悪する。母はすでに出かけて、「私」は一人で食事してから、草取りして登校する。駅への森の小路をぬけている「私」は四五人の労働者に「言えないような厭な言葉」（P. 82）を吐きかけられて、電車に乗る。電車では向かいの席の男に笑いかけたりすると、「私は、ずるずる引きずられて、その人と結婚しなければならぬ破目におちるかも知れないのだ」（P. 87～88）と思ったりする。「私」は学校で写生のモデルになったりして、放課後美容院へ行ったりする。帰宅してから、「私」は自身の考案する「ロココ料理」（P. 102）で来客を迎える。客が帰って、「私」は一人で風呂に入り、客を送って戻った母の方をもみ、夜中洗濯してから、床に就く。そうした生活の合間に、「私」の少女から大人に移り変わっていく微妙な心理を写し出される。「私」は大人の醜さ、女の醜さに嫌悪を覚えて、「自然になりたい、素直になりたい」（P. 92）という純粋さにあこがれつつ、両者の間に微妙に揺れる自分を見る。饗庭孝男は太宰が感性の一面をこのような少女の日記に託するといって、「結婚による生活の安定と、破滅的な危機から立ち直ろうとする彼」（筆者注：太宰）の心構えの中で、美しいもの、良きもの、正しいもの、善なるものにナイーブに感動しようとする健気な日々の反映とも言える[66]」という。太宰はそのような明るい日々の支えで、言動が複雑で、人工的であった「前期の世界から

[65] 太宰治『走れメロス』に収録『女生徒』（以下の『女生徒』の引用は同じ）、新潮社、1967.7
[66] 饗庭孝男『太宰治論』、講談社、1976.12、P.184~185

抜け出て、静かな、透明な、暖かい世界にはいっ」た[67]」と、渡部芳紀も述べている。そのような日々の中で、太宰の作品の題材も「自己自身や社会のことを避けて、女性の生理的心理にもとめます[68]」と、奥野健男も指摘している。そして、そのような青春の煩悶を覚えた『女生徒』の女主人公である「私」は『斜陽』のかず子に似ていた点を持っていると思う。

> 小さい時分には、私も、自分の気持とひとの気持と全く違ってしまったときには、お母さんに、
> 「なぜ？」と聴いたものだ。そのときには、お母さんは、何か一言で片づけて、そうして怒ったものだ。悪い、不良みたいだ、と言って、お母さんは悲しがっていたようだった。お父さんに言ったこともある。お父さんは、そのときただ黙って笑っていた。そしてあとでお母さんに「中心はずれの子だ」とおっしゃっていたそうだ。」（『女生徒』P.86～87）

「私」は普通の人より鋭敏な感性を持っているため、世間の営みに対して常に違和感を感じずにはいられない。自分は「自身の行くべき最善の場所、行きたく思う美しい場所、自身を伸ばして行くべき場所」（P.85）がぼんやりとしても「判ってい」（P.85）るが、「世の中」（P.86）という「大きな力」（P.86）がいつも自分を押し流す。学校で学んだ修身も「世の中の掟」（P.86）とはずいぶん「違っている」（P.86）のがわかってくる。学校の修身を絶対に守っている人はかえって「馬鹿」（P.86）に見えて、「出世しないで、いつも貧乏」（P.86）だと、「私」はわかっている。そのゆえに、「変人」（P.86）と見られて「馬鹿あつかい」（P.86）されることがこわい「私」は「お母さんや皆に反対してまで自分の考えかたを伸す」（P.86）ことができない。そのような自分の気持を親に打ち明けても理解されなくて、ただ「中心はずれの子」に扱われた。「私」は「早く道徳が一変するときが来ればよいと思う」（P.87）しかできない。もしそのような時が来たら、自分は「人の思惑のために毎日をポタポタ生活することも無くなる」（P.87）と信じている。こうしてみれば、『女生徒』の「私」は『斜陽』のかず子とは共通点を持っていると思う。感性に満ちた『女生徒』の「私」のように、かず子は女学生の頃「更級日記の少女」（P.210）とよばれたこともある。一方、『女生徒』の「私」は道徳が変るときを待っていることに対して、『斜陽』のかず子は自分を縛っている道徳を自ら破ろうとする。かず子は「女大学」にそむいても、「芭蕉の葉が散らないで腐つて行くやうな」（P.182）生活から逃れようとする。こうしてみれば、『女生徒』の「私」を『斜陽』のかず子の前身と見てもよいのではないだろうか。

---

[67] 渡部芳紀「太宰治論」――中期を中心として――、『太宰治Ⅱ』日本文学研究資料刊行会に収録、有精堂、1985.9、P.39
[68] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.113

「自然になりたい、素直になりたい」と祈っているのだ。本なんか読むの止めてしまえ。観念だけの生活で、無意味な、高慢ちきの知ったかぶりなんて、軽蔑、軽蔑。やれ生活の目標が無いの、もっと生活に、人生に、積極的になればいいの、自分には矛盾があるのどうのって、しきりに考えたり悩んだりしているようだが、おまえのは、感傷だけさ。」（『女生徒』P. 92）

「私」は先生の絵のモデルになってあげていながら、例文②のようなことを頭の中でいっぱい回らせる。自分の感傷はやはり観念のものに過ぎなくて、無意味なものだと知っている。生活にもっと積極的になればよいのだという考えは、『おさん』の「私」にも通じると思う。『女生徒』の頃の「私」はまだそれができないが、「正しい態度で無くったってかまわない、そんな、道徳なんてどうだっていい、ただ少しでも、しばらくでも、気持の楽な生き方をしたい」（P. 281）と思っている『おさん』の「私」は「気の持ち方を、軽くくるりと変える」（P. 284）ことが真の生き方だと信じるようになった。

明日もまた、同じ日が来るのだろう。幸福は一生、来ないのだ。それは、わかっている。けれども、きっと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいのでしょう。わざと、どさんと大きい音たてて蒲団にたおれる。ああ、いい気持だ。蒲団が冷いので、背中がほどよくひんやりして、ついうっとりなる。幸福は一夜おくれて来る。ぼんやり、そんな言葉を思い出す。幸福を待って待って、とうとう堪え切れずに家を飛び出してしまって、そのあくる日に、素晴らしい幸福の知らせが、捨てた家を訪れたが、もうおそかった。幸福は一夜おくれて来る。幸福は、――」（P. 117～118）

「私」は青春の煩悶のせいで、少し厭世的な思想をも持っている。「自分も雌の体臭を発散させるようになって行くのか」（P. 94）という大人になることが怖くて拒否していて、「少女のままで死にた」（P. 94）い。今朝電車にのったとき、一人の男性が自分に向けて笑ったりすると、「女は、自分の運命を決するのに、微笑一つで沢山なのだ」（P. 88）という、簡単に自分の運命が決定される。しかし、「この人のために一生つくすのだ、とちゃんと覚悟がきまったら、どんなに苦しくとも、真黒になって働いて、そうして充分に生き甲斐があるのだから、希望があるのだから、私だって、立派にやれる」（P. 106）と、自分は誰かの奥さんになっても悪くないとでも思っている。そのような矛盾した自分は「わがままな子供ばっかりだ」（P. 113）と知っているが、「子供みたい、きれいなところ」（P. 113）を失い続けるのが怖くてやりきれない気持にな

る。「もう少し生きていたらわかることなのに、もう少し大人になったら、自然とわかって来る」（P.116）という大人の台詞が理解できないでもないが、「私」はやはりいまの煩悶がたまらない。「自分たちだけの幸福なんてあるはずは無いぢやないか」（P.246）といった『斜陽』の上原のように、『女生徒』の「私」も例文③のように「幸福は一生、来ないのだ」と思っている。しかし、その間に決定的な違いがある。「黄昏だ」（P.248）といった上原に対して、『女生徒』の「私」は『斜陽』のかず子が「朝ですわ」（P.248）といったように、「あす」を信じているのである。

國立政治大學
National Chengchi University

第六章、結論

『ヴィヨンの妻』の「私」は最後の場面で、椿屋に泊めてもらう事を夫に提議した。その意味は、妻の「私」が妻という身分から脱出して、これから椿屋の「さつちゃん」として生きていくことを示唆している。「私」にとって、家庭はすでに無意味なものに過ぎない。自分の幸福は椿屋の「さつちゃん」として始めて獲得しえたものなのである。一方、「私」を家庭内に引き止めた夫は今度かえって妻にこれからの行き方を開示された。夫は一度妻の幸福感を否定したが、いま、彼の論理はもう妻には適用していない。彼のその擬態もすでに妻に看破されたが、妻はその夫の擬態を暴きだそうとしなくて、ただ無頼の夫をそのまま受け入れて、彼女の自身の生きて行こうとする意志を表明した。

『斜陽』では、敗戦後の混乱な世界に対して、生きて行こうとするかず子は焦燥不安な気持を感じた。彼女は今までの世間の論理に疑いを抱いて、お母様の犠牲によって獲得した生きていく意志と、弟から得た思想とを巧みに結びついて、自分のいき方を模索している。そのようなかず子の辿りついた結論は道徳に背いても恋を求めようとするものなのである。かず子はその不良になりたがっている意志を上原に託したが、結局上原の擬態を看破して、その恋も破滅した。にもかかわらず、その恋をし遂げる過程のなかで、美しく一生を終えたお母様、貴族性を取り除けなくて自殺した弟、そして堕落して行って自滅を迎えた上原、いくつかの犠牲を通して、かず子は自分の生き方を確立した。

一方、『おさん』の「私」は『ヴィヨンの妻』の「私」や『斜陽』のかず子と違って、家庭内に止まっていたが、彼女も道徳や思想などの論理を無視して生きていく意志を表明した。『おさん』の「私」は夫がほかの愛人がいるから苦しいが、夫が楽になれば平和な家庭を破壊してもよいと思っている。しかし、夫はなかなか妻のその心情がわからなくて、他の女と心中してもなお革命を唱え、自分の弱さを隠そうとしていた。そういう点から見れば、妻のほうはかえって「気の持ち方を、軽くくるりと変へるのが真の革命」という真の革命の意味をちゃんと理解したのではないだろうか。何よりも生きていくことが大切なのではないだろうか。だから、妻は夫が「だめな人」と批判を下した。

作家の実生活と結びついてみれば、太宰における「理想的な女性像」がそこから浮き彫りされる。戦後に入って、太宰の実生活は中期の穏やかさが一掃され、激しく展開する。昭和二十一年、一年半ぶりに東京三鷹の旧居に戻ると、流行作家としての生活が嵐のように始まり、二年後の死まで続くことになる[69]。昭和二十二年六月末ごろから不眠症がひどくなり、酒量も増え、帰宅すると床に就くようになる。八月下旬、胸部疾患も悪化した[70]。奥野健男氏はこの時期

[69] 饗庭孝男『太宰治論』、講談社、1976. 12、P.151
[70] 鶴谷憲三『Spirit　作家と作品』、有精堂、1994.4、P.164

の太宰の生活に就いても「ジャーナリズムの注文に応じて書きなぐり、それで印税を稼いでは、取り巻きに囲まれて、誰彼なく奢って、湯水のごとく金を浪費する、全く無意志者のような、全く自己感情が喪失していた生活を送っていました」[71]と記している。そういうような太宰の実生活は『ヴィヨンの妻』の夫大谷の形象と一致するといっても良いのだろう。夫のデカダンの生活を優しく受け入れた「私」という妻の理想像が太宰の秘めた希求の一部であるかもしれない。また、『斜陽』のモデルとなった太田静子は、太宰の作品の愛読者であり、昭和十六年に友人と太宰を訪ねてから二人の交際が始まった。戦後、神奈川県下曽我の山荘で母を失い一人住まいをしていた静子を太宰が訪ね、その日記を借りて『斜陽』を書き始めた。さらに太宰は、『斜陽』執筆開始後まもなく、静子の懐妊を知らされた[72]。その『斜陽』の上原の無責任な態度を太宰が自分自身の姿を託していたかもしれない。かず子の行き方も未婚妊娠の女に送った礼賛の心情表現なのではないだろうか。また、昭和二十三年六月十三日、太宰は山崎富栄と玉川上水に入水して死んだ。『おさん』の夫の造形から見れば、それも妻の逆の視線から夫への批判と反乱として見立てて妥当なのであろう。

後期の「女語り」の作品における女主人公は強く生命力を表現する一方、女自身に対する感覚や肉体性の描写は中期の「女語り」より薄くなるのではないのか。『女生徒』のような女性の心理に関する繊細な描写や、『皮膚と心』のような肉体に関する苦悩などとは例の三作には比重が低くなる。また、男主人公の弱さは女語りという手法によって相対化されるが、男自身の思想や論理は曖昧な点がたくさん残っている。それは女装した策略の限界なのではないだろうか。男の理解し得ない生命力を持った女たちは思想や論理をあまり持っていないが、生きていくために正面から世間や既成道徳に向かって進んでいく。しかし、太宰が男性作家である以上、やはり女の心理を完全的に把握できないせいで、女は思想や論理を持っていない人間に設定して男の思想や論理で補完しか出来ないのではないだろうか。一方、男たちは世間と戦う勇気を持っていないばかりか、革命や義などという論理でデカダンスの振りを装っているしか何も出来ない。太宰治の世界では、それは男女が互いを理解できない運命かもしれない。

[71] 奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6、P.146~147
[72] 細谷博『太宰治』、岩波書店、1998.5、P.146~147

参考文献（年代順）

Ⅰ、単行本：

太宰治『ヴィヨンの妻』、新潮社、1950.12
太宰治『斜陽』、新潮社、1950.11
太宰治『走れメロス』、新潮社、1967.7
東郷克美『作品論　太宰治』、双文社、1974.6
太宰治『きりぎりず』、新潮社、1974.9
饗庭孝男『太宰治論』、講談社、1976.12
水田宗子『ヒロインからヒーローへ』、田畑書店、1982.12
渡部芳紀『太宰治　心の王者』、洋々社、1984.5
奥野健男『太宰治論』、新潮文庫、1984.6
相馬正一著、『評伝太宰治』第三部、筑摩書房、1985.7
日本文学研究資料刊行会『太宰治Ⅱ』、有精堂、1985.9
佐古純一郎『太宰治におけるデカダンスの倫理』、現代文芸社、1988.5
日本文学協会『日本文学講座６　近代小説』に収録、大修館書店、1988.6
三好行雄『太宰治必携』、学灯社、1988.7
梅田鉄夫編『太宰治・第五号』、洋々社、1989.6
吉田和明『太宰治というフィクション――さまよえる「非在」』、パロル舎、1993.6
神谷忠孝・安藤宏『太宰治全作品研究事典』、勉誠社、1995.11
安藤宏『日本文学研究論文集成 41　太宰治』、1998.5
野原一夫『太宰治　生涯と文学』、ちくま文庫、1998.5
細谷博『太宰治』、岩波書店、1998.5
太宰治『太宰治全集　１０』、筑摩書房、1999.1
戸松泉『小説の（かたち）・（物語）の揺らぎ－日本近代小説「構造分析」の試み』、翰林書房、2002.2
安藤宏『太宰治　弱さを演じるということ』、ちくま新書、2002.10
森田喜郎『文学にみられる「運命」の諸相―近世文学・太宰治・芹沢光治良―』、2003.4
太宰治『きりぎりす』、新潮文庫、2005.12
近松門左衛門『曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島―現代語訳付き』、角川書店、2007.3

國立政治大學 National Chengchi University

Ⅱ、雑誌：

原子朗「太宰治における（をんなの言葉）」、『国文学』、1987.1
江種満子「ヴィヨンの妻」――妻の「私」、『国文学』、1999.6
中村三春「『斜陽』のデカダンスと（革命）――属領化するレトリック、『国文学』、1999.6
和田季絵「斜陽」、『国文学　解釈と鑑賞』、1996.6
安藤宏「太宰文学における（女性）」、『国文学　解釈と鑑賞』、1999.9
坪井秀人「語る女たちに耳傾けて――太宰治・女性独白体の再検討」、『国文学』、2002.12

Ⅲ、論文

鳥居邦朗「斜陽」、『作品論太宰治』に収録、双文社、1974.6
三好行雄「ヴィヨンの妻」、『作品論太宰治』に収録、双文社、1974.6
奥野健男「太宰治再説」、『太宰治論』に収録、新潮文庫、1984.6
渡部芳紀「太宰治論――中期を中心として――」『太宰治Ⅱ』日本文学研究資料刊行会、有精堂、1985.9
東郷克美「太宰治の話法　女性独白体の発見」、『日本文学講座 6　近代小説』に収録、日本文学協会編、大修館書店、1988.6
榊原理智「太宰治『ヴィヨンの妻』試論――「妻」をめぐる言説――」、『日本文学研究論文集成 41　太宰治』に収録、安藤宏編、1998.5
曽根博義「女性独白体の魅力」、『近代日本文学のすすめ』に収録、岩波書店、1999.5
戸松泉「斜陽」の（かたち）覚書――かず子の「手記」としての世界――」『小説の（かたち）・（物語）の揺らぎ－日本近代小説「構造分析」の試み』に収録、翰林書房、2002.2